

Japan Foundation for
Regional Art・Activities

平成28年度
公共ホール音楽活性化事業
報告書
CONCERT&ACTIVITY

一般財団法人地域創造

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携の下に、財政支援、研修・交流、情報提供、調査研究などの事業を実施しております。

これらの事業の一環として、地域創造では平成10年度から「公共ホール音楽活性化事業」を実施しております。

この事業は、全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設等での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施するものです。地域創造では、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援しています。

この報告書は、全国17の団体との共催により実施された平成28年度「公共ホール音楽活性化事業」の各地の取り組みを取りまとめたものです。報告書の中では、実施団体からの報告に加え、担当された方の事業を実施しての成果や反省点・課題を掲載しております。また、各団体に派遣されたコーディネーターのレポートを掲載し、事業に関係して気付いた点や企画・制作のノウハウや事業を実施する過程において生じた様々な課題や問題点をケーススタディとして記録するように努めました。あわせて、平成27年度から28年度にかけて広島県で実施された「公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業」についてもとりまとめています。

この報告書が公共ホールで自主事業に取り組む方の参考となり、企画・運営のお役に立てば幸いです。

終わりに、各公演を主体的、積極的に実施していただいた実施団体、事業の実施にあたり貴重なアドバイスやご尽力をいただいたコーディネーター、一般社団法人日本クラシック音楽事業協会、その他多くの関係者の皆様方のご協力のもと、平成28年度の事業を終了することができましたことに対して、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

一般財団法人地域創造

目次

〈本文中の社名、所属、役職等は平成28年度のものです〉

第1部 平成28年度公共ホール音楽活性化事業の概要

実施概要	2
登録アーティスト／コーディネーター	3
実施団体	4
全体研修会実施概要	5

第2部 平成28年度公共ホール音楽活性化事業事例紹介・アシスタントレポート

平川市 (青森県)	8
日立市 (茨城県)	12
吉川市 (埼玉県)	19
美里町 (埼玉県)	24
宮代町 (埼玉県)	29
鎌ヶ谷市 (千葉県)	33
文京区 (東京都)	39
滑川市 (富山県)	45
蕪崎市 (山梨県)	50
須坂市 (長野県)	55
関市 (岐阜県)	60
城陽市 (京都府)	64
王寺町 (奈良県)	69
上富田町 (和歌山県)	74
安来市 (島根県)	80
小松島市 (徳島県)	85
九重町 (大分県)	90

第3部 平成28年度公共ホール音楽活性化事業コーディネーターレポート

小澤 櫻作 (チーフコーディネーター)	96
丹羽 徹 (コーディネーター)	98
花田 和加子 (コーディネーター)	100
山本 若子 (コーディネーター)	102

第4部 平成27-28年度公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業

実施概要	106
派遣アーティストプロフィール	125
レポート	
中村 透 (チーフコーディネーター)	128
菱川 浩二 (コーディネーター)	130
花田 和加子 (コーディネーター)	132
加藤 直明 (コーディネーター)	133
三浦 幸恵 (アシスタントコーディネーター)	135

丹羽 梓	(アシスタントコーディネーター).....	136
桜井 しおり	(アシスタントコーディネーター).....	138
高井 晴美	(事業担当者).....	140

第1部

平成28年度公共ホール 音楽活性化事業の概要

平成28年度公共ホール音楽活性化事業 実施概要

1 事業趣旨

全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを、公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施する。また、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援する。

2 実施内容

(1) 実施団体 全国17団体

※地方公共団体または指定管理者等。原則として都道府県と政令指定都市及びそれらが関わる指定管理者等は除く。

(2) 研修事業 ①全体研修会

平成28年4月18日(月)～20日(水) / (一財)地域創造、HAKUJUホール
開催地の公共ホール・企画担当者等を対象とした研修を実施。

②個別研修の実施

広報を始める前の段階(公演2、3カ月前)に、担当コーディネーターが現地での事前打ち合わせ等を行い、事業の円滑な実施のための助言を行った。

(3) 公演事業 公演事業の実施(全国17地域) 平成28年9月～平成29年2月

登録アーティストと共演者を数日間の日程で地域に派遣し、開催地の公共ホールとの共催でコンサートおよびアクティビティを実施した。

①コンサート 身近で、親しみのあるクラシック演奏会

②アクティビティ 出前コンサート、レクチャー、ワークショップ等地域との交流を図るプログラム

3 費用負担

一般財団法人地域創造と開催地の地方公共団体との経費区分は下記の通りとした。

(1) 一般財団法人地域創造が負担する主な経費

①演奏家及びコーディネーターの派遣に係る経費

(演奏家の出演料、交通費(現地移動費を除く)、宿泊費、日当、楽器運搬費、保険料(演奏家)、演奏家派遣に関するマネジメント料)

②地域との交流を図るプログラムの実施に係る経費のうち10万円を負担

(2) 開催地の地方公共団体が負担する主な経費

演奏家の派遣に係る経費以外に係る経費(現地移動費、舞台制作費、広報宣伝費、全体研修会への参加旅費など)

4 主催・共催等

主 催：開催地の地方公共団体等

共 催：一般財団法人地域創造

制作協力：一般社団法人日本クラシック音楽事業協会

平成28年度登録アーティスト／コーディネーター／実施団体

1 平成28年度・29年度登録アーティスト

岩崎 洵奈	(ピアノ)	コンサートイマジン
坂口 昌優	(ヴァイオリン)	株式会社ミリオンコンサート協会
加藤 文枝	(チェロ)	株式会社パシフィック・コンサート・マネジメント
福川 伸陽	(ホルン)	株式会社ヤマハミュージックアーティスト
喜名 雅	(チューバ)	株式会社プロ アルテ ムジケ
ヴィタリ・ユシュマノフ	(声楽 (バリトン))	株式会社淡海・MAP
塚越 慎子	(マリンバ)	株式会社AMATI

2 コーディネーター

小澤 櫻作	(上田市交流文化芸術センター プロデューサー)
丹羽 徹	(一般社団法人日本クラシック音楽事業協会 理事事務局長)
花田 和加子	(keynote代表、ヴァイオリニスト)
山本 若子	(有限会社N. A. T取締役)

3 サブコーディネーター

菱川 浩二	(株式会社TmZm代表取締役)
菊地 俊孝	(公益財団法人東松山文化まちづくり公社 総務・文化グループリーダー)
柿塚 拓真	(豊中市立文化芸術センター開設準備室ディレクター)
三浦 幸恵	(神奈川県立音楽堂 業務課)
櫻井 しおり	(ワークショップデザイナー、ピアニスト)
佐藤 さやか	(公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化会館事業企画課)
丹羽 梓	(横浜国立大学 都市イノベーション学府博士課程前期)

4 アシスタントスタッフ

高荷 春菜	(NPO法人STスポット横浜 地域連携事業部)
山田 知代	(ヴァイオリン講師、(有)おふいすべがスタッフ)

5 アドバイザー

能祖 将夫	(北九州芸術劇場プロデューサー、桜美林大学准教授)
楠瀬 寿賀子	(公益財団法人せたがや文化財団音楽事業部)
吉本 光宏	(株式会社ニッセイ基礎研究所 研究理事 [社会研究部 芸術文化プロジェクト室長])

6 実施団体

No	都道府県	市町村	実施団体	開催会場	開催時期	派遣アーティスト	担当コーディネーター
1	青森県	平川市	平川市	平川市文化センター文化ホール	9/7(水)～9/9(金)	岩崎 洵奈	丹羽 徹 菊地 俊孝
2	茨城県	日立市	(公財)日立市民科学文化財団	日立シビックセンター音楽ホール	2/2(木)～2/4(土)	塚越 慎子	花田 和加子 山田 知代
3	埼玉県	吉川市	吉川市教育委員会	吉川市中央公民館ホール	2/16(木)～2/18(土)	塚越 慎子	小澤 櫻作 三浦 幸恵
4	埼玉県	美里町	美里町遺跡の森館自主事業実行委員会	美里町遺跡の森館ホール	2/9(木)～2/11(土)	岩崎 洵奈	花田 和加子 桜井 しおり
5	埼玉県	宮代町	進修館M&Nコンソーシアム 代表団体 NPO法人MCAサポートセンター	宮代町コミュニティセンター進修館	9/9(金)～9/11(日)	福川 伸陽	小澤 櫻作 高荷 春菜
6	千葉県	鎌ヶ谷市	鎌ヶ谷市教育委員会	きらりホール	10/6(木)～10/8(土)	岩崎 洵奈	山本 若子 三浦 幸恵
7	東京都	文京区	(公財)文京アカデミー	文京シビックホール	1/17(火)～1/19(木)	坂口 昌優	花田 和加子 桜井 しおり
8	富山県	滑川市	(一財)滑川市文化・スポーツ振興財団	滑川西地区コミュニティホール	12/8(木)～12/10(土)	塚越 慎子	山本 若子 柿塚 拓真
9	山梨県	韮崎市	(一財)武田の里文化振興協会	東京エレクトロン韮崎文化ホール	10/13(木)～10/15(土)	喜名 雅	花田 和加子 菱川 浩二
10	長野県	須坂市	須坂市	須坂市文化会館	11/17(木)～11/19(土)	ヴィタリ・ユシュマノフ	山本 若子 高荷 春菜
11	岐阜県	関市	関市	関市文化会館	12/1(木)～12/3(土)	喜名 雅	丹羽 徹 高荷 春菜
12	京都府	城陽市	(公財)城陽市民余暇活動センター	文化パルク城陽ふれあいホール	11/25(金)～11/27(日)	加藤 文枝	小澤 櫻作 山田 知代
13	奈良県	王寺町	王寺町	王寺町文化福祉センター	1/19(木)～1/21(土)	塚越 慎子	山本 若子 佐藤 さやか
14	和歌山県	上富田町	上富田町	上富田文化会館	2/17(金)～2/19(日)	加藤 文枝 坂口 昌優	山本 若子 菱川 浩二
15	島根県	安来市	安来市	広瀬中央交流センター	10/6(木)～10/8(土)	ヴィタリ・ユシュマノフ	丹羽 徹 丹羽 梓
16	徳島県	小松島市	小松島市	小松島市ミリカホール	12/21(水)～12/23(金・祝)	福川 伸陽	小澤 櫻作 三浦 幸恵
17	大分県	九重町	九重町教育委員会	九重文化センター	9/30(金)～10/2(日)	加藤 文枝 ヴィタリ・ユシュマノフ	小澤 櫻作 菊地 俊孝

平成28年度公共ホール音楽活性化事業 全体研修会実施概要

1 概要

平成28年度の実施団体担当者を対象として、当事業の基本的な考え方、過去の事例紹介などのゼミを開催した。2日目には登録アーティストによる演奏とトークのプレゼンテーションと交流会を実施し、最終日はグループに分かれて企画検討会議及び発表を行った。

2 参加者

平成28年度事業実施団体 担当者

3 日程

平成28年4月18日（月）～20日（水）（3日間）

4 会場

4月18日（月）・20日（水）：一般財団法人地域創造 会議室
4月19日（火）：HAKUJU ホール

5 実施団体研修スケジュール

4月18日（月）

時間	会場：地域創造 会議室
13:00～13:10	オリエンテーション
13:10～15:10 (120分)	ワークショップ セレノグラフィカ 隅地 茉歩+阿比留 修一（ダン活支援登録アーティスト）
休憩（20分）	
15:30～16:00 (30分)	おんかつを知る Vol.1～基礎編～ 小澤 櫻作
16:00～16:30 (30分)	おんかつを知る Vol.2～実務編～ 地域創造
休憩（10分）	
16:40～19:00 (140分)	おんかつを知る Vol.3～事例紹介編～ I部：太宰府市事例（45分）※担当者の思い 北郷 寛樹（担当者）、森岡 有裕子（登録アーティスト）、小澤 櫻作 II部：演奏家事例（45分）※演奏家の思い 新居 由佳梨（登録アーティスト）、丹羽 徹、花田 和加子、 <5分休憩> III部：事業担当者の役割とは（45分） 柿塚 拓真

4月19日（火）

時間	会場：HAKUJU ホール（渋谷区富ヶ谷）
10：00～11：30 (90分)	おんかつから始まるホールと地域の未来 吉本 光宏（アドバイザー）
昼食休憩（60分）	
12：30～14：20 (110分)	フィードバック～これまでのゼミを振り返って～ 小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 和加子、山本 若子
14：20～14：30 (10分)	プレゼンテーションの聴き方 小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 和加子、山本 若子
休憩・移動（30分）	
15：00～18：35	平成28・29年度登録アーティスト公開プレゼンテーション 塚越 慎子（マリンバ） 岩崎 洵奈（ピアノ） 坂口 昌優（ヴァイオリン） ＜休憩（20分）＞ 喜名 雅（チューバ） 加藤 文枝（チェロ） ＜休憩（20分）＞ 福川 伸陽（ホルン） ヴィタリ・ユシュマノフ（声楽（バリトン））
休憩・移動（25分）	
19：00～21：00	交流会 参加者、H28・29登録アーティスト、コーディネーター

4月20日（水）

時間	会場：地域創造 会議室
10：00～12：00 (120分)	フィードバックとグループ別企画検討 小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 和加子、山本 若子
昼食休憩（60分）	
13：00～15：00 (120分)	企画発表 小澤 櫻作、丹羽 徹、花田 和加子、山本 若子
15：00～15：15 (15分)	事務連絡、閉講式

第2部
平成28年度公共ホール
音楽活性化事業
事例紹介・
アシスタントレポート

実施団体：平川市

実施時期：平成28年9月7日（水）～平成28年9月9日（金）

出演アーティスト：岩崎 洵奈（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：クラシックの世界へようこそ

期 日：平成28年9月7日（水） 10：45～11：30

会 場：平川市文化センター 文化ホール

参加者：小和森小学校 小学3年生 35名

文化ホール舞台にあるグランドピアノの大屋根を外し、生徒をピアノの回りに座らせるスタイルでアウトリーチを行った。年齢が低いこともあり、オルゴールをピアノの中に入れる場面やピアノの下に潜らせる場面などの児童の反応が大変よく、楽しんでいる様子が見えられた。



タイトル：クラシックの世界へようこそ

期 日：平成28年9月7日（水） 13：30～14：15

会 場：平賀西中学校 音楽室

参加者：平賀西中学校1学年 55名

文化ホール同様、ピアノの大屋根を外し、その周りに生徒を並べるスタイルでのアウトリーチを行った。対象児童が中学生となったことから、1回目より若干長めの曲目をセレクトした。小学生と違い、反応は鈍い部分もあったが、それでも都会の生徒に比べればとてもよいリアクションをしていた、とのお話であった。



タイトル：クラシックの世界へようこそ

期 日：平成28年9月8日（木） 11：25～12：10

会 場：碓ヶ関小学校 音楽室

参加者：碓ヶ関小学校 小学4・5・6年生 40名

音楽室自体が若干段差となっていることから、これまでと違いピアノを奥に、生徒が通常の教室のように座るスタイルでのアウトリーチとなった。今回はアウトリーチ終了後、給食を生徒らと一緒に取った。給食ルームでの全生徒一斉の給食であるため、多人数と交流が図れた。



タイトル：クラシックの世界へようこそ

期 日：平成28年9月8日（木） 14：00～14：45

会 場：碓ヶ関中学校 音楽室

参加者：碓ヶ関中学校 全学年 37名

生徒数が少ないため、学校全生徒を対象とし行った。これまでと同様、大屋根を外し生徒を回りに座らせるスタイルで行った。3学年あるものの、すべて地元の子であることから仲はよく、これまでで一番よい反応を見せていた。ピアニストも1回目から改良し、ずいぶん内容の濃いアウトリーチを行うようになった。



コンサート

タイトル：クラシックの世界へようこそ

期 日：平成28年9月9日（金） 18：30開演

会 場：平川市文化センター 文化ホール（定員：740人）

入場者数：192人

前売券の販売状況はあまり芳しくなかったものの、前日までのアウトリーチが新聞掲載されたこともあり、当日は問合せ及び当日販売券がよく出た。観客は192名と、正直もう少し欲しいところではあったが、来た観客には楽しんでいただけたものと感じられた。



① 応募の動機・事業のねらい

平成28年度は平川市市制10周年であるため、記念事業として生の演奏会を開催すること、また自主事業の企画のための友好的ノウハウを学び、継続した事業の実施を行う。

② 企画のポイント

当市の児童がよくピアノを習い事として選択していることから、ピアニストのアウトリーチ及びコンサートを行うことにより、さらに興味を持たせる。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

アウトリーチの実施が初めてであったことから、その手法、手続き等に苦勞した。

コンサート部分についても、これまでは貸館が中心であり、また自主事業であっても楽屋、舞台上の調整はすべて出演者側で企画、運営していたため、今回のような企画運営部分を行うノウハウがなく、一番手間取った部分であった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

今回に限り、コーディネーター、アシスタントがついていたため、やるべきこと、また気をつけること等の助言をいただき、またどのような進捗で進めていくのか、を実際の動きの中で見せていただきながら行うことができた。

⑤ 事業を実施しての成果

アウトリーチという手法が、学校のみならず市長を含めた市関係者にも好評に受け止められており、今後も継続して事業を行える土壌ができたものと考えている。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

コンサート部分への宣伝方法については、もう少し工夫があったのではないかと、またアウトリーチとコンサートの連動についても、もう少し工夫ができればと考えている。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

市単独でのクラシックコンサートには、やはり集客に不安があるため、周辺の市町村からも幅広く集客できるよう情報発信を行えるようなホールにしていかななくては、と考えている。

青森県平川市は、青森県南部、津軽平野の南東部に位置し、東は十和田湖を境に、十和田市、秋田県小坂市、西は平川を隔てて弘前市、大鰐町と接し、北は青森市、黒石市、田舎館村、南は秋田県大館市に接した自然豊かな土地である。

今回、おんかつ事業を実施した平川市文化センターは貸館業務を主軸に行い、演歌、カラオケ大会などを中心に利用されている。クラシック音楽が根付いているとは言い難い現状からこの事業に参加された。担当者の葛西氏は、ホール周辺では児童の習い事としてピアノが定着していて、ピアノ演奏会では地域の人がホールを訪れていることから、クラシック音楽を地域に根付かせるきっかけとしてピアノを切り口にクラシックへの展開を考えた。そこで、葛西氏が選んだアーティストはピアノの岩崎侑奈さん。岩崎さんのピアノをまず子供達に聴かせることからと考え、市内小学校から小学校2校と中学校2校でアクティビティを実施した。ホール近隣の小学校、中学校とホールから少し離れた小学校、中学校で実施することになった。

アクティビティの一つ目、小和森小学校は校舎を改装中ということで、ホール舞台上で実施。ピアノを囲んで椅子を設置し、ピアノは大屋根を外して、平台の上に椅子を置き、子供達が少し上からピアノの中を覗き込めるようにする工夫も施した。岩崎さんがドビュッシーの「金色の魚」を弾き、どんな魚が想像できたかを尋ねると、綺麗な色の魚、サバ、サメ、マグロという子も、子供らしい素直な感想で場の空気も和んだ。

平賀西中学校では、「幻想」から始まり、オルゴールによるピアノ解説を経て、ベートヴェン「月光」。ピアニストの指先をじっと見つめる学生の姿がとても印象的で、集中して聴き入っていることが伝わってきた。ピアノ側に移動してピアノの近くで聞いてみようのコーナーでは少し気後れする生徒もあり、この辺はやはり中学生らしい。

碓ヶ関小学校でのアクティビティでも、大屋根を外してピアノの構造を説明しながら、ショパンの「子犬のワルツ」やドビュッシーの「金色の魚」など演奏。子供達は普段のピアノから迫力ある音色が聞こえてきたことに驚きながら、聴き入っていた。アクティビティのあとは給食交流が行われ、恥ずかしそうに、また、楽しそうに岩崎さんと話しをしていた。

最後のアクティビティで2校目となる碓ヶ関中学校でのアウトリーチ。中学校でのアウトリーチは、比較的リアクションが少なくなりがちだが、碓ヶ関中学校の生徒はリアクションがないどころか積極的に参加しているという印象が強かった。平賀西中学校でもそうであったが、集中するところは集中してといったように、その瞬間を楽しんでいた。

コンサートには地域の方々や学生なども会場に足を運んでくれて、ベートヴェン「月光」やショパン「幻想即興曲」など数曲を演奏。コンサート中盤では、ピアノのハンマーに曲名を書いておき、観客が選んだ曲を弾くコーナーもあり、岩崎さんならではの楽しませるコンサートに、来場の方々もとても満足して、楽しんでいた。

おんかつでは、子供たちの体験ということだけでなく、ホールと教育機関というとても重要な回路の構築がされた。この回路の構築こそが、このおんかつ事業の大きな目的である。平川市のおんかつでは、アクティビティに小学校と中学校を選択した。若い世代からクラシックに興味をもってもらいたいとの担当者の思いからだが、各学校とも大変喜んでくださり、ホールの活動にも興味を持ってくださった。今後、ホールが様々な事業を実施していく中で、今回構築した回路はかけがえのないものとなるのではないだろうか。今後も多岐にわたり回路が構築され、より市民に近いホールとなることを期待したい。

実施団体：公益財団法人日立市民科学文化財団

実施時期：平成29年2月2日（木）～平成29年2月4日（土）

出演アーティスト：塚越 慎子（マリンバ） 志村 和音（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：心、つか“まれっと”コンサート

期 日：平成29年2月2日（木） 11：30～12：15

会 場：宮田小学校 音楽室

参加者：5年1組 33人

タイトルは茨城弁とマリンバの「マレット」をかけて、「心、つかまれちゃうよ？」の意。塚越さんは木琴、志村さんは鍵盤ハーモニカを弾きながら登場し、子どもたちは興味津々だった。色々なリズムの唱歌「雪」を聴いてどんな風を感じたかについては、恥ずかしくて初めは発言する子が少なかったが、塚越さんが上手くコミュニケーションを取ってくださり子どもたちの心がほぐれていった。

タイトル：心、つか“まれっと”コンサート

期 日：平成29年2月2日（木） 13：50～14：35

会 場：宮田小学校 音楽室

参加者：5年2組 32人

給食交流を行った後でのアクティビティだったため、和やかな雰囲気スタートした。先ほどのクラスでも行った「雪」のイメージでは、「楽しい感じ？悲しい感じ？」「晴れ？それとも雨？」と子どもたちに問いかけ、中には「曇り！」という子もいた。リズムによって、同じ曲でも雰囲気が変わることに、人と感じ方が違って良いんだということが伝わったアクティビティだった。

タイトル：心、つか“まれっと”コンサート

期 日：平成29年2月3日（金） 10：35～11：20

会 場：仲町小学校 音楽室

参加者：5年生 37人

今回伺ったのは全て5年生だったが、一番元気の良いクラスで反応も良かった。アンダーソンの「タイプライター」で実物が登場した時には大歓声が上がり、演奏後「ドレミの音階が無くても音楽になるというのが打楽器の特色のひとつ」との塚越さんの言葉に、とても納得した様子だった。新聞紙を使ってリズムを作る場面では、曲に合わせてダンスをしながら新聞紙を破る子もおり、大盛り上がるのアクティビティだった。



タイトル：心、つか“まれっと”コンサート

期 日：平成29年2月3日（金） 14：30～15：15

会 場：中小路小学校 音楽室

参加者：5年生 24人

日立シビックセンターから一番近い中小路小学校は、日立駅に至近の学校でありながら、今回訪問した中では最も小規模の学校。比較的小となしい子が多い印象だったが、最後に演奏したモンティの「チャルダッシュ」は皆楽器の近くに座って熱心に鑑賞した。楽器をよく観察し構造に興味を持った子が多かったようで、終演後には沢山の質問が寄せられた。

コンサート

タイトル：親子で楽しむコンサート 塚越慎子の魔法のマリンバ

期 日：平成29年2月4日（土） 14：00開演

会 場：日立シビックセンター 音楽ホール（定員：711人）

入場者数：522人

休憩なし1時間のコンサート。アクティビティ先の児童から募った「ジュニア・サポーター」と準備を進めてきた。彼女達には「魔女見習い」に扮してもらい、出演者、裏方として活躍してもらった。最初に演奏した「剣の舞」では、マリンバの陰にこっそり隠れていた塚越さんが突然飛び出して演奏する、という演出を加えお客様を驚かせた。「リクエスト・コーナー」では、事前に行っていた投票で選ばれた曲「天国と地獄」を演奏。日立ならではのコンサートとなった。



① 応募の動機・事業のねらい

当財団では、平成28年度より地元のアーティストを育成し、市内の小学校をまわるアウトリーチを開始した。「おんかつ」を学校関係者に向けての協力者・理解者育成の機会として活用できたらと思い応募した。また、親子向けのコンサートの制作手法についても学びたいと思っていたため、アーティストと日立市独自の企画を作り上げられる点が魅力と感じた。

② 企画のポイント

コーディネーターの花田さんとのやりとりの中で、日立シビックセンターの課題と感じている点やこうなったらいいな…という未来像を浮き彫りにしていった。今回訪問する小学校全てが、当館に徒歩で来られるほど近隣ということもあり、その子どもたちにコンサートにも関わってもらい、施設に愛着を持ってもらいたいと思った。「ジュニア・サポーター」を募集したところ6名の子どもたちが集まり、全5回の会議を重ねて本番に臨んだ。コンサートをどうやって作っていくのか子どもたちに体験してもらうことができ、他校の友達もでき楽しんでもらえたようである。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

「ジュニア・サポーター」の会議を複数回設けると決めて募集をしたが、各会議で子どもたちに何を、どこまでやらせるかについて悩んだ。また、本番の衣裳はどうするか、誰に作ってもらうのかなど、やることの大枠が決まっても手探りで進めていく部分が多かった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

どのような子どもたちが応募してくれるかも分からなかったなので、まずは子どもたちに会って、様子を見ながら細かい内容を詰めていった。同じ部署内でも色々な人に相談し意見をもらった。衣裳については、当財団のオペラ事業に関わりのある衣裳ボランティアの方にお願ひし、以前作った衣裳をアレンジし、「魔女見習い」の衣裳に作り変えてもらった。ジュニア・サポーターが本番当日着用する小物作りの指導もボランティアの方にお願ひした。

⑤ 事業を実施しての成果

地元のアーティストの方にアクティビティを見に来ていただいたり、地元の新聞社やテレビ局の取材が入り、取り組みを広くPRすることができた。ジュニア・サポーターの子どもたちや衣裳ボランティアの方など、様々な人と繋がることができ、本番に向かって協力することができたのは、ホールの大きな財産だと感じる。学校の先生方にもとても喜んでいただき、次年度もぜひ来てほしいとの声をいただいた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

コンサートの入場者数は522人であったが、チケットプレゼントを出しての人数であったため、チケットの実売を伸ばし集客したかった。チラシをもっと工夫できたのではないかと、広報の仕方が適切であったかなどの課題が残る。「ジュニア・サポーター」の取り組みも今後どのように発展させていくかが検討事項である。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今回、コンサートで演奏した曲の中に、マリimbaのためにかけられた「リズムダンス」という現代曲があった。親子対象ということもあり、その曲以外はよく耳にする曲を選んでくださっていた。事業が終わって、来場して下さったアクティビティ先の先生に話を聞くと、「リズムダンスが一番良かった！」とおっしゃっていた。先生は音楽に特に詳しい方ではないが、先生以外にも同様の声を沢山耳にした。アーティストの力に圧倒されたと同時に、曲や楽器が持つ魅力がお客様に伝わったことが嬉しかった。そして、その曲を聴いてもらうために、いかにコンサートに足を運んでもらうか、私たちはよく考えなければならぬと感じた。また、鑑賞する立場だけではない関わり方を「ジュニア・サポーター」の子どもたちにしてもらいことができ、コンサートには色々な形があって良いのでは、と感じた。当館は複合施設であるため、施設の魅力や、日立の“人”を活かしたコンサート作り、事業作りをこれからやっていきたいと感じた。

JR日立駅前にそびえたつ、大きな球体が目印の日立シビックセンターは、音楽ホール、多目的ホール、大小さまざまな会議室やスタジオ、図書館、本格的なお茶室まで揃う複合施設である。中でも、科学館とプラネタリウムは多くの人にとって馴染みがある施設のようで、下見に伺った際も科学館には小学生が、プラネタリウムにはアートイベントを訪れている人が多く見られた。実際、アウトリーチ先の小学校でも、シビックセンターに行ったことがあるか？という質問に対しては、「科学館ならある！」という答えが多かった。そうしたイメージが強いため、「シビックセンターの音楽ホール」というと、市民にとってあまり馴染みがなく、特に子どもたちがあまり訪れる機会がないため、おんかつを通して、音楽ホールへのアクセスを身近なものとしたいという狙いがあった。

このおんかつには当初より、【日立の子どもたちを元気にする「おんかつ」】というコンセプトがあり、アクティビティを通して地元アーティストの育成型アウトリーチの地盤固めをしたいということと、コンサートは小学生をメインターゲットとした親子向けのものにしたいという目的があった。そうしたことから、アクティビティ4回は市内の小学校にて、コンサートは「親子で楽しむコンサート～塚越慎子の魔法のマリンバ～」として、マリンバ奏者の塚越慎子さんとピアニストの志村和音さんを迎えて行われた。

〈アクティビティ①～④ 小学校5年生×4クラス〉

塚越さんのアイデアいっぱいのアクティビティは、サプライズな登場の仕方で始まった。まずは鍵盤ハーモニカを演奏する志村さんだけが先に子どもたちの前に現れるが、塚越さんの姿は見え、遠くから木琴の音色だけが聞こえてくる。あれ？と子どもたちがざわざわしているところに、マーチング用の木琴を抱えた塚越さんの登場！「道化師のギャロップ」を軽快に演奏しながら教室を練り歩き、子どもたちの心をしっかりと掴んだ。木琴との比較でマリンバの特徴を説明した後、マリンバならではの音色や響きを体感してもらうために「白鳥」を、その後は、何でも打楽器として用いて音楽ができるということで、実際のタイプライターを使って「タイプライター」を演奏した。

続いては子どもたち参加型のアクティビティ。まずは、雪やこんこん♪で有名な「雪」の原曲とアレンジ版2種類を聴かせる。子どもたちには、それら3曲のうちから自分の好きなバージョンを選んでもらい、それぞれグループに分かれた後、志村さんのピアノに合わせて1人1人が新聞紙を用いて、ピアノとセッションをするという内容だ。新聞紙が楽器になるの!？と戸惑いや驚きを見せた子どもたちに、塚越さんはどのような方法があるかを問いかけ、びりびり破る、ぐしゃっと丸める、ひらひらと揺らす、ぱんっと蹴るなどのアイデアを引き出す。そして、出てきた答えを取り入れながら即興で行ったパフォーマンスには、子どもたちも拍手喝采であった。いざ新聞紙を手にとると、恥ずかしがったり、うまくできなくて焦ったりと子どもたちの様子はさまざまであったが、塚越さんは目線の高さを合わせて1人1人にスタートの合図を出したり、志村さんは進み具合に合わせてアドリブを取り入れたりして、お二人とも子どもたちに寄り添っていた姿が印象的であった。このアクティビティについては、子どもたちを半円形に座らせたり、演奏を行うときは立たせたりと動きが多く、手にした新聞紙を早速触りたがる子どもたちに対してどう説明を行き渡らせるかなど、進行に工夫が必要な内容であったが、毎回終わるたびに修正を行い、回を重ねる毎にスムーズに進められるようになっていった。

その後、演奏に使うマレットの構造と材質の違いによる音の違いを説明し、聴き比べを行った。最後の曲「チャールダーシュ」では、子どもたちが好きな場所やより近くで聴いてもらえるよう、マリンバやピアノの近くに子どもたちを呼び、マレットの使用方法や材質の違いを音で体感させた。

演奏以外においても、楽器を始めるきっかけやマリンバ奏者になるまでのお話など、子どもたちにとっ

ては大きな刺激となったようだ。先生によると、普段あまり意見を言わないような子もしっかりと感想を言っていたということで、楽しい、うれしいという音楽を聴いた後の喜びが、子どもたちの様子からありありと伝わってくるアクティビティであった。

〈コンサート〉

塚越さんを魔法使いに見立てたこのコンサートは、アーティスト発信の豊富なアイデアと舞台スタッフさんの創意工夫、“ジュニアサポーター”の子どもたち扮する見習い魔女によりさまざまな仕掛けが行われ、お客様も音楽ホールも、まるで魔法にかけられたようであった。ジュニアサポーターの子どもたちは、アクティビティ先の小学校からの希望者6名が本番までに数回の会議を重ね、プログラムの作成や演出のアイデア出しを行い、当日はチケットもぎりや場内アナウンスなど、表まわりの運営にも携わった。そして、コンサートが始まれば今度は舞台上へ。魔法使いに扮した塚越さんが繰り広げるさまざまな“魔法”を実現するために、立派にアシスタントの役割を果たした。また、コンサートのチラシに投票用紙を掲載し、候補曲の中から投票制で曲を決めるリクエストコーナー企画で、お客様も含めて“みんなでつくる”、“みんなもコンサートに参加する”という一体感を生み出すことができたと思う。

全体の構成も、暗転で演奏位置についた塚越さんがマリンバの影から突然飛び出して始まる「剣の舞」、黒い布で隠していた共鳴管を披露した後に、その響きを実感してもらう「白鳥」、志村さんの原曲演奏からマリンバによるアレンジ版に変わる「エリーゼのために」と続き、リクエストコーナーでは軽快な「天国と地獄」を演奏するなど、変化に富んだ内容であった。そこに、ウィッチバーの「リズムダンス」という曲を演奏することで、マリンバならではの聴かせどころもしっかりとあったと思う。最後には、ジュニアサポーターの子どもたちもエッグマラカスやタンバリンなどの打楽器で参加し、塚越さん・志村さんと共に「情熱大陸」を演奏した。会場のお客様の手拍子も加わり、会場内が一体となって終演を迎えた。

〈全体を通じて〉

このおんかつは当初からコンセプトや目的がはっきりとしており、担当者の井原さんのビジョンが明確にあったことから、担当者からの発案とコーディネーターからのアドバイス、そこにアーティストからのアイデアを加え、事前のディスカッションをスムーズに行うことができ、それが内容の充実につながった。また、ホールのスタッフのみなさんのご協力、手厚いサポートも非常に大きかったと思う。子どもたちのアイデアをうまく形にし、自主性を尊重しながらも、進行や安全面に気を配って進めて下さったからこそ、6人のジュニアサポーターの子どもたちに運営や舞台進行に参加してもらい、という大掛かりなことができた。スタッフのみなさんからも次々にアイデアが出され、小道具の提供、色や模様を多用した照明演出、ロビースタッフのみなさんの仮装など、お客様にコンサートを楽しんでいただくための仕掛けが随所に散りばめられていた。

“子ども”といっても年齢によって発達段階がさまざまであり、予想外の反応やハプニングが起きることがある。そして、同じ子どもでも一括りにはできないことから、アウトリーチや子どもをターゲットとした催しはさまざまな想定と工夫が必要となる。今回も、親子で楽しむコンサートということで、赤ちゃんから小学生までさまざまな年齢の子どもたちが集まったため、演出上完全暗転になることを個別に伝えたり、ぐずってしまった時のために親子室の案内を行った。そうすることで、親御さんも安心して楽しむことができ、お子さん連れでない一般のお客様にも楽しんでいただける環境も確保することができた。親子“限定”ではないコンサートの場合は、幅広い年齢層や立場の方への対応が求められる。

コアターゲットは絞りつつも、多くの方に音楽を楽しんでいただけるような配慮が必要だと実感した。

今後、地元アーティストによるアウトリーチを行うことで、これまでのお客様の層に加えて、より多くの子どもたちに「シビックセンター？音楽ホールに行ったことがあるよ！」と言ってもらえる日が来ることを楽しみにしている。

実施団体：吉川市教育委員会

実施時期：平成29年2月16日（木）～平成29年2月18日（土）

出演アーティスト：塚越 慎子（マリンバ） 志村 和音（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：マリンバの魅力を知るミニコンサート

期 日：平成29年2月16日（木） 9：40～10：25

会 場：吉川市立三輪野江小学校 音楽室

参加者：5年生 40人

マーチング用の木琴と鍵盤ハーモニカを用いて、「道化師のギャロップ」を演奏しながらの登場。廊下から流れる音色にワクワクと期待を膨らましていた。新聞紙を使ったアクティビティでは、最初は緊張した様子だったが、思い思いにリズムを表現していく中で緊張がほぐれ、アクティビティを楽しんでいた。

タイトル：マリンバの魅力を知るミニコンサート

期 日：平成29年2月16日（木） 14：00～14：45

会 場：吉川市立旭小学校 音楽室

参加者：6年生・保護者 60人

給食を一緒に食べた後ということもあり、子どもたちもリラックスした雰囲気で開催された。新聞紙を使ったアクティビティの際には終始笑い声が絶えず、楽しそうに取り組んでいた。また小学校最後の授業参観日だったため、多くの保護者の方も参観されたが、伸び伸びと新聞紙でリズムを表現する子どもたちに感心していた。

タイトル：マリンバの魅力を知るミニコンサート

期 日：平成29年2月17日（金） 10：50～11：35

会 場：吉川市立中曽根小学校 音楽室

参加者：4年1組 40人

緊張していたようで、最初は塚越さんの問いかけにもなかなか答えられなかったが、塚越さんと志村さんの親しみやすい雰囲気から次第に自由に意見を発表できるようになった。最後に「あの日の川」を一緒に演奏し、全員が一体となり音楽の楽しさを体感した。終了後に音楽教諭から一人ひとりに感想を尋ねると、淀みなく述べられるほど感動できたようである。

タイトル：マリンバの魅力を知るミニコンサート

期 日：平成29年2月17日（金） 14：00～14：45

会 場：吉川市立中曽根小学校 音楽室

参加者：4年2組 39人

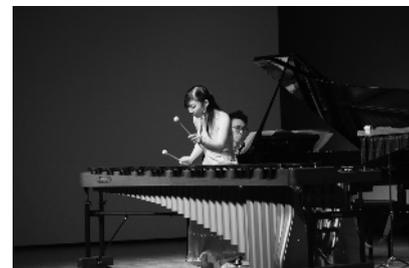
給食を一緒に食べた後だったことに加え、午前中のクラスから話を聞いていたからか、和やかな雰囲気で開催された。最後の「チャルダッシュ」では至近距離から演奏する姿を見学し、五感全てで音楽を体験していた。また午前と同様に「あの日の川」を一緒に演奏し終了した。



コンサート

タイトル：塚越 慎子 マリンバ・コンサート
～耳と目で楽しむマリンバの世界～
期 日：平成29年2月18日（土） 14：00開演
会 場：吉川市中央公民館 ホール（定員：509人）
入場者数：453人

耳馴染みのある楽曲やマリンバならではの楽曲で構成されたプログラム。楽器や曲目の説明を交えながら進行し、暖かな雰囲気にもまれたコンサートだった。第1部の「日本のうたメドレー」では全12曲をタイトルを隠して披露。また第2部の幕開けの「タイプライター」では、塚越さんが会社員に模した演出で観客の心を掴んだようである。



① 応募の動機・事業のねらい

吉川市は平成28年4月に市制施行20周年を迎え、未来に向けた新たな出発の年とするため、市民の方々の記憶に残るような様々な記念事業を企画している。そこで近年は市主催のコンサート等を実施していなかったことも踏まえ、この契機におんかつへ応募した。また、「本物」の音楽である生の音を未来ある子どもたちに届けることで、生涯にわたって音楽を楽しむきっかけとすることを事業のねらいとした。

② 企画のポイント

次世代を担う子どもたちに音楽を届けるために、アウトリーチは市内小学校にて実施した。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

アウトリーチを実施するにあたり、市内に小学校は8校あるため、学校間で差が出てしまうことが問題となった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

各校長に事業の趣旨を説明し、理解を求めた。

⑤ 事業を実施しての成果

アクティビティについては、間近でプロの演奏を見ることで、子どもたちの知的好奇心が刺激されたようである。また、アクティビティに参加した子どもからコンサート当日券について問い合わせがあったなど、音楽に興味を持つきっかけとして十分に機能したと考える。

コンサートについては、来場者の方々が満足そうに帰られ、「素晴らしかった」「またコンサートをしてほしい」といった感想を頂戴した。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

全体的にコーディネーターやアーティストに内容を全てお任せするような形になってしまったので、事前にイメージを膨らませてアイデアを練り、要望を伝えたら、より良いものになったのではないかと感じた。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

クラシック音楽は馴染みがあまり無く、敷居が高いのではないかという不安もあったが、アクティビティの様子やコンサート後の感想から見るに、興味関心が強い市民が一定数いることがうかがえた。今回の発見を材料にして、どのような事業が求められているのか考え、今後の企画につなげていきたい。

埼玉県中央部に位置する人口10万人規模の吉川市。都心から1時間程度だが、駅からすこし離れるとどかな住宅地と、一面に広がる田園風景に目を奪われた。近年は子育て世代が多く転居しており、若者や子供の人口が増加しているとお担当の井上さんから伺った。おんかつの拠点となったのは、吉川市中央公民館（509席）、アーティストはマリimba奏者の塚越慎子さんとピアニストの志村和音さんが選ばれた。

〈アウトリーチ〉

アウトリーチ先は、市内の小学校3校（三輪野江小学校5年生1クラス、旭小学校6年生1クラス、中曽根小学校4年生2クラス）で計4回。今年度のおんかつ4ヶ所目となる塚越さんのプログラムは安定感があり、即座に子どもたちを惹きつける視線・話し方に魅せられた。プログラムは、塚越さんは肩がけの木琴を、志村さんは鍵盤ハーモニカを持ち、演奏しながら登場するサプライズから始まった。そして、マリimbaの楽器紹介から白鳥を演奏、打楽器の紹介から古いタイプライターを使ったアンダーソン作曲の「ライプライター」の演奏が続いた。次は、「雪やこんこ」にアレンジを加えた3種類の「雪やこんこ」を聴いてもらい、それぞれに音楽のイメージをどう感じたかをみんなで意見を出し合った。イメージを共有した後は、新聞紙で思い思いのリズム・音楽を表現するコーナー。最後にはチャールダーシュを間近で聴いてもらい、あっという間に45分間は過ぎていった。

アウトリーチ中の塚越さんは、子どもたちの意見をしっかりと受け止め、どんな意見にもすごいね！そうだね！素晴らしい！ありがとう！と力強く頷いた。どんな発言をしても許される雰囲気を作り出し、それを受けた子どもたちも徐々にほぐれて自然体で過ごすことができた印象に残っている。

アウトリーチのプログラムからはすこし離れ、中曽根小学校で過ごした休憩時間中の話に触れたい。食事後の休憩中、塚越さんが音楽室で個人練習を行っていたところ、マリimbaの音色に導かれて、アウトリーチの対象学年ではない3年生数人が音楽室の前に集まり、背伸びをして扉の窓からこっそり覗いていた。その様子に気がついた井上さんと程田さんが、1人また1人と音楽室に招き入れ、最終的には10人ほどの子どもたちが集い、塚越さんが同じフレーズを何度も繰り返し練習する様子を静かに真剣に見学するという場面に遭遇した。ステージ上で輝く演奏家の姿の陰に、毎日時間をかけて技を磨き、音楽と向き合い、努力し続けている姿がある。アウトリーチやコンサートでは見せることができない演奏家の姿、これ以上に子どもたちの心に残るものはないのではないかと感じさせられた。

〈コンサート〉

コンサートはチケット発売開始当初から売れ行きが好評で、コンサート当日は満員御礼となった。プログラムは、誰もが知っている曲とアレンジの効いた曲など、マリimbaソロの演奏を初めて聴く方にとっても飽きのこない工夫がされたプログラム構成だったと思う。塚越さんが吉川市のお隣の浦和市ご出身ということもあり、トークでも地元ネタを織り交ぜ、終始和やかな雰囲気に包まれた。お客様の中にはアウトリーチ先の子どもの姿も見られ、お客様と距離が近く、たくさんの笑顔が見られるよいコンサートであったと思う。

〈さいごに〉

「マリimba担当」として、最年少ながらも尽力した井上さんの細やかな仕事ぶり、アーティストとお客様を大切にされていた程田さん、吉田さんの働きに大きな拍手を送りたい。些細なことではあるが、コーディネーターの動きをよく見てすぐに吸収し、自分たちの技術にしていく姿はとて頼もしく、自

分たちが中心となり運営していこうという気概を感じるおんかつであった。クラシック公演はほとんどやったことがないとおしゃっていたが、次年度以降の事業展開が非常に楽しいホールである。

実施団体：美里町遺跡の森実行委員会

実施時期：平成29年2月9日（木）～平成29年2月11日（土）

出演アーティスト：岩崎 洵奈（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：クラシックに親しむ

期 日：平成29年2月9日（木） 10：45～11：30

会 場：東児玉小学校 音楽室

参加者：4年生 46人

岩崎さんは、手巻きのオルゴールで「happy birthday」を演奏しました。オルゴールの音は何も無い所では、小さく聞こえました。しかし、オルゴールを響板に置くと音は音楽室に響きわたりました。初めは小さな音であったオルゴールの音が音楽室全体に響いた事に、子供達は驚いた様子でした。

ピアノの仕組みを知った子供達は、より「魅力を伝える楽器」に興味を持ちました。

タイトル：クラシックに親しむ

期 日：平成29年2月9日（木） 14：00～15：00

会 場：東児玉公民館 ホール

参加者：59人

ここでのアウトリーチは、お年寄りを対象としたもので、岩崎さんは懐かしい日本の曲を3曲演奏しました。演奏中は、自然と手拍子や歌声が聞こえ、公民館に居た人たち全員が一体となりました。

タイトル：クラシックに親しむ

期 日：平成29年2月10日（金） 10：45～11：30

会 場：大沢小学校 音楽室

参加者：4年生 44人

この学校では、生徒達が演奏中にピアノの下に潜ってピアノの振動を感じたりまた、ピアノの蓋を開けて鍵盤の動きを見るなどの体験をしました。

この体験を通して、ピアノに興味を抱いた子供もいました。

タイトル：クラシックに親しむ

期 日：平成29年2月10日（金） 13：50～14：35

会 場：松久小学校 音楽室

参加者：5・6年生 43人

この学校では、連弾コーナーを設けました。連弾に選ばれた子供はピアノの経験が無い子でした。しかし、岩崎さんの指導により上手に弾けるようになり、演奏終了後は、盛大な拍手が起きました。

ピアノに直接触れることで、今までピアノを弾く機会がなかった子供でも、ピアノを身近に感じました。



コンサート

タイトル：遺跡の森 岩崎洵奈ピアノコンサート2017

～ピアノの玉手箱～

期 日：平成29年2月11日（土） 14：00開演 16：00終演

会 場：遺跡の森館 大ホール（定員：556人）

入場者数：334人

観客参加型コンサートは、お楽しみコーナーを設けるなどして、大変喜ばれました。コンサートが終了後、ホールから出てきた皆さんの顔は満面の笑みがこぼれていました。

今回のコンサートでクラシックのファンが増えたようです。



① 応募の動機・事業のねらい

ピアノコンクールやピアノ発表会等を通してピアノに触れていますが、プロによるピアノの本物の音色を聞いていただき、子どもをはじめクラシックの優れた文化や芸術活動に多くの方々が出会うことにより、親しみやふれあいの場を提供していきたい。

② 企画のポイント

クラシック音楽はどちらかというと一方的であるため、ピアニストと会場の客が手拍子をして一体にできるコンサートができたらと思った。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

美里町はクラシック音楽に親しみがなく、ハードルが高いためチケットの販売に苦労をした。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

広報誌やホームページなどを利用した。また、美里町はピアノコンクールを行っているため、実行委員会の委員に紹介をした。そのほかには知り合いに声をかけたりしました。

⑤ 事業を実施しての成果

町の人たちは、クラシック音楽にハードルが高かったが、今回のコンサートを機に興味を持っていたと思う。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

初めての事業なので、アクティビティの際は上手く進行できず、コーディネーターの方の力を多く借りてしまった。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今回のコンサートを通じて感じたことは、片田舎でチケットが403枚も売れたということは地域の皆さんの協力があったからこそであり、感謝する次第です。

アシスタントレポート

桜井 しおり

埼玉県北西部に位置する、人口1万2千人の町、美里町。新宿からも2時間弱の好立地にありながらも、南部には秩父山地から続く丘陵が横たわる、のどかな町、美里町。そんな美里町にとって、今回のおんかつは非常に“革新的”であったと思う。

担当の中兼さんは、クラシック音楽が根付いていない美里町では、所謂正統なクラシックのコンサートをしてもお客さんがチケットを買って下さらないと心配されており、往來のクラシックコンサートでは見たこともないような新しいモノにしたいという強い想いをお持ちだった。

比較的早い段階で下見に伺わせて頂き、中兼さんからのアイデアを出来るだけ良い形で実現すべく、全員で話し合い、丁寧にミーティングを重ねた。

ピアニストの岩崎洵奈さんは、今年度最後のおんかつという事もあり、可能な限り、中兼さんの求めていらっしゃるコンサートに出来るようにと意欲的に取り組んで下さった。

〈アクティビティ〉

アクティビティ先は、町内の全小学校3校と美里町の東児玉公民館。美里町では、ターゲット・バード・ゴルフというスポーツが主に高齢者の間で盛んであり、その練習場近くの東児玉公民館でターゲット・バード・ゴルフ愛好会の方々を対象にアクティビティが行われた。

小学校でのアクティビティでは、岩崎さんの華やかなドレス姿に息をのむ生徒も多く、登場後すぐに演奏した《エリーゼのために》の世界観に誘われていくように見え、非常に効果的であった。また演奏の合間のトークでも、岩崎さんの人となりがわかるようなトークで生徒達からの意見を上手に拾いつつ、適切に対応していたので、生徒達も積極的に意見や感想を述べていた。終演後も先生より岩崎さんを交えたクラス写真撮影の依頼があり、小学校3校共、非常に充実したアクティビティとなった。

公民館でのアクティビティでは、対象者の人数が当日まで判明しないという状況下だったが、愛好会会長の春山さんのお声掛けもあり、非常に沢山のお客様にいらして頂いた。演奏が始まると、岩崎さんのピアノの音や明るいトークに引き込まれ、1時間という短い時間の中で、十分に堪能して頂けていたように見えた。また、《カンパネラ》の演奏中に、ピアノの周りに集まって思い思いの場所で演奏を聴いて頂くというコーナーでは、岩崎さんの指の速さや迫力に、お客様が目輝かせて聴き入る姿は大変印象的であった。終演後は、本公演のチケットを買って下さる方々もいらっしゃり、大変温かい雰囲気の中で行われたアクティビティであった。

〈コンサート〉

担当の中兼さんの多大なるご尽力を頂き、チケットは美里町入りする前に300枚を既に超えており、コンサート当日には400枚のチケットが売れ、大変にぎやかなコンサートとなった。中兼さんの提案として、コンサートの最初の曲は、暗転の中で演奏が始まり、演奏中に照明を徐々に明るくしていくという、クラシックコンサートではあまり見かける事がない演出を行った。また、プログラム後半では、美里町のゆるキャラである“ミムリン”が登場し、美里町でのアウトリーチについて岩崎さんにインタビューを行うというコーナーを作り、お客様にもアウトリーチについてお話しする時間も作った。終演後は、サインと写真を求めるお客様が長蛇の列を作り、副町長はじめ、教育長や訪れた小学校の校長先生もお越し頂き、大変ご満足頂けた。

〈最後に〉

今回のおんかつ事業は、担当者の中兼さんによる斬新なアイデア、そしてそれを中兼さんから引き

出し、具体的な形として提案したコーディネーターの力、それを出来る限り形にしようとしたアーティストの努力、すべてが重なり成功したと思える。アクティビティ先の先生方の様子やコンサート終演後のお客様の様子からは、今後の美里町でのクラシックコンサートの可能性を十分に広げ、中兼さんが当初抱いていらした不安も払拭できたと感じた。下見に伺った9月から実施の2月まで長く平坦ではない道のりであったが、「手は掛かり大変だったが非常にやりがいのある仕事だった」と中兼さんが仰って下さり、とても感動的だった。今回のおんかつが良い意味で美里町の起爆剤となり、今後も文化芸術に溢れた町として町民に浸透して行ってほしいと強く願う。

以上

実施団体：進修館M&Nコンソーシアム代表団体 NPO法人MCAサポートセンター

実施時期：平成28年9月9日（金）～平成28年9月11日（日）

出演アーティスト：福川 伸陽（ホルン） 大野 真由子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：

期 日：平成28年9月9日（金）

会 場：きらりびとみやしろ

参加者：35

コンサートへ足を運べないケア施設の方々のもとへ生演奏を届けに行ってきました。こちらへは自主事業の一環で中高生による室内楽演奏でも訪問しており、会場に関しては経験がありましたので、スタッフも落ち着いて準備をすることができました。福川氏が昔懐かしい抒情歌などを演奏すると、自然と高齢者の方々から歌声が湧き、会場全体が一つになるのを感じました。

タイトル：

期 日：平成28年9月9日（金）

会 場：宮代町役場

参加者：26

「音楽で町を元気に」という願いを込め、町役場食堂を会場として行いました。演奏を聴く前と後とでの職員の方々の表情の変化に、音楽の素晴らしさを改めて感じさせられた会でした。

タイトル：

期 日：平成28年9月10日（土）

会 場：町立百間中学校

参加者：30

吹奏楽部員を対象として開催しました。日頃から熱心に吹奏楽に取り組んでいる生徒さん達だけあり、福川氏の演奏だけでなくホルンを始めた頃などの話など、真剣に耳を傾けておられました。プロの演奏を間近に聴く体験は、学習者の方達にとっては宝物になることと思います。

タイトル：

期 日：平成28年9月10日（土）

会 場：和戸教会

参加者：32

県内でも歴史ある和戸教会を会場としたアクティビティでは、福川氏が教会に相応しい選曲をしてくださり、信者の方や教会にゆかりのある方々が、和やか雰囲気の中で音楽を楽しまれました。木造の教会に響き渡る温かなホルンの音色に、来場者の方々は大変満足されていました。



コンサート

タイトル：福川伸陽 ホルンの世界

期 日：平成28年9月11日（日） 15時開演

会 場：宮代町コミュニティセンター進修館 大ホール(定員：
300人)

入場者数：277人

プレゼンの際の福川氏の演奏（メシアン）を聴いた際に、音が見えるかのような、また、ホール天井から音が降り注ぐかのような印象を受け、この感動を観客の皆様へ伝えたいという思いから、日本工業大学の学生に依頼し「クロマキー合成・CG」技術と音楽とのコラボレーションが実現しました。曲の中で、音に合わせて細かく映像が変化し、また演奏している福川氏の姿が大スクリーンの宇宙空間に合成されるなど、一般的なコンサートとは一味違った趣きで、初めてクラシックコンサートに訪れたという観客にも大変満足していただきました。開演前に、プレ演奏（前座演奏）として、アウトリーチ先である百間中学校吹奏楽部に演奏いただいたのも、会場の空気が和らぎ大変好評でした。



① 応募の動機・事業のねらい

平成28年度より、「音楽を通しての人のつながりづくり」を事業の柱の一つとして行っていくにあたり、町全体を巻き込み、町民の皆様クラシック音楽を身近に感じていただける機会として応募しました。

② 企画のポイント

アウトリーチでは、色々な立場や年代、場所を考慮して選定し、ホールコンサートでは宮代町の特色として、日本工業大学生との共同制作を企画しました。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

音楽専用ホールではないので自分が演奏する側になったと仮定して会場イメージを描いておりましたが、音の響きの難しさと、且つ、特徴のある形状のホールをいかに活かすかに悩まされました。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

福川氏が現地入りされ実際に会場を見ていただいた上で状況をお伝えし、コーディネーターさん達のご協力もあり、音×映像×会場がマッチする設営が出来たと思います。

⑤ 事業を実施しての成果

多くの方にご来聴いただけたことが何よりも大きな成果だったと思います。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

これまで当施設に携わってきたスタッフが音楽事業担当者ではなかったという点が反省すべき点かと思えます。音楽事業に疎かろうと何であろうと色々な方に関っていただきたいと思えますし、「公共ホール音楽活性化事業」の目的にはスタッフ育成も兼ねておられると思えます。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今回の事業を通じ、集客等において「クラシック音楽への拒否反応」という点が浮き彫りになりました。アウトリーチやコンサートを開催するには、演奏家がいるだけでは成り立たず、主催者・演奏家・観客がいて初めて成り立つものだと思います。主催者が演奏家に惚れ込みミスペクトし、演奏家が思い描いているステージに寄り添い一緒に作り上げるかも成功への大きな力になると思います。「クラシック音楽＝わからない」と一言で片付けてしまわれがちですが、長い歴史の中での役割や、身近なところにクラシック音楽が溢れているのも事実です。お客様へクラシック音楽の良さや感動を届けるには、まず主催者が生演奏に触れ自らが感動し、その上で繰り返し町の方やまわりの方へ伝えて行く、時間がかかりますが改めて必要なことだと強く感じました。

東武線「東武動物公園」駅からほど近くにある、埼玉県宮代町のコミュニティセンター進修館。とにかく変わった建物で、館内のどこを歩いても、どこから見ても、建築家のこだわりや細部に隠された遊び心を見つけられる、わくわくする建築だ。この進修館を設計した「象設計集団」は近くの町立小学校の建築も手掛けており、竜宮城のような奇妙な城（学校）では、子どもたちが裸足で校庭を駆け回っていた。公立施設はこんなだし、高い建物を建てない、緑や農地を残す町づくりをしているなど、都心へのアクセスも良い場所ながら、こだわりのある変わった町だなあというのが宮代町の印象だ。

こんなユニークな町で企てられた今回のおんかつも、やはりどこか一風変わった取り組みとなった。宮代町コミュニティセンターの浅沼さんが選んだアーティストは、プレゼンテーションでメシアンの「恒星の呼び声」を圧巻のパフォーマンスで披露したホルンの福川さん。「宮代町の人々に、新鮮な刺激をもたらしてくれるかも」という浅沼さんの直感から、全てが始まったように思う。企画の狙いとしては、ホールの指定管理者としてこれから力を入れていこうとしている音楽事業への理解・関心を、町の人、役所の人、進修館職員のなかに醸成していくことだった。

そのためアクティビティ先は、場所も対象者もさまざまだったが、福川さんは毎回全く異なるプログラムを用意。福祉施設では利用者の方が一緒に歌えるような懐かしい曲で、まるで演歌歌手のように皆さんをのせて一緒に幻想を見ていたし、教会では祈りを捧げるような柔らかい音や、事故で亡くなった友人に捧げたプーランクの曲の「心がねじれるような痛み」と表現する音で、教会に集まった人々の心に寄り添っていた。中学校では、ホルンと共に歩んできた人生に沿って、その時その時の思い出の曲を演奏するなど、4回のアクティビティでの演奏曲数は、実に25曲にのぼった。

さらにコンサートでは、宮代町にキャンパスのある日本工業大学の情報工学科の学生さんとのコラボレーション企画も。これは、メシアンの「恒星の呼び声」を映像技術と共に提示したら面白いのではないかと浅沼さんのアイデアで、クロマキー合成技術やプロジェクションマッピングの映像制作を行っている学生さんに協力をお願いしたものだ。事前に曲を聴いてイメージした映像を作成してもらい、コンサートで実際に演奏している福川さんの映像を合成、まるで宇宙空間でホルンを吹いているような不思議な映像が映し出された。

下見や打合せの段階では、合成映像と聞いてもいったいどのようなパフォーマンスになるのかイメージできなかったのだが、福川さんも「面白そうだ」と企画に魅力を感じ、浅沼さんを信じて「とにかくやってみよう」となれたから、実現したものだった。その他にも、百間中学校吹奏楽部によるプレ演奏などもあり、アクティビティも含めると要素としては盛りだくさんのおんかつとなった。もちろんそれだけ、たくさんの調整ごとや困難があったわけだが、「きっと面白いものになる」という浅沼さんの直感と情熱や、館長の渡邊さんの人柄や顔の広さで、一つずつクリアしていった過程があった。企画者の熱意にさまざまな人が巻き込まれ事業が進んでいったという印象で、企画制作をする際の一番の要が何なのかを改めて示してくれたおんかつだったように思う。

また宮代町のおんかつでは、用意していた客席を増設しなければならないほどコンサートは大盛況となり、宮代町に滞在していた3日の間に、この小さな町に社会現象が起こったかのような、不思議な熱気を感じた。やろうと思えばやれるのだ、こんなふうにも進修館を使えるのだということを、町の人だけでなく、進修館の職員にも経験してもらえた機会となったと浅沼さんも語っていた。ぜひこうした経験を積み重ねて、新しいものを創造していく文化を、町に育ててほしいと思う。

実施団体：鎌ヶ谷市

実施時期：平成28年10月6日（木）～平成28年10月8日（土）

出演アーティスト：岩崎 洵奈（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：癒しのミニコンサート①

期 日：平成28年10月6日（木） 10：30～11：15

会 場：初富保健病院 ロイヤル館 サロン・ホール

参加者：入院患者 30名

ホールまで来られない方に音楽を届けたいと企画した病院でのコンサート。リストやショパンの曲の演奏の合間に、ピアノの仕組みをオルゴールを使用してわかりやすく解説するコーナーや参加者に演奏曲を選んでもらうコーナー、参加者との連弾があった。終演後、病室へ戻る皆さん一人ひとりに岩崎さんのお見送りがあり、とても嬉しそうであった。

タイトル：癒しのミニコンサート②

期 日：平成28年10月6日（木） 14：30～15：15

会 場：初富保健病院 ロイヤル館 サロン・ホール

参加者：入院患者 29名

午前の部に参加出来なかった入院患者が参加。午前の部と同様、リストやショパンの曲の演奏の合間に、ピアノの仕組みをオルゴールを使用してわかりやすく解説するコーナーや参加者に演奏曲を選んでもらうコーナー、参加者との連弾があった。終演後、病室へ戻る皆さん一人ひとりに岩崎さんのお見送りがあり、とても嬉しそうであった。

タイトル：音楽との出会いコンサート

期 日：平成28年10月7日（金） 10：30～11：15

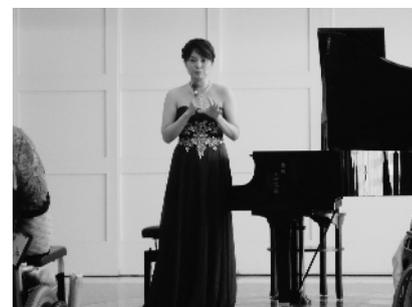
会 場：きらりホール舞台上

参加者：こども発達センター未就学児及び保護者 49名

こども発達センターにグランドピアノがないため、きらりホールに、こども達と保護者を招いてのコンサート。

岩崎さんの素敵なドレス姿や、グランドピアノの下に潜る体験、連弾体験など、日常では味わえない体験に、こども達はとても喜んでいました。

最終日を未就学児入場不可としたため、ホールコンサートの集客には直接結びつかなかったが、こども達が音楽の楽しさを知り、また保護者からも普段コンサートに行く機会がなく参加出来て良かったとの声もあり、とても有意義なコンサートとなった。



タイトル：音楽と絵画のコラボレーション

期 日：平成28年10月7日（金） 14時～14時45分

会 場：きらりホール舞台上

参加者：稲津絵画教室2名+ホール職員6名

市内で活動している稲津絵画教室さんに、事前に岩崎さんの演奏曲を聞いてイメージして描いた絵をホールのステージに飾りながらのミニコンサート。岩崎さんから絵に対しての感想をいただき、また、演奏を聞いて参加者がその曲のイメージを描くコーナーもあった。（地域創造の皆さんにも臨時に絵を描いてもらいました）

アクティビティに参加出来なかった絵画教室の方が、本コンサートを見に来てくれたりと、集客にも結びついた。

コンサート

タイトル：岩崎洵奈ピアノコンサート

～きらりホール音の収穫祭～

期 日：平成28年10月8日（土） 14：00開演

会 場：きらり鎌ヶ谷市民会館きらりホール（定員：500人）

入場者数：172人

クラシックが初めての人でも楽しめる2部構成のコンサート。第1部は入門編として、ピアノの仕組みをオルゴールを使用してわかりやすく解説するコーナーや会場の皆さんに演奏曲を選んでもらうコーナー、参加者との連弾を交えてのコンサート。第2部は、本格的なピアノリサイタルとなった。

途中、アクティビティでの様子や、稲津絵画教室の皆さんの絵の紹介などもあり、来場者が帰りに、ホワイトエで飾られている絵を熱心に見て帰る様子が見られた。



① 応募の動機・事業のねらい

きらりホールの使命として「人づくり・地域づくり・まちづくり」を掲げており、地域交流プログラムが「地域づくり」に合致し、加えて、新しく出来たばかりのホールであることから、職員の経験が不足しており、経験豊富なコーディネーターから事業実施に必要なノウハウを学んでいきたいという理由から応募した。

② 企画のポイント

きらりホールの使命「人づくり・地域づくり・まちづくり」、平成28年度年間テーマ「体で感じる感動」を、岩崎さんの「体で感じる音楽」で実現していくため、人とのつながりをキーワードとし、アクティビティ、コンサート両方に、参加型プログラムを入れてもらった。

クラシックコンサートの集客率が低く、特に男性の参加者が少ないため、最終日のコンサートは、クラシック入門編として、老若男女あらゆる世代の人が楽しめるものをお願いした。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

- 1 こども発達センターのこども達の大半が、クラシック音楽を生で聞くのが初めてだったので、当日騒いでしまうのではないかと心配があった。また、きらりホールに来るのも初めてだったので、慣れない場所での緊張も懸念された。
- 2 音楽と絵画のコラボレーションの開催日が平日昼間だったということもあり、仕事や学校で参加することが出来ずにいた人が大勢いた。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- 1 先生方と相談して、岩崎さん演奏CDを事前に、こども達に聞いて慣れてもらった。また、先生達が事前にホールの写真を撮影し、こども達に写真を見せながら事前に説明するなど、緊張しないよう工夫してくれた。
- 2 実際にアクティビティに参加出来ない人にも、絵を事前に描いてもらうかたちで参加してもらった。また、当日は、きらりホール職員や教育長も参加し、絵画教室との交流を図るようにした。みんなで、描いた絵に対しての意見を言い合い、アットホームな雰囲気にも包まれた。

⑤ 事業を実施しての成果

岩崎さんの可愛らしさから、普段きらりホールに来ない男性客も来てくれ、クラシック普及としての成果は大きかったと思う。一番の成果は、発達センターのこども達から楽器を習ってみたいとの声があり、こども達の情操教育に関われたことである。今後も、病院や老人ホーム、こども発達センターなど、ホールまで来られない人のための事業を継続していきたい。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

市の行事と最終日が重なっていたため、自治回覧や地域新聞掲載など広報にも力を入れたが、結果的には集客が分散してしまい、集客の難しさについて痛感した。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

近隣市でもコンサートを多く行っており、また、都内のホールまでも1時間以内で行けるという立地から、きりりホールの事業としてどのようなものを実施するべきか常々頭を悩ませていた。今回アクティビティを実施して、ホールでのコンサートでは得られない、アーティストと参加者が近くで触れ合う機会の重要性を感じ、今後の事業計画の参考となった。

千葉県北西部に位置する人口10万人の鎌ヶ谷市。おんかつの拠点となったのは、平成26年4月にオープンしたばかりの「人づくり・地域づくり・まちづくり」をホールのミッションに掲げるきらりホール(540席)である。公民館と商業施設や病院が併設され、子ども連れの若いおかあさんから、元気にサークル活動を行うアクティブシニアの団体など、三世代が行き交う立地に恵まれている。平成28年度のきらりホールの年間テーマ「体で感じる感動」であることから、アーティストは「身体で感じる音楽」をテーマのひとつにしていたピアノの岩崎洵奈さんが選ばれた。

〈アウトリーチ〉

アクティビティ先の選定にあたり、担当者の平澤さんと松丸さんの着目点は2点。おふたりとも以前は福祉系の部署で仕事をした経験から、音楽を聴きたくても様々な事情でホールに来られない方がいらっしゃるということを感じていた。そのため、普段ホール来られない方のために、介護系医療病院の初富保険病院で2回、そして、障害を抱える未就学の子どもたちを対象に1回(ホール舞台上で実施)が選ばれた。残る1回は、「市民とホールのつながりを作りたい」との思いから、ホールで年に1度展覧会を開いている絵画教室との音楽×絵画のコラボアウトリーチ(ホール舞台上で実施)を行うこととなった。

4つのアウトリーチは、それぞれ対象者が異なるため、対象者をよく知ること、環境づくり、プログラム構成など、対象者に合わせた配慮が多く求められた。しかしながら、アウトリーチ先のご担当者の皆様と、事業の中心となった平澤さんが、対象となる方が集中できる環境づくりを柔軟に考え調整してくださったことで多くのバリアをクリアできたと思う。

環境づくりで言えば、未就学の子どもたちのためには、できるだけ普段と同じように落ち着いて過ごしてもらえるように、普段使っている発達支援センターの椅子をホールに持ち込み、いつもの時間に集まり、いつもと同じように朝の会、リズム遊び、点呼を行い、そこに岩崎さんにも同席していただいた。初めての環境にも、初めて出会う岩崎さんにも慣れてもらえるように、発達支援センターの先生たちの意見を第一に取り入れた。初めて間近で聴くグランドピアノの音に子どもたちが驚いて、集中できないのではないかと多くの心配を抱えたが、そんな大人たちの心配をよそに、音が鳴りはじめるとぐっと集中し、身体を使って音楽を表現しようとする様子、小さな身体全身で岩崎さんの音楽と言葉を吸収しようとする力強い子どもたちの姿が印象に残るアウトリーチとなった。

〈コンサート〉

「クラシック公演は集客が難しい。親しみを持ってもらいつつ、本格的なものにも触れて満足してもらいたい。」というのが平澤さんの思いだった。コンサートの内容は、前半は入門編として楽器の説明や小品を中心に、後半は本格的なリサイタル・スタイルに簡単な曲目の説明が加えられ、お客様とともに楽しむ時間をと考えられたプログラムであった。ホワイエには、アウトリーチで関わった絵画教室の先生と生徒さんの絵を飾り、華やかな雰囲気をまとうことになった。その絵は、事前に岩崎さんが演奏するユーモレスクの音源をお送りし、その音楽からイメージするものを描いていただいたのだが、力作揃いの素晴らしい絵の数々にお客様も目を奪われていたようだった。コンサートは、岩崎さんの情熱的な演奏と、人を惹きつける明るいトークに会場が包まれ、あたたかな雰囲気の中で終幕となった。

〈さいごに〉

鎌ヶ谷市おんかつを終えてみて、鎌ヶ谷市の強みは「人の優しさ」「人の力」だったように思う。ア

ウトリーチ先のご担当者と丁寧に調整を重ねてこられた平澤さんは、事前のメールのやり取りでは気がつかなかったところだったが、実際に現地を訪れてみて、平澤さんが影ながら理解を得るために動かれていたことが分かり、ハッとする場面がたびたびあった。控えめながらも、関わるすべての人たちに配慮を重ね、信頼を積み重ねる大切さを思い出させていただいた。その小さな積み重ねこそが、アウトリーチの対象者、そしてホール公演のお客様の笑顔につながり、ともに働くスタッフの充実感を招くのだろう。おんかつを通じて感じたことや経験が次なる活動に生きることを大いに期待したい。

実施団体：公益財団法人文京アカデミー

実施時期：平成29年1月17日（火）～平成29年1月19日（木）

出演アーティスト：坂口 昌優（ヴァイオリン） 鶴見 彩（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：リアンコンサート①

期 日：平成29年1月17日（火） 10：30～11：30

会 場：障害者支援施設リアン文京 視聴覚室

参加者：38名

コンサートの対象が知的障害のある方だったので、耳馴染みのある曲や手拍子などで参加いただく曲などを入れたプログラムを実施しました。後方に車イスの方々もいたため坂口さんが客席のなかを歩きながら演奏してくださいました。中には体勢を動かすことができず正面を向けられない方もいたので、喜んでいただけたと思います。

初めは緊張感がありましたが、最後には、リラックスしてとてもアットホームな雰囲気で終わることができました。

タイトル：放課後クラシック

期 日：平成29年1月17日（火） 17：30～18：30

会 場：b-lab（青少年プラザ） ホワイエ

参加者：18名

打ち合わせの際に、中高生のジャズバンドの活動があることがわかり、1曲共演することになりました。本番前に坂口さんが早入りしてくださり、事前にリハーサルを行うこともできました。本番ではクイズのコーナーを入れ、全問正解者には演奏曲をその方のためだけに演奏するというサプライズを行い喜んでもらえました。当日、急ぎょ会場がホールからホワイエに変更となってしまったり、中高生の来場者数が少なかったことが反省点です。

タイトル：リアンコンサート②

期 日：平成29年1月18日（水） 10：30～11：30

会 場：障害者支援施設リアン文京 視聴覚室

参加者：36名

障害者支援施設でのコンサートの2回目。1日目とは聴く方々が総入れ替えしているため、2回目とはいえ反応がまったく読めない状況でしたが、坂口さん・鶴見さんが馴れてきて、1日目よりリラックスしていたので初めから会場の一体感が生まれていたように感じました。坂口さんと障害のある方が会話を交わしたり、演奏が始まる前は声をだして外に出たがっていた方が、演奏が始まると身体を揺らし嬉しそうな表情になっていたことが印象的でした。



タイトル：ふれあい学級コンサート

期 日：平成29年1月18日（水） 13：15～14：15

会 場：文京区教育センター 多目的室

参加者：13名

不登校の小学4年生～中学3年生が通っている会場であり、事前の打ち合わせでは、基本的に反応があまりなく質問などは難しいというお話を伺っていましたが、クイズコーナーにも手を挙げ答えてくれたり、参加する曲（幸せなら手をたたこう）も全員に参加してもらうことができ、楽しいミニコンサートになりました。ふれあい学級では、音楽の授業は年2回しか行っていないので、生の音楽を至近距離で聴く機会はとても貴重だったと思います。



コンサート

タイトル：ママ・クラシック～プレママ&ママへ贈るお昼の Concert～

期 日：平成29年1月19日（木） 11：00開演

会 場：文京シビックホール 小ホール（定員：325人）

入場者数：288人

「平日昼の有料コンサート」であり「ママを対象としたコンサート」という、いままで実施したことがない内容にチャレンジしました。集客に不安があり、一般客も入場可能としていましたが、公演1か月前には完売となりました。当日来場した方を見ると、一般の方はほとんど見当たりませんでした。ターゲットを「ママ」に絞ったことで、子育て世代の方たちは、気を遣わずに済むため来場しやすくなるということがわかりました。子育て中のママにリラックスして聴いてほしい、という趣旨でしたが、予想以上に子ども（乳児）の入場が多かったため、始終泣き声がやまない状態になってしまったことが今後の課題です。



① 応募の動機・事業のねらい

これまで実施してきたアウトリーチ事業は、主に会場が小中学校に限られていたので、福祉施設など学校以外でのアウトリーチにチャレンジするため応募しました。また、ホールで行う事業についても、通常のコンサートの来場者は60代以上が多くを占めているため、20～30代などの子育て世代を対象としたコンサートを実施し、新たなターゲット層の開拓や新しい形態のコンサートを企画したいと思いました。

② 企画のポイント

アクティビティは障害者施設や中高生のための施設で実施し、コンサートは子育て世代を対象に平日昼に実施しました。アクティビティの対象とコンサートの対象がリンクしていないため集客にはつながらないのですが、アクティビティ、コンサートとも「普段の事業では会うことができていない人に生の音楽を届ける」ということをテーマとしました。コンサートについては、対象をはっきりさせた「ママ・クラシック」というタイトルにしました。結果としては対象者にダイレクトに届きチケットを完売することができました。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

アクティビティ先が、これまで実施した経験のない初めての場所だったことに加え、観客が中高生（不登校児を含む）や知的障害のある方ということで、それぞれの施設との事前の調整や、障害者施設については当事者がどのような反応をするのか、配慮すべき点などに不安な部分が多くありました。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

施設とのやり取りについては、それぞれ担当の方がシフト制であったり連絡がなかなか取りにくいことはありましたが、基本的に皆さんがとても協力的で、事前の打ち合わせを十分行うことや、坂口さんとともに各施設の見学をさせていただくことにより理解が深まりクリアすることができました。こちらから粘り強く働きかけることが重要だとわかりました。

障害者施設については、見学をさせていただいた日が休日だったため入所されている方々のお部屋にお邪魔したり、直接お話をさせていただくことができ本番前の不安をぬぐうことができました。

⑤ 事業を実施しての成果

アクティビティ先の施設からは「また来て欲しい」という声をいただくことができました。障害者施設では、事前の見学のときから入所の方が「楽しみにしています」とおっしゃってくださり、演奏中には音楽に合わせて身体を揺らし、心から音楽を楽しんでくださっていることが伝わってきました。今回の経験で、普段ホールを訪れることは難しくても、音楽を求めている方がまだまだたくさんいて、このような方々に、今後もこちらから「生の音楽」を届けていかなければならないと実感することができました。また、不登校の施設では、このような事業を継続していくことで、児童・生徒にもよい影響がでると思うので、今後の課題としたいと思います。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

アクティビティは事前の打ち合わせが大切だということを実感しました。今回はアーティストと一緒にすべてのアクティビティ先に下見に行くことができましたが、常にそのような対応が可能とは限らな

いので、ホール担当者がアクティビティ先の担当者としっかりコミュニケーションをとり、アーティストに会場のイメージや観客についてなどの情報をアウトプットする必要があると感じました。また、アクティビティ先の状況が直前に変わる可能性があるので、一度打ち合わせをしたら終わりにせず、定期的に情報共有をすることが大切だとわかりました。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

まず、自分自身が今回のアクティビティを通して「音楽の力」を再度認識することができました。今回はじめて不登校児のための施設を訪れ、様々な事情を抱えた子どもたちがいることを知りました。生の演奏を聴いていただくだけでなく、アーティストといういつもとは違う外の人と接することは子どもたちの世界を広げることにつながるように感じました。

今回はアクティビティもコンサートもそれぞれターゲットを絞りましたが、広く浅くよりも、狭く深くした方がそれぞれの人に届きやすいのではないかと思います。また、様々な事情からなかなかホールに足を運ぶことのできない方々に対しても「生の音楽」を届けていくことが必要であり、そうした活動を通して「わが街のホール」として親しみやすい芸術文化活動を推進することができると思います。

アシスタントレポート

桜井 しおり

教育機関や医療機関が充実し、交通の利便性も高い区、東京都文京区。同時に、文豪や江戸の文化を偲ばせる、どこか下町風情が残っている文京区。今回のおんかつは、そんな東京都23区中心地でヴァイオリニスト坂口昌優さんを迎えての実施となった。

坂口さんは、今回が初めてのおんかつ。不安と緊張感が漂う中ではあったが、坂口さん自ら、担当の津田さんとアウトリーチ先を事前に訪れ、施設担当者とのミーティングをするなど非常に意欲的におんかつに取り組んでいらした。

「今までアプローチしてきた事がないお客様へのコンサートやアウトリーチを実施してみたい」という担当の津田さんの願いから、アクティビティ先は、障害者施設、“中高生の秘密基地”といわれている文京区青少年プラザ (b-lab)、不登校や引きこもり状態の児童・生徒が通うふれあい学級にて行われた。またコンサートは、平日の午前中に、あくまで育児中や妊娠中のお母さんを対象としてコンサートを開催する運びとなった。

〈アクティビティについて〉

一日目と二日目の午前中に行った障害者施設でのアクティビティは、18歳から60代までと幅広い年齢層への実施で、非常に柔軟な対応が求められたが、坂口さんは見事に対応し、参加者とコミュニケーションを取っていらした。ヴァイオリンを至近距離で鑑賞するシーンや参加型の曲目を取り入れるなど、バラエティに富んだプログラムであり、対象者を飽きさせる事なく、非常に充実したプログラムであった。演奏が始まる前までは、後ろを向いている対象者が、プログラムが進むにつれて徐々に坂口さんに注目し、最終的には率先して拍手を送っている姿はとても印象的であった。施設職員の方も非常に喜んで下さり、津田さんと坂口さん双方にとっても新たなフィールドへの第一歩となったように感じられた。

ふれあい学級では、事前の下見の際に先生方から生徒さん方の様子を伺っていた為、当初不安もあったが、物腰が柔らかい坂口さんの作り出す雰囲気と先生方の細心のお心遣いで、落ち着いてアクティビティを実施することが出来た。文京区青少年プラザ (b-lab) でも行っていたプログラムだが、ヴァイオリンのオリジナル曲だけではなく、耳馴染みのよいバレエ曲をクイズ形式にして使用したり、対象者が自主的に曲を鑑賞する仕掛けがあるプログラムが行われ、対象者を惹きつける工夫が施されていた。また、文京区青少年プラザ (b-lab) では、対象者の人数が当日まで判明しないという状況下だった為、当初予定されていたホールではなく、開かれた集合スペースで行われた。プログラムの途中では、近隣の中高生数名と施設のスタッフの方と《星に願いを》をセッションし、また、坂口さんからヴァイオリニストとして生きようと思ったきっかけ等を話すシーンがあり、対象者の様子から、その時間がかけがえのない時間となったように思われた。

〈コンサートについて〉

夜のコンサートや休日のコンサートは既にシリーズとして行っているという事もあり、新たな試みとして、平日の午前中に妊婦さんやお母さんを対象にするという事で企画された。立地条件やSNSの力も大きく、早い段階で完売となり、沢山のお客様が足を運んで下さった。坂口さんのコンサートは、ヴァイオリンの魅力を存分に堪能するプログラムでありながらも、お客様のことも考慮し、曲目が選出されていた。またプログラムの途中に、主に妊婦さん向けにお腹をピアノに当てて聴いて頂くコーナーを設け、その為に舞台をフラットの状態に設営し、舞台上で聴いている妊婦さんの間近で演奏したりと工夫を凝らしていらした。非常に満足度の高いコンサートであったと感じたが、思いのほか、未就園児のお子さんを連れてお母さんが多かった為、子供向けのコンサートのような雰囲気が出てしまった事が今後

の課題となった。アクティビティ同様、坂口さんの臨機応変な対応が非常に際立ったコンサートだった。

〈最後に〉

今回のおんかつでは、ホールにとっても坂口さんにとっても非常に有意義なものとなったように感じられた。クラシック音楽公演も含め、一定の文化活動を持つ文京区だからこそ、今回の挑戦があり、課題を新たに発見することが出来た。今回のおんかつが、次の段階への起爆剤となってくれると嬉しい。

実施団体：(一財)滑川市文化・スポーツ振興財団

実施時期：平成29年12月8日(木)～平成29年12月10日(土)

出演アーティスト：塚越 慎子(マリンバ) 志村 和音(ピアノ)

アクティビティ

タイトル：塚越慎子マリンバコンサート

～鍵盤が奏でる魅惑の世界～

期 日：平成28年12月8日(木) 11:30～12:15

会 場：滑川市立東部小学校 音楽室

参加者：4年1組 34人

鍵盤ハーモニカと木琴で登場。音だけの演出やタイプライターを使った曲、4本マレットでの演奏ではアーティストに釘付けとなりました。マレットの特徴、拍手や紙一枚でも音楽になる事等のお話を聞いた後、市民に馴染みのある「時計台の鐘」を題材に取り上げていただき、各自新聞紙を破ったり、丸めたり、叩いたり、振ったりして出た音を繋いで、クラスみんなで「時計台の鐘」を演奏しました。また、同じ曲でもアレンジしてリズムを変えることで曲のイメージも変わる楽しさを体験できました。身近な曲を取り入れた事で子ども達にも、より音楽の楽しさが伝わったのではないかと思います。授業終了後は交流を深めるため教室でアーティストと給食を一緒に食べました。

タイトル：塚越慎子マリンバコンサート

～鍵盤が奏でる魅惑の世界～

期 日：平成28年12月8日(木) 13:55～14:40

会 場：滑川市立東部小学校 音楽室

参加者：4年2組 37人

4本マレットでの演奏に目を輝かせ、マレットの特徴、拍手1回は音で何回か叩くとリズムになることや紙一枚でも音楽になることを聞き、市民に馴染みのある曲「時計台の鐘」を、各自新聞紙で出した音を繋いで、クラスみんなで演奏しました。最後に自由な場所で演奏を聴いてよいことになった時、アーティストに張り付くように近付きマリンバの音とマレットの動きを楽しんでいました。

タイトル：塚越慎子マリンバコンサート

～鍵盤が奏でる魅惑の世界～

期 日：平成28年12月9日(木) 11:30～12:15

会 場：滑川市立西部小学校 音楽室

参加者：4年1組 37人

音だけの演出や4本マレットでの演奏では目を輝かせていました。市民に馴染みの曲「時計台の鐘」を、各自新聞紙を破ったり、丸めたり、叩いたり、振ったりして出た音を繋いで、クラスみんなで演奏しました。また、同じ曲でもアレンジしてリズムを変えることで曲のイメージも変わる楽しさを体験できました。授業終了後は交流を深めるため教室でアーティストと給食を一緒に食べました。



タイトル：塚越慎子マリンバコンサート
～鍵盤が奏でる魅惑の世界～

期 日：平成28年12月9日（木） 14：00～14：45

会 場：滑川市立西部小学校 音楽室

参加者：4年2組 38人

音だけの演出は一瞬でアーティストに釘付けとなりました。市民に馴染みのある曲「時計台の鐘」を各自新聞紙で出した音を繋いで、クラスみんなで演奏しました。また、同じ曲でもアレンジしてリズムを変えることで曲のイメージも変わる楽しさを体験できました。演奏を聴きながらリズムをとったり、体を揺らしたりと反応の良いクラスでした。

コンサート

タイトル：塚越慎子マリンバコンサート
～鍵盤が奏でる魅惑の世界～

期 日：平成28年12月10日（土） 14：00開演

会 場：滑川西地区コミュニティホール（定員：330人）

入場者数：195人

休憩時間を挟んだ2部構成のコンサート。マリンバとアーティストの魅力が十分感じられる素晴らしい演奏会で、来場者のほとんどは初めて耳にする楽器の音色に感動し聴き入っていました。アウトリーチを実施した小学校の生徒や先生の来場もあり盛り上がりしました。アンコール曲は、市民に馴染みの「時計台の鐘」のアレンジバージョンの演奏で、ピアノ演奏で聴いていた曲とは違う音色に感動の声が多く寄せられました。「マリンバ」に興味を持ちアーティストのファンが増えたと思います。



ホール担当者の意見・評価

総務課 山岡 美恵子

① 応募の動機・事業のねらい

プロのアーティストと直接関わり生の演奏を聴くことにより、音楽の楽しさや素晴らしさを心と体で感じ芸術に興味と関心を持ってもらう。また、事業実施のノウハウも専門知識を有する職員もいないので、専門家のコーディネーターのサポートを得られる事が必要であった。

② 企画のポイント

滑川市民に、生演奏で一流のクラシック音楽を聴くことにより、クラシックを楽しむことや感動を味わっていただき、ホールに足を運んでもらうきっかけづくりにしたい。また、各学校のアクティビティ先のクラスの子どもたちとアーティストと一緒に給食を食べて交流を図った。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

音楽のアウトリーチが定着していない市内の学校への事業の内容や意義の理解や日程調整

④ 上記③をどのようにクリアしたか

教育委員会に協力してもらい学校との調整をし、各学校の担当の先生方と何度も話し合いをすることにより事業内容について理解していただいた。

⑤ 事業を実施しての成果

一番は、担当者である私と、当財団職員が事業の必要性を感じ今後について考えられたこと。また、今までホールに来たことのない子ども達がコンサートに足を運んでくれたこと。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

ノウハウのない事業の開催にどのように取り組み進めてよいかわからない点が多く、コーディネーターやアーティストにお任せしていた部分が多かった。事業の周知時期の遅れや集客のための広報関係も不十分であり今後の課題となった。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

今回のおんかつを通して、アウトリーチ先の学校の子どもたちや先生、ホールへの来場者が、音楽の素晴らしさに感動して輝いた表情に触れ、おんかつ事業を継続して「良い音楽」を届けていけば関心のない方々もホールに足を運んでいただけると実感しました。

〈はじめに〉

富山県滑川市での公共ホール音楽活性化事業（以下「おんかつ」）。主催者の（一財）滑川市文化・スポーツ振興財団（以下「財団」）の山岡さんによると、おんかつのきっかけは滑川市長が（一財）地域創造の開催する文化政策セミナーに参加し、感銘を受け、滑川市の子供たちにも一流の音楽を身近な場所で届けたいと考えられたからだと聞いた。その意向を受け、おんかつ実施の前年には財団独自でアーティストに依頼し小学校へのアウトリーチと市施設でのミニリサイタルを開催している。そこでの手ごたえもあり、今年度満を持してのおんかつ実施となった。

また、マリimba奏者塚越典子さんにとっては公共ホール音楽活性化事業登録アーティストとして最初のおんかつだった。

〈アクティビティ〉

前述したように「子供たちに一流の音楽を身近な場所で届けたい」とのコンセプトで4回のアクティビティは市内の児童数の多い2つの小学校、市立東部小学校（12月8日）、市立西部小学校（12月9日）の4年生を対象に2日間で4回を実施した。いずれのアクティビティも共通の構成で実施されたが、マリimba奏者の塚越さんとピアニストの志村和音さんは、はじめてのおんかつにもかかわらず、その集中力の高い演奏に加え、工夫を重ねた構成と、本人の人柄が現れるスムーズかつ優しい語りで1校時45分間のアクティビティがとても短く感じられ、参加した児童も同じように感じているように見られた。アクティビティの中で、滑川市出身の音楽家、高階哲夫が作曲した「時計台の鐘」を使い、新聞紙を叩いたり、仰いだり、ちぎったり、破いたりして出る音を使い、子供たちに一人ずつ自由にリズムを演奏する時間を設けた。最初に新聞紙をどのようにしたら音が出るかのアイデアを子供から集め、そのアイデアを使い、塚越さんが演奏をして見せて、その後に子供自身がワンフレーズごとに入れ替わり新聞紙を使い演奏をする。新聞紙という日常の物がプロの音楽家の手にかかり表現手段になる瞬間を目撃する時間と自分たちでも新聞紙を手にとり自由に音で遊ぶ時間が隣り合う。堂々と新聞紙を叩いたり、破いたりできる時間は、非日常で子供の気分も高まり、盛り上がる時間になるのだが、回数を重ねる度に進行や子供の配置を工夫し、子供の盛り上がりの中でも限られた時間でスムーズに進行できるよう「改善」を重ねていった。この改善の様子からも塚越さんと志村さんのアクティビティに対する真摯な姿勢と高い能力が伺えた。さらに欲を言うのならば、スムーズな進行も大事ではあるけれど、次の段階として子供たちの盛り上がり、ある種の混沌とした時間を一緒に楽しんだり、応用する姿勢が加われば更に可能性が広がるだろう。

〈コンサート〉

普段クラシックの主催演奏会が少ないこともあり、当初コンサートは来場者数の心配をしていた。しかし初日の市立東部小学校のアクティビティが地元の新聞に掲載されたこともあり、直前に公演への問い合わせも増え、ふたを開けてみると会場の客席の8割は埋まっていた。コンサートはマリimbaのオリジナル作品からクラシック名曲のアレンジ作品、クリスマスソングまで多岐に渡り、マリimbaの魅力を十分に伝える本格的なもの。特に前半最後のガーシュイン/ラプソディー・イン・ブルーは塚越さんの表現の幅と鍵盤ハーモニカも駆使した志村さんの柔軟なアシストで、来場者の期待以上の充実感のある音楽を提供していた。最後のアンコールでは急きょ予定を変えてアクティビティでも採り上げた「時計台の鐘」を演奏。このアンコールを聞いた主催者を含めた地域の方から感激の涙が見られる場面もあった。このような場合に柔軟に対応できるアーティストの能力と感覚は流石、おんかつ登録アーティスト

と言える場面だった。

〈最後に〉

今回、主催者である財団の担当、山岡さんと話している際に、おんかつの成果の話になった。次年度の継続のため申請書を書く際に成果を記入する必要があり、困ったらしい。まだ、おんかつ1年目で成果を意識したり、実感したりする段階にないという。しかし、私には確かな成果が感じられた。それは事業の準備をするなかで公演を制作すること、アーティストと意見交換すること、アクティビティ等で財団外の人や組織と音楽やアーティストの話をするのを楽しい、もっとやりたいと担当者や財団自身が思ったことだ。公共ホール運営者が事業を実施することを楽しいと思うことほどの成果は他にない。まさにエンパワーメント。おんかつ、公共ホールを音楽で活性化する事業の本来の目的だ。これを成果と言わないで何が成果なのかと思う。もともと山岡さんが持っていた潜在的な情熱や財団の仕組みやチームワークが実ったおんかつだった。今後も事業を継続されると聞いているので様々な情報や経験が増えていくと思うが、今年のおんかつの感覚が常にどこかに残ってくれればと願っている。

実施団体：一般財団法人 武田の里文化振興協会

実施時期：平成28年10月13日（木）～平成28年10月15日（土）

出演アーティスト：喜名 雅（チューバ） 鈴村 真貴子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：

期 日：平成28年10月13日（木） 10：00～10：45

会 場：萠崎カトリック白百合幼稚園 ゆうぎ室

参加者年長組園児・園関係者 71人

演奏、楽器の説明に加え、演奏に合わせての合唱（「小さな世界」「せかいじゅうの子どもたちが」）を実施。チューバ自体あまり知らない子ども達が多かったものの、クイズなどあることで楽しみながら、集中して聴くことができていた。また演奏中のチューバが近くに来るとベル部分をのぞき込んだり触ったり、楽しんでいる様子であった。子ども達から歌のお返しもあり、音楽で交流が図られたアクティビティとなった。

タイトル：

期 日：平成28年10月13日（木） 16：30～17：15

会 場：萠崎市立萠崎西中学校 音楽室

参加者：吹奏楽部1～3年生・学校関係者 28人

ピアノソロを交えた演奏、各楽器の紹介など。間近で聴くプロによる演奏に、目を見開いて聴き入っている生徒がいたのが印象的だった。また、学校のチューバを借りての演奏では、普段使用している楽器のいつもと違う音色に生徒達も驚いている様子だった。チューバ、ユーフォニアムの生徒と共演（「TubaJubaDubu」）。「チューバを吹いてみたくなった」という言葉も出てくる、有意義なアクティビティとなった。

タイトル：

期 日：平成28年10月14日（木） 10：30～11：15

会 場：東京エレクトロン萠崎文化ホール 大ホール

参加者：ホールボランティア・武田の里合唱団など 15人

日頃、文化ホールの活動にご協力いただいている方を対象に開催。舞台上に客席を作ることによって楽器の響きを体感してもらい、また座席の方でも聴いてもらうことで場所による響きの違いを知っていただく機会とした。芸術・文化に興味がある方が多く、アーティストに積極的に質問を投げかけたり、演奏中のチューバやピアノに触れる際もとても興味深くのぞき込んでいた。普段あまりない、アーティストと直接触れ合える機会を十分に楽しんでいる様子だった。



タイトル：

期 日：平成28年10月14日（木） 16：30～17：20

会 場：蕪崎高等学校 音楽室

参加者：吹奏楽部1～2年生・学校関係者 51人

吹奏楽部1～2年生を対象に開催。演奏に加え喜名さんから、普段どのような意識で練習しているか、演奏に臨んでいるかなど話をしていただいた。中学と同じく、チューバ、ユーフォニアムの生徒との共演を実施（「情熱大陸」）。限られた練習時間とアーティスト入り日の事前の合わせを経て、本番ではよりまとまった演奏を聴かせてくれ、素晴らしい共演となった。質疑応答の時間もあり、生徒達の今後の演奏活動に活かせるようなアクティビティとなった。



コンサート

タイトル：本日は主役！縁の下の力持ちチューバ！

三世代で楽しむクラシックコンサート

期 日：平成28年10月15日（土） 14：30開演

会 場：東京エレクトロン蕪崎文化ホール 小ホール

（定員：300人）

入場者数：176人

アクティビティに参加した園児も入場できるよう4歳以上入場可とし、公演時間を50分に設定。演奏中の楽器に触れることができる場面を作っていた。普段なかなか体験できることではないため、お客様からも好評の声を多くいただいた。また、お客さんと歌うコーナーでは急きょ子ども達をステージにあげ一緒に合唱するという、お客様にとっても印象に残るステージとなった。

MCも通常のクラシック公演より多めにはさんでいただき、喜名さん、鈴木さんの人柄のにじむ温かいアットホームなコンサートとなった。



① 応募の動機・事業のねらい

「幼児からお年寄りまでの誰もが親しむことのできる事業の提供」を目的とした、地域文化振興のため。

② 企画のポイント

韮崎市では吹奏楽活動が盛んなため、アクティビティ先も吹奏楽部の生徒やマーチングバンドのある幼稚園とした。また、当ホールの良さを改めて知っていただくため、日頃から当ホールの活動にご協力いただいているボランティアの皆さん等を対象とした。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

本事業の企画意図やアーティストの魅力など分かりやすく伝えられず、各アクティビティ先から意見や希望を引き出すことが難しかった。また何を優先し、どうまとめていけば良いのか分からず迷うことが多かった。特にチラシ作成においては時間をかけすぎてしまい、チケット発売および広報も遅れた。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

コーディネーターの皆さんや過去の実施団体のスタッフなどに連絡を取り、過去の事例を教えてください参考にした。他の職員に確認を取りながら進めていった。

広報についてはチラシ配布のほか地元CATV、ラジオ局、有線放送などを利用した。

⑤ 事業を実施しての成果

アクティビティ参加者のわくわくした表情や驚いた表情から、クラシックやアーティストという存在が今までより身近になったのではないかと感じた。また、コンサートの感想には「振動しているチューバに触れて良かった」「チューバソロの演奏は初めてで興味深く聞いた」など好評の声も多く、チューバに対する印象を変える一つのきっかけにできたように思う。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

③にも書いたように、関わる方達におんかつの企画意図を伝えきれなかったことが反省点である。スタートする時点でどれだけきちんと伝えられるか、理解を得られるかが重要だと思う。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

アーティストの方を案内したり一緒にアクティビティ先を巡ることで、自身にとっても韮崎をより深く知る良い機会となった。

クラシックの本格的なコンサートへ来ていただく前に、まずその楽しさを伝えられる、クラシックが身近なものになるこうした事業が多く必要なのかもしれないと感じた。その面白さを自ら発見することで興味を持ち、コンサートへも足を運ぶ方も増えるのではないかとと思う。

市内各施設に出かけ音楽の素晴らしさを届けるアウトリーチ事業は今までどおり継続し、地域とのつながりを強め、音楽だけでなくホールも身近な場所としてより親しんでもらえる場所にしていきたいと思う。

【全体の方針】 アクティビティを通し文化事業への理解者を増やす

アクティビティ1) 未開拓の対象/幼児へのアウトリーチプログラム

〈対象〉年長組67名 〈会場〉 葦崎カトリック白崎幼稚園

園長先生の期待と相まって、園児がとてもコンサートを待ち望んでおり、全体を通してしっかりと落ち着いてプログラムを体験することができた。チューバの低音の迫力と、楽器そのもののインパクト、何よりも喜名さんと鈴村さんの優しく包み込まれるようなお人柄にグイグイ魅了されていく様子が印象的だった。特に、チューバ、ピアノの周りに園児を集めて演奏する場面では、音の響きの中に包まれているような一体感が得られた。

アクティビティ2) チューバのイメージを変える/楽器経験者へのアウトリーチⅠ

〈対象〉吹奏楽部員1～3年生33名 〈会場〉 葦崎市葦崎西中学校

吹奏楽におけるチューバの人気は決して高い方ではない。だからこそ楽器としての凄さを吹奏楽部員に体験して欲しいというオーダー。中学生たちはチューバとは思えないほど軽快に動く指先と、チューバの常識を超える音楽性に圧倒され、正しくその価値観が変わったに違いない。管楽器に共通するテクニックを伝授するコーナーや、チューバ・ユーホニウムの中学生達との共演もあり、「本日は主役！チューバ」なプログラムとなった。

アクティビティ3) 市民へのアプローチ/関係者へのインリーチプログラム

〈対象〉ホールボランティアスタッフ・竹田の里合唱団 計14名 〈会場〉 東京エレクトロン葦崎文化ホール・大ホール

葦崎文化ホールの事業内容や活動をより理解していただくために実施した今回の象徴とも言えるインリーチプログラム。大ホール舞台上を会場とすることで、舞台上の近接距離を活かすとともに、大ホールの残響を存分に味わうことができる2つのメリットを活かした。チューバに直接触れたり、ピアノの下に潜るなどの小学校アウトリーチの要素や、大人対象でしか出来ない深い話や楽器の構造的な話を盛り込むなど多様なプログラムを実施。本企画はこれからさらに需要が増えてくるであろう「大人向けアウトリーチ」の可能性を大いに感じさせた。

アクティビティ4) 「演奏」と「聴く」の間にあるもの/楽器経験者へのアウトリーチⅡ

〈対象〉吹奏楽部員1・2年生50名 〈会場〉 山梨県立葦崎高校

同じ吹奏楽部員でも中学生と高校生とでは、音楽に対峙する気持ちや姿勢が多少異なる。喜名さんは、その微細な差を感じ取り、演奏家として、1人の人間として生徒一人一人に語りかけているようだった。そして、一つ一つの言葉の重みをしっかりと生徒は受け止めていた。中学校同様に生徒との共演を実施したが、高校生自ら感じたことや今の自分を語る場面もあり、インタラクティブな要素を存分に取り入れた正に舞台と客席が一体となるアウトリーチの醍醐味を感じた。真剣味を帯びた生徒の眼差しの中で演奏するチューバ協奏曲は今まで以上に熱気を帯びていたのは言うまでもない。

本公演) 本日は主役！縁の下の力持ちチューバ！～三世代で楽しむクラシックコンサート

〈全席自由〉一般500円/小学生以下無料 〈会場〉 東京エレクトロン葦崎文化ホール・小ホール

フライヤー作成の段階から如何にチューバの魅力を全面に打ち出すかが課題であった。結果的に「本日は主役！～」になり、チューバの本来の役割と本公演の主旨の両方を伝える紙面となった。来場者数

は当初は不安があったものの、蕪崎文化ホールの方々の努力、そして、アクティビティで繋がった方々の口コミ効果もあり、定員300の小ホールの約半数が埋まった。またアンケートが129枚と脅威の回答率を得たことから、本公演がお客様にとっていかに新鮮で、いかに興味深かったかが伺える。プログラムの中で特に印象深かったのは、喜名さんが客席に降り立ち、一人一人にチューバの響きを体験してもらうシーン。予定よりも大幅に時間はかかったが、その分、その熱意とチューバの響きはお客様の心に刻まれたことだろう。

実施団体：長野県須坂市

実施時期：平成28年11月17日（木）～平成28年11月19日（土）

出演アーティスト：ヴィタリ・ユシュマノフ(バリトン) 山田 剛史(ピアノ)

アクティビティ

タイトル：須坂小学校 交流コンサート

期 日：平成28年11月17日（木） 10：55～11：40

会 場：須坂小学校 音楽室

参加者：5年生 22人

児童たちが事前に学習した、ヴィタリさんの母国である「ロシア」の暮らしや食べ物のことを発表しながらヴィタリさんをお招きする場面からスタート。ヴィタリさんからは、声を出すための準備方法や体操を教えてもらいながら、子供たちが普段歌っている「まっかな秋」をいっしょに合唱。グラニュー糖を使った、「響く声」「響かない声」を比べる実験では、目で見えるの声の違いに子どもたちは大喜びだった。

タイトル：日滝小学校 交流コンサート

期 日：平成28年11月17日（木） 13：55～15：25

会 場：日滝小学校 音楽室

参加者：5年生 51人

児童たちが、自分たちの暮らす地域を紹介するために、地域の民話「日滝の笛」の寸劇を発表。さらには「カチューシャ」をロシア語で発表してくれ、ヴィタリさんもびっくり。ヴィタリさんといっしょに「カチューシャ」を歌った。会の最後には、折り鶴の首飾りや習字のプレゼント、飛び入りでボーカルアンサンブルクラブの子ども達の合唱発表もあり、盛りだくさんの会となった。

タイトル：仁礼小学校 交流コンサート

期 日：平成28年11月18日（金） 10：45～11：45

会 場：仁礼小学校 音楽室

参加者：6年生 43人

事前リハの時間に、ヴィタリさんが子どもたちと唄う「ふるさと」の歌詞を日本語で黒板に書いて準備。日本の「ふるさと」ロシアの「ふるさと」それぞれを子どもたちにプレゼント。真剣なまなざしでヴィタリさんの声に聞き入っていた。事前におとなしい子どもたちと聞いていたので心配したが、発声のための体操と、「響く声」「響かない声」を比べる実験であつという間に笑顔いっぱいの会になった。



タイトル：相森中学校 交流コンサート

期 日：平成28年11月18日（金） 14：40～15：30

会 場：相森中学校 音楽室

参加者：3年生 125人

無伴奏による混声4部合唱による校歌を、伝統的に学校全体で取り組んでいたことから、アクティビティとしては異例の、3学年全体で125人という規模での開催となった。生徒たちにより身近に感じてもらうことは難しかったが、進路選択の時期にある3年生が、音楽の世界に進んだヴィタリさんの思いや本物の声に触れるなかで、新たな刺激を受ける時間になったと思う。



コンサート

タイトル：ヴィタリ・ユシュマノフコンサート

～新しい魅力、発見～バリトンとの出会い～

期 日：平成28年11月19日（土） 15：30開演

会 場：須坂市文化会館メセナホール 小ホール(定員:305人)

入場者数：71人

会場である須坂市文化会館メセナホールではあまりなかったスタイルの、低廉な価格、男性ソロのバリトンコンサートとして開催した。アクティビティで訪問した学校の児童から90歳代の方まで、幅広い年齢層の方に入場していただいた。アンケートでは、素晴らしい歌声とピアノの伴奏に感激した、心を洗われた、もっと多くの方に聞かせたいなどの声がたくさん寄せられた。終演後のサイン会では、ヴィタリさん、山田さんと言葉を交し合う入場者の笑顔が印象的だった。



① 応募の動機・事業のねらい

市内には、音楽、歌声の力に期待する素地、土壌はあるものの、クラシックコンサートの入場者数や音楽活動に関わる人口は低調。

おんかつ事業によるアクティビティに、児童およびその保護者が関わりコンサートの入場へつなげることから、市内の音楽活動、文化活動の活性化へ結びつけたい。

② 企画のポイント

アクティビティは、市内の小中学校の児童生徒のみを対象に開催し、普段触れる機会の少ない、男性の本物の歌声をより身近に感じられることを意識した。

アクティビティを受身の姿勢で参加するのではなく、事前にアーティストの下調べをしてたり、迎え方、おもてなしの方法、交流方法を考えることから、より身近に感じられる時間となることを意識した。コンサートは、「ワンコイン」コンサートとし、気軽に入場いただくことをねらった。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

「おんかつ」を導入した市のねらいを、アクティビティ訪問先に伝えること。

アクティビティ訪問先の学校の思いをアーティストサイドに伝えること。

事業を担当するスタッフ不足。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

アクティビティは、ヴァイタリさん、山田さんの考えていただいたプログラムを訪問先の学校に伝えながら、学校側の希望をつかんだ。

学校ごとの希望への対応や、コンサートの準備については、コーディネーターの山本さん、アシスタントの高荷さん、地域創造の上木さんに全面的にバックアップいただいた。

⑤ 事業を実施しての成果

アクティビティを小中学校のみにしぼり、普段あまり触れることのない、男性の本物の歌声を子どもたちに身近に感じてもらうことができた。

ホールでのコンサートでは、今回のような内容、スタイルでの開催を望む声が多くあることに気づくことができた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

アクティビティ、コンサートの内容、組み立て全般を、コーディネーター、アシスタントさんに頼りきってしまったことを反省。実施主体として、少なくとも複数名の担当者配置は必要。

コンサートについては、今回のような内容、スタイルでの開催を望む声が多くあるにもかかわらず、幅広く広報することができなかったこと。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

アクティビティ先での子ども達の笑顔、コンサート終了後の入場者の皆さんの笑顔を見ながら、「本物」に触れることの意義は大変大きいと感じた。市民はクラシック音楽にあまり興味がないと感じていたが、実際は、企画し届けようとする側の工夫次第ではないかと感じた。今回の反省を今後にかけていきたい。

「ロシア人のプロの音楽家が須坂に来る」。こんな滅多にない機会を存分に生かし切ろうと動いてくれたのは、アクティビティで伺った学校の先生方だった。多くのアウトリーチの場合、ホール側が用意してくるプログラムを学校側は受け入れるだけと捉えられることがほとんどだが、今回は違った。事前に子どもたちがロシアについて調べ学習した内容を発表してくれたり、子どもたちが住む地域に伝わる伝説を劇にして披露してくれたり、ロシア民謡の「カチューシャ」をなんとロシア語で！歌ってくれたり、とにかく子どもたちからのアウトプットが多かった。先生方が、異文化理解や地域の学習の「教材」としてこの機会を扱ってくれたのだ。

実は先生方がこんな捉え方をしてくださったのには裏があった。今回おんかつ事業の担当をされた須坂市の小川さんは、4月に東京（地域創造）で行われたはじめての全体研修会に参加されておらず、アクティビティのイメージが曖昧なまま学校との調整を進めなければならなかった。そんななかで、アクティビティを、学校で行ういわゆるミニコンサートと捉え、その準備などの裏方業務を子どもたちに体験してもらおうと、「アーティストの下調べやおもてなし」をお願いしていた。ところが下見でコーディネーターの話を聞くと、どうやら普通の「授業」に近いものらしいということで、先生方も改めてこの機会に向き合い準備してくれたようだった。今回は認識のズレが功を奏した形となったが、学校外の機関が普段学校では体験できない機会をもたらし、それを活用して充実した体験活動としてくださったことは、今後、文化行政と学校とが連携する上で、良い前例となることだろう。

一方で今回、特例的に120名以上を対象としたアクティビティとなった中学校での取り組みは、課題が多い結果となった。アクティビティ先として中学校120名と提案された当初は、おんかつのスタイルでは120名以上を対象にするのは難しい、何とか人数を絞れないかと再検討をお願いした。さまざま協議したのだが、結局この人数での実施に踏み切った決め手は、校歌だった。この学校の校歌が混声四部合唱のアカペラで歌われることを伺い、この校歌を手掛かりにしたプログラムであれば、この人数だからこそできるアクティビティにできるのではないかと判断したのだった。しかしふたを開けてみると、体の大きな中学生120名は想像以上に大きな相手で、ヴィタリさんがやって見せていることや、指示していることが全体に伝わりづらかったり、要にしていた校歌も、指導をお手伝いいただく予定だった教育長との下打ち合わせの時間が十分に取れなかったりして、残念ながら有効に活用できなかった。それでも、目の奥が感動で揺れているような表情を湛えた生徒達を目にすると、中学生という時期に心を強く揺さぶるものと出会うことの重大さにはっとさせられた。対象人数が多くなりがちな中学校だが、実施方法の工夫・改善や、プログラム内容の開発など、もっと研究され良い実践例がどんどんと共有されていくと良いなと思う。

最終日のコンサート。来場者の満足度がかなり高かっただけに、集客に苦戦してしまったのが大変残念だった。要因としては、近い日程で同じジャンル（音楽）の大きな周年事業が入ってしまっていたり、同日に大ホールで行われる市のイベントと重なってしまったりと、そもそものコンサート開催日設定の時点での反省点が多かったように思う。

しかし来場者の半数近くが、学校からのお知らせをきっかけに来てくださっており、学校へのアウトリーチによって、先生方や保護者の方の、文化事業への興味関心や理解を得ることができたのではないかという手応えが感じられた。「普段はどんなコンサートに行ったら良いのかわからなかったけれど、今回学校からのお知らせがあって来てみたら、ものすごく良かった。もっとこうした企画をやってほしい」と、興奮気味に話されていた子ども連れのお客さんの言葉が心に残っている。初めて尽くしの事業をたった一人で担当した小川さんにとっても、はっきりと手応えが感じられた一言だったと思う。子どもたちの目、お客さんの表情、「このためにやるんだ」とひとつ信念さえあれば、そしてその信念を

仲間と共有していければ、次年度以降も手応えのある実践が積み重ねられることと思う。この事業と一緒に担当できる職員が増えますように！と願ってやみませんが、今回各所で感動を共有した方々からもきっとサポーターが表れるのでは。ヴィタリさんの歌声から、想像のなかでみんなが見た「小さな空」。優しい想いがつながって、須坂のまちを見守る大きな空となりますように。

実施団体：関市教育委員会

実施時期：平成28年12月1日（木）～平成28年12月3日（土）

出演アーティスト：喜名 雅（チューバ） 鈴村 真貴子（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：下有知中学校アウトリーチ

期 日：平成28年12月1日（木） 11：45～12：35

会 場：下有知中学校 音楽室

参加者：3年1組 37人

進路など自己と向き合う中学3年生が対象のため、希望を抱くプログラム構成にいただきました。吹奏楽部が活躍している学校ですが、チューバを知る機会はなく、クイズ形式の楽器紹介も盛り上がりました。日々の練習によって演奏できるようになった曲の演奏とエピソードには、生徒は自分たちの日常も重ねながら真剣に耳を傾けたようです。

タイトル：下有知中学校アウトリーチ

期 日：平成28年12月1日（木） 14：00～14：50

会 場：下有知中学校 音楽室

参加者：3年2組 38人

給食交流を挟んでの実施となり、1組の生徒から話を聞き楽しみにしていたようです。チューバの体験演奏では、生徒代表の初めての体験にクラス全員が自分が体験するかのように見守りました。また、振動を感じてもらうため全生徒の間を練り歩くアプローチでは、笑顔があふれました。しゃがんだ体勢でカノンを吹き続けるのはつらいものですが、伝えたいという喜名さんの想いと温かな人柄が表れたプログラムになりました。

タイトル：板取川中学校アウトリーチ

期 日：平成28年12月2日（金） 11：30～12：20

会 場：板取川中学校 音楽室

参加者：1年生～3年生 60人

平成28年4月に統合し、新しい学校としてスタートしました。その新しい校歌を切り口にしたピアノとチューバの音域対決では、実感として楽器の特性を知る機会となりました。小規模校のため、全学年での授業となり、先輩を前に緊張する生徒もいたようですが、興味を持った楽器への集中力が続き、50分の授業を名残惜しく感じさせるプログラムとなりました。



タイトル：アウトリーチとは何でしょう？

期 日：平成28年12月2日（金） 16：00～17：10

会 場：関市文化会館小ホール舞台上

参加者：市内小中学校の校長、教員と市職員 10名

中学校で開催したプログラム50分の演奏と15分のアウトリーチレクチャーの構成です。すぐ目の前で演奏を聴く贅沢な体験に、参加された先生方からは感動の声を職員からはアウトリーチという手法についての驚きの声をいただきました。レクチャーでは、実施の様子を画像で紹介し、昨年担当された先生とホール担当からの話、アーティストへの質問時間を設けました。

コンサート

タイトル：チューバが主役！喜名 雅の音魂ストーリー

期 日：平成28年12月3日（土） 14：00開演

会 場：関市文化会館小ホール（定員：230人）

入場者数：114人

チューバの温かな音色から、超絶技巧までを伝えるコンサート。アウトリーチ実施クラスでは、喜名さんから専用ご招待券のプレゼントがあり14名が来館してくれました。練り歩き振動体験を全てのお客様に体験していただき、超絶技巧曲の演奏まで約2時間の、熱演でした。

また、ここから来たよマップをホール入り口に設置し、コンサートの波紋が届いた様子を伝えました。



① 応募の動機・事業のねらい

本市のアウトリーチなど教育普及事業は、これまで実施してきませんでした。子供たちなど芸術文化に出会う機会のない市民に直接働きかけることで、文化振興事業の認識を改め、その効果を多くの人に理解していただきたいという現場の思いから応募しました。

また、昨年のアウトリーチフォーラム事業の実施に引き続き、事業を継続するために、経験を積み、学びたいというねらいがありました。

② 企画のポイント

当初、様々な対象で芸術文化の楽しみや文化会館の活動の可能性を広げることも考えましたが、方向性を1つに絞り、今後の事業継続を大事に考え、子供たちへの企画である学校へのアウトリーチに集中したものとしました。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

教育現場における要望と文化振興としての企画の在り方の調整です。経験値不足のせいか実現できる（効果のある）プログラムのイメージが描けないため、学校からの要望の判断に困ることがありました。

また、教員向けや学校との調整の時期について、実施年度中となると困難な場合もありました。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

対象の定員の問題は、お互いの話で調整がつかず実現できなかった学校もあります。企画意図を含め、理解していただけるような説明、一緒に実現するための最善の判断については、すべて解決できたとは考えてはいません。

⑤ 事業を実施しての成果

これまで、直接演奏家とのやりとりをしない自主事業が主でしたので、プロのアーティストとの関わり方を体感しました。ミーティング後のプログラムの変化など、魅力あるアーティストに最大限に期待すること、一緒に企画を描く関係性が重要であることの実感です。この認識は、今後の取組でも必要となるものです。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

アーティストの持ち味をもっと早く見抜くことが必要でした。また、実施先との交流を普段から持ち、理解を進めることができたなら、効果もより上がったように思います。そして、本市の規模でどのような形式で実施することが最善であるかが継続に向けての課題です。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

学校の教室、子供たちのこと、現状を知らないことが多く、職員としてショックも受けました。

チューバのソロコンサートという珍しい企画に、近隣市町村のお客様の興味をひいていたことは、うれしかったことです。決して新しくないホールの当館に、期待を持ってもらえる自主事業の企画として、答えの一つのようにも考えました。

関市は、平成27年度岐阜県が実施したアウトリーチフォーラム事業に参加していたこともあり、今後の事業展開のためにどう手を打っていくか、戦略的な仕掛けが求められる「2年目」だったと言える。教育委員会として、今後学校へのアウトリーチを継続していきたいとのことで、今回は、フォーラムではアプローチできていなかった中学校と、キーパーソンとなるような先生方を発掘する狙いで、校長や音楽主任の先生方に向けたインリーチを企画した。

人数が多くて頭を悩ますことの多い中学校への企画だったが、フォーラムを経験されていることもあり、少人数での取り組みの意図を適切に学校側に伝え、無理のない実施環境を整えてくださった。またインリーチについても、早い段階から校長会の日程と調整し先生方への周知のタイミングを計画したり、喜名さんのメッセージ入りの招待状を作成したりするなど、丁寧に準備してくださっていた。残念だったのは、興味を持って参加してくださった先生方がほんの数名に留まってしまったことだった。先生方に、業務時間外に任意参加の研修に来ていただくことの難しさを痛感し、先生方の興味をひく内容・呼びかけ方など、もう少し工夫の仕方があったかもしれないと反省が残る。ただ、参加者が少ないということで急遽呼び集めて参加していただいた、教育委員会の他の部署の方々に、文化課がこういうことを始めようとしている、ということを知っていただき、前向きに理解してくださったことはありがたかった。近く策定されるという市の文化振興計画に向けても、アウトリーチの理解が進むことを期待したい。

さて、肝心のコンサートの方だが、「チューバ」のリサイタルなんて首都圏でもなかなか開催されることのない珍しいもの。ふつうにやったらこのインパクトが伝わらない、ということで、チラシの案についても、チューバという楽器の魅力、このコンサートの魅力をどうしたら伝えられるか、多くのアイデアを出し合って練っていった。また、今回のアクティビティ先の一つでもある板取川中学校のある板取地区など、関市の中心地から離れたところからも関市文化会館に足を運んでもらうことを狙いに、各地からの路線バスの案内も掲載されていた。コンサート当日にも、ロビーに「ここから来たよマップ」を掲示し、来場者にどこから来たか地図上にシールを貼ってもらう企画も実施。一般的なコンサートでは、お客さんが他のお客さんの情報を知ることは少ないが、「どこどこから来ている人と、この時間を共有しているんだ」と頭の片隅でも思っただけ音楽と一緒に聴くことで、どこか温かい雰囲気会場に生み出していたと感じた。

また、アクティビティで伺った中学校の生徒さんたちも多く来場してくれ、アーティストと彼らとの心の距離の近さが、他のお客さんにも伝播したように感じられた。コンサートでも、アクティビティで行ったのと同じように、チューバを吹きながら一人ひとりの客席を巡って、楽器を触りその振動を直接感じてもらったが（来場者が多く、かなり時間を要してしまったのだが…）、文字通り舞台から降りて、手の届く距離で観客にアプローチした喜名さんの姿勢は、あたたかい人柄とあいまって、来場者の心を掴んでいたようだった。

「良いチームだったね。」誰もが思っていたことを、誰かが打ち上げで口にしていた。仲良く、良いチームワークで実施ができればそれで良いのか、という話ではなく、「皆で作ったおんかつ」という感触の強いものだったことが、今回関市のおんかつに関わった者達に共通して感じられた手応えだったと思う。誰かの強いリーダーシップやアイデアに皆がついていくというよりは、関市の西脇さんが提示してくださるたたき台を、皆でああでもないこうでもないと練り上げていった感じだった。アクティビティの内容について、アーティストとスタッフ全員とで、振り返り意見を出し合った時間も、とても有意義だった。そうした現場を通して、ホールが主催の「地域目線」で企画を実施していくノウハウを、どんどんと吸収していく担当者2人（西脇さん、長尾さん）を目の当たりにしたおんかつだった。今後この事業を継続していくにあたり、どう仕組みづくりをしていくかがこれからの課題になると思うが、現場で得られた信念・確信を大事に積み上げていって欲しいと思う。

実施団体：公益財団法人 城陽市民余暇活動センター 文化パーク城陽

実施時期：平成28年11月25日（金）～平成28年11月27日（日）

出演アーティスト：加藤 文枝（チェロ） 小澤 佳永（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：富野小学校 音楽室

期 日：平成28年11月25日（金） 11：30～12：15

会 場：富野小学校 音楽室

参加者：5年生 40人

2人の演奏を聴いてどんな色が頭に浮かんだか、予め見た2種類の絵のどちらをイメージしたか、いくつかフレーズを聴いて絵を描いたり等、観て聴いて感じるアクティビティ。

最初は皆さん緊張した様子だったが、徐々にほぐれて賑やかなアクティビティになった。

絵を描くなど手を動かす作業を交えることで集中力が持続したように感じた。

タイトル：富野小学校 音楽室

期 日：平成28年11月25日（金） 13：45～14：30

会 場：富野小学校 音楽室

参加者：5年生 37人

午前に実施したものと同じ。

午前の部より大人しい雰囲気だったが、1人明るい生徒がいるとみんなもつられて、自分の気持ちを出すようになった。

同じフレーズを聴いても感じ方は人それぞれで、なぜそう思ったかしっかり発表していた。

タイトル：文化パーク城陽 音楽練習室

期 日：平成28年11月26日（土） 10：30～11：15

会 場：文化パーク城陽 音楽練習室

参加者：24人

富野小学校で実施したものと同じ内容だったが、対象が市内の音楽教室に通う生徒で年長～小学高学年までと幅があった。

お互い知らない子同士の参加ということもあって終始緊張した様子だったが、演奏が始まると集中して聴き入っていた。



タイトル：親子で楽しむ 絵本読み聞かせ×チェロ ミニコンサート

期 日：平成28年11月26日（土） 14：30～15：15

会 場：城陽市立図書館おはなし室

参加者：49人

文化パーク城陽館内にある城陽市立図書館のおはなし室で実施した。ここでは普段、図書館職員やボランティアサークルによる絵本の読み聞かせをしており、楽器の演奏は初めて。

今回は絵本の読み聞かせと演奏のコラボレーションということで、絵本の場面に合わせ2人の演奏が入り、最後は10分弱のミニコンサートを行った。

前半に読み聞かせ、後半にコンサートと分けた事により大人も子供も楽しめるコンサートになった。



コンサート

タイトル：加藤文枝 チェロ・リサイタル～みんなのクラシック～

期 日：平成28年11月27日（日） 14：00開演

会 場：文化パーク城陽ふれあいホール（定員：250人）

入場者数：119人

タイトルに～みんなのクラシック～と入れて、アーティストにはクラシックにあまりなじみのない方にも楽しんでもらえるような曲も入れてもらった。気軽に本格的な演奏を聴けるコンサートになった。

毎月無料のコンサートをしている会場なので、おなじみのお客様からアクティビティ先の小学校の生徒、比較的若い方にもお越しいただいた。



① 応募の動機・事業のねらい

前回のおんかつの実施から5年、また改めて初心にかえり音楽を通じて地域住民との交流を図り、ホールの活性化につなげたい。

② 企画のポイント

主に若い世代を対象にアウトリーチを実施し、クラシック音楽になじみのない方に少しでも関心を持ってもらい、今後のコンサートやホール利用につながるような事業を目指した。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

1度のアクティビティの人数制限に苦労した。企画当初、アクティビティ先に小学校2校を考えており、1校につき1クラスで調整を進めていたが、参加できない学年やクラスに対して不公平になると意見があった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

今回は1日目の富野小学校1校に絞り、5年生学年全体を対象に2回に分けて実施した。
もう1校は今後、コンサートの招待や、アウトリーチ等、フォローするようしたい。

⑤ 事業を実施しての成果

単年で久しぶりの実施のため、ホールの活性化というものに関してはこれから継続して実施することが必要になる。図書館でのアクティビティに関して、音を出すことが難しい環境の中、図書館と利用者の理解を得て実施し、今後の図書館の事業の幅が広がった事は良かった。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

事業を進めていく中でアクティビティ先の負担をもう少し減らすことができれば、受ける側も積極的に実施できるように感じた。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

人口の減少や若年層の人口流出が進む中、どう工夫して集客するか。

今回の舞台、京都府城陽市は、京都の玄関口であるJR京都駅から電車で30分ほど。田んぼや畑、山などの自然に囲まれた中をJR・私鉄両線が走っており、京都や奈良・大阪への通勤通学圏内となる街だ。

おんかつの拠点となるホール、文化パーク城陽は、地下1階・地上5階の建物内に、大・小ホール、図書館、プラネタリウム、歴史民俗資料館、コミュニティーセンター、その他音楽練習室や会議室などを有する複合文化施設である。ホールを使用する事業としては、年に数回オーケストラやポップスのコンサート、子どものためのコンサート、落語会や映画上映などの催しが行われている。それ以外にも、プラネタリウムでのコンサートや図書館での読み聞かせなど、無料で参加できるイベントが開催されており、コミュニティーセンターでの文化講座も含めて、さまざまな年齢層の地域住民が自分の利用形態に合わせて足を運べる場所となっている。

担当者の武井さんは城陽市出身、城陽市育ちの生粋の城陽っ子。事前に拝見したプロフィールシートの自己PRには「被り物、仮装することに抵抗はございません。」と書かれていたのがとても印象に残っている。おんかつを通じての目標は、“市内の人”に“ホールに”足を運んでいただけるようになること、武井さん個人としては、普段の主な担当が広報のため、おんかつを通じて企画・立案・制作を学びたいということであった。ホールとしては、宇治市や八幡市という近隣の市にも大きな会館があり、コンサートを行う場合は競合する可能性があるため、近隣の市からの来場者だけでなく、地元城陽のお客様を定着させたい、そして施設だけでなく、どうすれば“ホールに”足を運んでいただけるかということが課題であった。

上記のことから、地元京都出身のチェリスト加藤文枝さんとピアノの小澤佳永さんを迎え、4回のアクティビティを小学校・施設内の音楽練習室・図書館で、コンサートは『加藤文枝 チェロ・リサイタル～みんなのクラシック～』と題して実施された。

〈アクティビティ①② 小学校5年生×2クラス、③未就学児～小学生+保護者（音楽練習室）〉

まずはご挨拶代わりに「愛のあいさつ」を演奏した後、自己紹介とコンセプトの説明を行った。今回のアクティビティのキーワードは“想像力”。さまざまなツールと加藤さんの音楽で、どのように子どもたちの想像力が引き出されるかが楽しみであった。

子どもたちの想像力をはたらかせるために、水面に浮かぶ白鳥の写真を見せ、水面:ピアノ、白鳥:チェロということでサン＝サーンスの「白鳥」を聴かせてウォーミングアップを行う。その後は曲の印象を色や昼夜、シャガールの絵かゴッホの絵か、という二択で考えさせたり、曲を聴いて浮かんだ食べ物の絵を描かせたりと参加型の内容が続く。最後は、それぞれが主人公になって冒険に出よう！というコンセプトのもと、ポッパーの「ハンガリアンラプソディ」を聴きながら、子どもたちはそれぞれの旅を思い描いた。

初回のクラスは、子どもたちも最初は少し硬い様子であったが、加藤さんのはんなりとやわらかい語りかけによってほぐれていき、先生も一緒になって楽しんで下さったお陰で、だんだんと反応が見られるようになった。帰り際には、自分たちが描いた絵を見せに来るなど、すっかり打ち解けた様子に。2クラス目は、冒頭から活発な反応が返ってくるクラスで、さまざまな楽しい意見が出ていた。驚いたのが、食べ物の絵を描く場面で、1クラス目は言われたままに絵を描いた子が多かったのに対し、2クラス目は絵よりも文字で箇条書きにする子どもが多かったことだ。想像力をはたらかせて、さらにそれを表現するという点について、子どもによって違いが出るのが分かった。

文化パーク城陽内の音楽練習室におけるアクティビティでは、子どもたちとの距離が近かったこともあり、加藤さんが子どもたちの反応を細かく汲み取りながら進めていたのが印象的であった。2回のアクティビティを経て、問いかけの仕方や質問内容にも変化が見られ、1人1人と会話することで、子ど

もたちにとっても“チェリスト”という特別な人との距離が縮まり、音楽をより身近に感じてもらえたと思う。

〈アクティビティ③ 図書館における読み聞かせ+コンサート〉

複合型の施設という特色を活かし、普段読み聞かせのイベントを行っている図書館とのコラボレーションが実現したもので、図書館内にあるおはなし室という場所を使って行われた。ピアノが常設でないのでアップライトピアノを運び込むこと、部屋のスペースが限られていること、大きな音がするという点で利用者の方への事前周知が必要なことなど、さまざまな制約があったが、図書館職員の方のご理解とご協力のもと、条件をクリアすることができた。

全体の構成については、普段読み聞かせを担当されている方に候補を挙げていただき、その中から加藤さんが本を選び、全体のプログラムを組み立てるという形で進められた。事前の合わせは前日のみであったが、お互いの息がぴったりと合い、子どもたちの反応が楽しみな仕上がりとなっていた。

当日は、幅広い年齢層の子どもだけでなく、大人単独で来られる方も多く見られ、部屋の外にまで立ち見が出るほどであった。満員の様子を見て帰られる方がいらっしやったり、子どもたちが見聴きしやすく、かつ演奏スペースを確保するという点で、部屋のキャパシティとの兼ね合いが難しかったが、演奏者との距離の近さや部屋いっぱいにあふれる音を体感していただけたと思う。

〈コンサート〉

気軽に本格的なクラシックを楽しんでいただき、お客様にはまたこのようなコンサートを聴きたいと言っただけのように、という担当者の想いで、コンサートのサブタイトルは『～みんなのクラシック～』と銘打たれた。アクティビティと同じくご挨拶代わりに一曲「愛のあいさつ」でスタートしたコンサートは、「白鳥」、ラフマニノフの「ヴォカリーズ」と、どこかで耳にしたことのある聴きやすい曲で導入をはかり、ショスタコーヴィチ、カサド、ブラームス、ポッパーと続く。後半にはフランクのチェロ・ソナタ全楽章が演奏され、全体として、親しみやすさと共にしっかりと聴かせどころのあるプログラム構成に、お客様の満足度も高かった様子であった。

〈全体を通じて〉

文化パーク城陽は館内施設に恵まれているだけでなく、以前おんかつを担当された方や、ステージマネージャーもこなす経験豊富な事業部の方、素晴らしい気配り目配りをされる舞台スタッフの方がいらっしやった。担当者の武井さんは、地域の特性や、生まれ育った地元の良いところをたくさんご存知だと思うので、ぜひ使えるツールを使って、困ったときには先輩方に甘えつつも、さまざまなことを吸収しながら、今後、このおんかつでの経験を活かした事業に取り組んでいただければと思う。

お客様にホールに足を運んでいただくということを考えたとき、コンサートの集客ということに関して、事前の状況では正直なところ心配であったが、当日ふたを開けてみると予想以上の来場者であった。新聞広告や地域の情報紙への情報掲載、館内での広報、チラシの手渡しも含めて、アクティビティを通して加藤さんやコンサートの存在を知っていただいたこと、それらの中で、媒体を使って広く周知させる方法、いつも来られる方への更なるアプローチ、距離を縮めた中でお知らせする方法、お客様となり得る方へのアクセスとして、今回行ったどの方法が効果的であったのだろうか。アクティビティを単発の企画＝点で終わらせるのではなく、点と点をつないで線にし、それを使って絵を描くことができるようになれば、“市内の人”に“ホールに”足を運んでいただく、という目標に近づけるのかもしれない。

実施団体：王寺町

実施時期：平成29年1月19日（木）～平成29年1月21日（土）

出演アーティスト：塚越 慎子（マリンバ） 石黒 唯久（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：北小コンサート

期 日：平成29年1月19日（木） 11：40～12：25

会 場：王寺北小学校 音楽室

参加者：4年1組 31人

廊下よりマーチング用の木琴の演奏で登場。木琴とマリンバの違いを子ども達に考えさせる。打楽器の説明。「手」も楽器であることを伝え、表打ち・裏打ちでリズムを教える。事前にビデオレターで楽器を作ってもらよう依頼しておいた楽器を、鳴り方で4つのリズムにわけ「ブラジル」を全員で合奏する。先生も一緒に参加してもらう。最後はマリンバ及びピアノの周り好きな場所に学生を呼び、マリンバの魅力をつぶり届けました。その後給食に合流し、サイン大会となりました。



タイトル：北小コンサート

期 日：平成29年1月19日（木） 13：55～14：40

会 場：王寺北小学校 音楽室

参加者：4年2組 28人

登場方法は同じ。木琴とマリンバの違いを子ども達に考えさせる。打楽器の説明。「手」も楽器であることを伝え、表打ち・裏打ちでリズムを教える。事前にビデオレターで楽器を作ってもらよう依頼しておいた楽器を、鳴り方で4つのリズムにわけ「ブラジル」を全員で合奏する。先生も一緒に参加してもらう。最後はマリンバ及びピアノの周り好きな場所に学生を呼び、マリンバの魅力をつぶり届けました。



タイトル：超一流の音楽に触れる時間

期 日：平成29年1月20日（金） 11：50～12：40

会 場：王寺南中学校 音楽室

参加者：2年1組 38人

登場方法は同じ。木琴とマリンバの違いを子ども達に考えさせる。打楽器の説明。「手」も楽器であることを伝え、表打ち・裏打ちでリズムを教える。5人で1つの班分けをし4つのリズムの中から1つ選びボディパーカッションを考えさせる。「ブラジル」の曲の途中で好きなリズムに変更。最後はマリンバ及びピアノの周り好きな場所に学生を呼び、マリンバの魅力をつぶり届けました。



タイトル：超一流の音楽に触れる時間

期 日：平成29年1月20日（金） 13：50～14：40

会 場：王寺南中学校 音楽室

参加者：2年2組 37人

登場方法は同じ。木琴とマリimbaの違いを子ども達に考えさせる。打楽器の説明。「手」も楽器であることを伝え、表打ち・裏打ちでリズムを教える。1組の時ボディパーカッションがうまくそろわなかったので、今回は、円になり3人で1班の班分けをし1つのリズムでボディパーカッションを造るように考えさせる。「ブラジル」曲にあわせ2小節づつを1班づつ発表させる。最後はマリimba及びピアノの周り好きな場所に学生を呼び、マリimbaの魅力をたっぷり届けました。

コンサート

タイトル：魅惑の鍵盤 塚越慎子マリimbaコンサート

期 日：平成29年1月21日（土） 14：00開演

会 場：王寺町文化福祉センター 大ホール（定員：668人）

入場者数：181人

1部はマリimbaの魅力を聴かせ、2部に王寺南中学校の学生を舞台に上げ、客席を半分にし学生が考えたボディパーカッションを会場全体で行う。曲目は王寺に来て覚えたという王寺町観光・広報大使「雪丸」の「Love Love 雪丸」。観客と一体となったコンサートでした。コンサート終了後、会場ロビーにて、サイン会を実施した。



① 応募の動機・事業のねらい

当館が開催している自主事業等に30歳代から40歳代の特に女性層（お母さん）のお客様が非常に少ない。

子どもを通じて、音楽はこんなに楽しいもの・クラシックは難しくなく、とても楽しいものをお母さん世代にも分かってもらい、コンサート会場に足を運んでもらう。

② 企画のポイント

ミニコンサートよりも、ワークショップ等の参加型のアクティビティで学校を回り、プロの演奏家による本物の音楽に直にふれ、音楽を身近に感じて興味を持ってもらい、音楽を聴くためにホールに足を運んでもらえるようにする。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

ワークショップを何をどうしていくかに時間がかかりました。また、若いお母さん世代をホールに足を運んでもらうような広報の仕方に苦労しました。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

ワークショップについては、コーディネーター・サブコーディネーター・地域創造さんそして演奏者からアドバイスを受けた。また、チラシを各戸配布以外に、町フェイスブック・当館ホームページ、町内3小学校全校生徒に配布、近隣市町村ホールに設置依頼と中南和で一番大きなホールのHPのフェイスブック・他館からのお知らせページに掲載。

⑤ 事業を実施しての成果

アクティビティでは、小学生は事前に手作り楽器を作ってきてもらうようビデオレターを見ていたのもあり、自然と打ち解けた。また手づくり楽器が本当に個性豊かな楽器が多く想像力豊かであった。中学生に班分けをし、各班でのボディーパーカッションを考えてもらうときも、積極的に行っていた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

当日の集客が一番来てもらいたかった小学生連れのお母さんたちがほとんどいなかった。いつも行う自主事業の客層であった。他館のチラシを見て来て頂いた観客がおられた。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

コンサートに来て頂いた方はとっても満足しておられます。自主事業をしているとき、たまたま友達に誘われて来た。こんなコンサートがあるのを知らなかった。というお客様も時々いた。広報を毎回載せているが、なかなか集客につながらない。今後は、全世代の方が来ていただける様なイベントはもちろんであるが、新しく来てくれる人を広報の工夫をしていく必要がある。「音楽のあるまちづくり」の名のとおり、いつもどこかで音楽が鳴り響く町を目指して行きたい。

奈良県王寺町は、大阪寄りにある人口約23,000人ののどかな町で、かの聖徳太子の愛犬をキャラクターとした「雪丸」が町の愛されシンボルである。町の中では、あちらこちらで雪丸の姿やその足跡（造りもの）を見かけることができる。ホール担当者の八田さん、片岡さんは部下と上司の間柄でありながら、町のブラスバンドでは共に打楽器を演奏する良いコンビだ。お二人の専門ということもあり、アーティストをマリンバの塚越さんに決めたそうだ。

今回のアクティビティは、王寺北小学校の4年生2クラスと、王寺南中学校の2年生2クラスの計4回だった。アクティビティの中で担当者が特に注力したことが、小学校での「自作楽器での共演」だ。事前に、子ども達自身で楽器を用意してもらい、塚越さんと共演することで、音楽を奏でる楽しさを体験してほしいという狙いだ。担当者もアーティストも、自作楽器は自由な発想でつくってもらいたいという思いが強かったが、自由度が高いと難易度も上がるため、「振る」と「叩く」の2種類から選択してもらうことにした。共演曲は、小学校の教科書の鑑賞教材である「ブラジル」に設定。あらかじめ用意したビデオレターの中で塚越さんが実際に演奏し、「この曲をみなさんと共演するので、曲のイメージにあった楽器をつくってね」というメッセージを冬休みに入る前に子ども達に届けた。アクティビティ当日、冬休みの宿題として子ども達が作ってきた楽器は実にユニークだった。ペットボトルの4面すべてが別々の仕様になっているギロのような楽器や、段ボールで作った実物と同じくらい大きいギター（見ただ目に反して音が小さいのが、また良い）、空き缶に風船のゴムを張った楽器など、それぞれに身近にあるものを使い工夫を凝らしたオリジナルの楽器が出揃った。これらの楽器を4つのリズムパターンに分けて合奏を行った。塚越さんは、子ども達ひとりひとりの楽器の音をよく聴き、「ひとつの楽器でも使い方や鳴らし方で色んな音を出すことができるよ」と、実際に子ども達の作った楽器を手にとって実演してみせた。中学校では、楽器づくりの代わりにボディパーカッションの時間を設けた。ラテン音楽から、「ツースリー」や「スリーツー」といったクナーベと呼ばれるリズムパターン等を紹介し、グループに分かれて体全体を使ったリズム演奏を考え、お互いに披露しあい、最後は塚越さんのマリンバに合わせて合奏となった。

王寺町文化福祉センターで開催したコンサートでは、来場者にアクティビティのような楽しさを体験してもらいたいという担当者の希望から、観客が参加するボディパーカッションの時間を設けた。曲は、担当者と塚越さんのアイデアで、冒頭で紹介した王寺町のアイドル「雪丸」のイメージソングを使用した。本来はボディパーカッションのお手本として、アクティビティに参加した王寺南中学校の吹奏楽部の生徒が舞台上がってくれる予定だったが急きょNGとなり、同じ中学校で丁度部活動をしていた野球部の生徒たちがユニフォームもそのままに、校庭から駆けつけてくれた。こういった迅速な対応が可能だったのは、日頃からのホール担当者と学校のお付き合いや、校長先生のお人柄あつてのことだったのではないだろうか。

また、コンサートでは、照明、音響、ステマネをボランティアの方が担ってくださった。このホールでは外注の業者が入らない場合には、舞台スタッフをボランティアが担当しているそうで、主婦の方や高校の先生と生徒さんなどが参加していた。専門の業者と比べると準備に時間を要したり、意図がうまく伝わらない部分もあったかと思うが、町の人が一生懸命に作業をして、演奏会がうまくいくように一緒に創り上げていく形は王寺町ならではのスタイルであり、協力的な町の人々がこれからのホールの発展にきっと力になってくれるだろうと感じた。

アーティストの塚越さんは、対象に合わせて話し方をうまくコントロールして、小学生からお年寄りまで、短い時間で心を捉えていた。また、アクティビティからコンサートまで一貫して高い集中力を保って、マリンバの魅力を伝えている姿が印象的だった。

今回の王寺町おんかつを通して、町の人が皆明るく、温かい印象を受けた。ホール担当のお二人の朗らかさもあってか、学校の先生方や生徒さん、コンサートをお手伝いしてくれた方々みなさんが、とても好意的に受け入れてくださっており、次の機会を楽しみにされていた。これからも様々な形でアウトリーチ活動が継続していくことを願っている。

実施団体：上富田町

実施時期：平成29年2月17日（金）～平成29年2月19日（日）

出演アーティスト：坂口 昌優（ヴァイオリン） 加藤 文枝（チェロ）

アクティビティ

タイトル：妊婦さんご家族

期 日：平成29年2月17日（金） 10：30～11：15

会 場：上富田町保健センター 2Fホール

参加者：乳幼児6名、妊婦さん9名

妊婦さんご家族対象に、クラシック音楽をお腹の赤ちゃん、家族のことを想いながら鑑賞していただいた。また体内をイメージした照明でリラックスして鑑賞できる環境と、子供が自由に動けるスペースも用意した。

タイトル：町職員対象インリーチ

期 日：平成29年2月17日（金） 17：40～18：20

会 場：上富田文化会館 小ホール

参加者：町職員33名

町職員対象に、文化会館自主事業の軸に展開しているアウトリーチを体験していただいた。プログラムは普段、アーティストが小学校で実施している内容にちかいメニューで実施した。

曲を聴いてイメージを答えるコーナーでも積極的に参加していただき、アウトリーチについての理解が深まったと感じた。

タイトル：年長児ご家族

期 日：平成29年2月18日（土） 10：30～11：15

会 場：岩田幼稚園 ホール

参加者：年長児53名 ご家族50名

年長児ご家族対象に、親子で楽しめるプログラムで実施した。会場は子供の隣に、親が座布団で座れるようにセッティングし、子供と一緒に、お互いコミュニケーションが取れる距離で実施。指揮者体験コーナーも設け、好評だった。

タイトル：患者さんご家族

期 日：平成29年2月18日（土） 15：00～15：45

会 場：紀南病院 エントランス

参加者：137名

入院、通院患者さんご家族対象に病院が普段から実施している「ハートフルコンサート」の時間をお借りして実施。

一般の方もご来場いただき大勢のひとに鑑賞いただくことができた。病院の担当者にも趣旨を理解していただき段取り等がスムーズにいった。



コンサート

タイトル：坂口昌優・加藤文枝デュオコンサート

期 日：平成29年2月19日（日） 00：00開演

会 場：上富田文化会館 文化ホール（定員：800人）

入場者数：76人

～ヴァイオリンとチェロの音色に乗って～と題して、見て、聞いてイメージするコンサートをコンセプトに実施。

いろいろなとこに旅をした感じをもってもらえるように、映像ではなく空をイメージした照明をつくることにより実施。また、演奏中にプログラムを見ることのないように、曲のタイトルを反響版に投影した。



① 応募の動機・事業のねらい

文化会館の自主事業でアウトリーチを実施するようになって7年目になるが、ホール公演の集客が上がらない状況にある。広報が原因という指摘を受け、チラシの枚数を3倍にしてこまめに周知活動をし、地元新聞の広告掲載を5倍に増やしても、やはり結果は同じだった。そのことから、根本的な町の文化力の底上げが必要であることがわかった為。

② 企画のポイント

自主事業で年間20本程度のアウトリーチを実施しています。町内で行ったことのある施設、学校、企業等が増えてきて、場所の選定に毎回苦慮していますが、今回、念願の職員対象インリーチと病院のアウトリーチを実施できた。インリーチは強制的な参加を促すよりも、職員組合の研修の一環で集める方がよいと判断し、自主的な参加を促した。また、病院は当初、小児病棟での実施を企画していたが、病院側の要望でエントランスでの実施になった。

ホール公演の集客のことも考慮し、対象者にご家族をプラスして各アクティビティを実施。

それぞれのアクティビティごとにテーマを決め、

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

・ピアノの運搬と設置

当初、インリーチを議場で実施する計画でしたが、庁舎にエレベーターが無く搬入が困難と業者に判断され、文化会館の小ホールに変更した。今回、ピアノの無い2箇所の施設へのアップライトの搬入のための費用が無く、町の所有のユニックで吊り上げて各施設に職員が運ぶことになった。

・ホールコンサート

当初、映像を使つてのコンサートを企画していたが、アーティストとコーディネーター、担当職員とのコミュニケーション不足により実現はできなかった。全員が集まったの企画会議や打ち合わせがないと、実施期間中だけの打ち合わせだけでは、準備が間に合わない。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

業者に頼まず職員でのピアノの運搬は思ったよりスムーズにいき、ノウハウも勉強できたので、今後ピアノの無い施設での搬入、設置についても問題無く実施できると確信した。

コンサートについては、イメージを強要するような映像はやめ、空をイメージした照明をつくることで対応した。

⑤ 事業を実施しての成果

アウトリーチは普段から実施しているが、インリーチが初の実施だったので心配だったが、後日、参加した職員さん数名からアウトリーチがどんな事業か理解できてよかったと声をかけてもらえた。

あと、こちらとアーティストとコーディネーターの3者のコミュニケーションがいかに重要かを改めて感じた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

今回、ホールコンサートの集客を見込めるアウトリーチ先ではなかったため、早めに、チラシを商店等におかせてもらったり、新聞、ラジオ等のメディアでの告知を徹底して実施したが、100名にも満た

ない集客だった。これまでの事業は広報に原因があると感じていたが、改めて要因を見直す必要があると感じた。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

普段、劇場にあしを運ぶことができない人のためのアウトリーチのはずだが、劇場にあしを運ばない人対象にもアウトリーチという「文化の種」をまく必要があると感じた。

【全体の方針】 未開拓の対象へのアウトリーチ

アクティビティ1) 妊婦と乳幼児向けのプログラム

〈人数〉20名 〈会場〉保健センター

今回のアクティビティの共通目的の1つが主対象プラスワン。保健センターでの対象は妊婦と幼児向けのプログラムを実施。リラックスに最適な音楽や、元気なお子様生まれてくることを願った曲など、聴衆に解りやすく丁寧に曲の説明を行い、終始落ち着いた空気に会場が包まれていた。また、主催である上富田町の強い要望もあり、会場全体に母胎をイメージした照明を施し、ご来場頂いたお客様にとってとても印象の深いコンサートとなった。

アクティビティ2) 上富田町役場職員向けインリーチ

〈人数〉30名 〈会場〉上富田文化会館小ホール

町職員にもっとアウトリーチの素晴らしさを知ってほしいという目的で職員研修の一貫として実施。アウトリーチの基本スタイルを提示しつつも、インタラクティブな要素を数多く入れたプログラムで参加者の積極的な参加を促した。色彩（赤黒）、時刻（昼夜）、絵画（明暗）による2択クイズから始まり、登場人物の会話をイメージして聴く、最後はメンデルスゾーンピアノトリオ第1番4楽章を個々の参加者が自由に想像しながら聴くというストーリーを展開した。

アクティビティ3) 年長児童とご家族向けのプログラム

〈人数〉100名 〈会場〉岩田幼稚園

当初の予定では園児25名、親25名の50名だったが、その倍の100名を越す参加者となった。座布団（親子）が隣り合うように座席を配置し、親子の一体感を感じられる工夫を行った。イメージや感想を求めるには難易度の高い対象ではあったが、最後まで諦めずに投げかけ続け、少しずつ観客との距離が縮まっていく場面は感動的だった。子どもたちがよく知っている「カレンダーマーチ」では合唱指揮体験を実施し観客との一体感が生まれた。

アクティビティ4) 患者さんとそのご家族向けのプログラム（近隣住民の方も可）

〈人数〉127名 〈会場〉紀南病院

広域基幹病院の広大なロビーを会場に、入院患者、通院患者、近隣住民に向けたサロンコンサートを実施。対象者の中には、点滴患者、車椅子の方も数多くみえ、そういった方々の心の癒やしになるようなプログラムを中心にお届けした。2F席からも鑑賞できるようになっており、演奏の音を聴きつけて病室から出てくる方も。華やかな演奏とともに演奏者の3人もドレスアップ。また、逆光対策として、ホールから照明機材を持ち込むなどコンサートの空間演出にもこだわった。

本公演) ヴァイオリンとチェロが奏でる音色に乗って～坂口昌優×加藤文枝デュオコンサート～

〈入場者数〉76名 〈全席自由〉一般1,500円/高校生以下1,000円 〈会場〉上富田文化会館 文化ホール

和歌山県上富田町の澄み切った空をイメージし、反響板（天板）に写し出す演出を1部で行った。2部では本格的なクラシックコンサートの雰囲気重視するなど、お客様が飽きない工夫を施した。また、プログラムの曲目、楽章も舞台に投影するなど、初めての方を置いていかないよう配慮した。入場者数的には76名とキャパ数から見ると少ない印象。しかし、3人の醸し出す美しい音色とアンサンブルに会

場は終始優しい雰囲気に含まれていた。

〈プログラム〉

【第一部】 M1) 愛のあいさつ／エルガー M2) 白鳥／サン＝サーンス M3) M4) ヴァイオリンとチェロのための8つの作品より「プレリュード」「ガボット」／グリエール M5) ピアノトリオ第2番より 第2楽章／ショスタコーヴィッチ M6) ジプシートリオ 全楽章／ハイドン 【第2部】 ピアノトリオ第1番 全楽章／メンデルスゾーン

実施団体：島根県 安来市

実施時期：平成28年10月6日（木）～平成28年10月8日（土）

出演アーティスト：ヴィタリ・ユシュマノフ(バリトン) 山田 剛史(ピアノ)

アクティビティ

タイトル：ヴィタリ・ユシュマノフ ふれあいコンサート

期 日：平成28年10月6日（木） 9：45～10：30

会 場：赤屋小学校 音楽室

参加者：全校生徒 32人

ふるさと（日本）で始まり、ふるさと（ロシア）、献呈（ドイツ）と日本・世界の歌で構成。世界地図で、母国ロシアのこと、留学先のドイツのことなどを紹介。声楽の発声法を学ぶための体操（オペラ体操）、お椀を用いて普段の声の出し方・声楽の出し方をビジュアルで分かる形で説明。市歌の共演など盛りだくさんの内容であった。唯一、全校生徒32人の小規模校。アットホームな雰囲気の中、低学年の子ども達もしっかり聴いている姿がとても印象的だった。

タイトル：ヴィタリ・ユシュマノフ ふれあいコンサート

期 日：平成28年10月6日（木） 14：05～14：50

会 場：十神小学校 音楽室

参加者：6年生 51人

赤屋小学校でのプログラムを基本としつつも、若干の改良を加えた構成。第一部の日本・世界の歌の最後に、きちんと日本の歌（小さな空）を歌うことで、外国と日本の言葉の歌の違いにメリハリがはっきりとついた形となった。演奏後、児童による合唱（ふるさと）でアーティストへの感謝の意が表され、アクティビティを終了した。また、地域住民への広報として地元ケーブルテレビの取材をここに入れ、本コンサートへの集客につなげた。

タイトル：ヴィタリ・ユシュマノフ ふれあいコンサート

期 日：平成28年10月7日（金） 10：50～11：35

会 場：広瀬小学校 音楽室

参加者：6年生 42人

基本的には、前日と同様のプログラム内容で実施。先日のフィードバックが活きて、より洗練された内容となった。広瀬小学校の児童は、本コンサートでの共演もあるため、最後の質問コーナーで積極的に質問していた。アーティストのことをもっと身近に感じたいという思いがとても伝わってきた。また、給食を児童たちと一緒に食べることで、児童たちとの距離がより縮り、本コンサートの共演がスムーズにいく形となった。



タイトル：ヴィタリ・ユシュマノフ ふれあいコンサート

期 日：平成28年10月7日（金） 14：15～15：00

会 場：社日小学校 音楽室

参加者：6年生 46人

午前と同様のプログラム内容で実施。回数を重ねるごとに、アクティビティの精度が上がっていくのをまじかで感じられた。準備段階から打合せを行っていない先生だったため、当日、5年生も併せて参加したいとの申し出があった。“3つの小”のお話をさせていただき、予定通り6年生のみで実施。終了後は、その先生もおんかつの趣旨に納得いただける結果となった。改めて、一方方向ではなく、双方の醍醐味を理解していただける結果となった。

コンサート

タイトル：ヴィタリ・ユシュマノフコンサート 世界のうた
日本のうた

期 日：平成28年10月8日（土） 14：00開演

会 場：広瀬中央交流センター 大ホール（定員：約400人）

入場者数：261人

有名オペラ作品アリアやなじみのある世界の歌や日本の歌をメインに2部構成の本格的なクラシックのコンサート。プログラムの最後は、市内の映像をプロジェクターで投影しながら地元児童と市歌の共演で終了。アンコールが2曲もあり、アーティストにも満足してもらえるものとなった。ロビーにはアクティビティの様子をプリントアウトしたものを掲示したり、初日の地元ケーブルテレビの取材映像（アクティビティの様子、アーティストのどじょう掬いの体験映像等もあり）も流した。



① 応募の動機・事業のねらい

平成29年9月に開館する新たな文化ホールでは、事業方針の中で「普及・支援事業」として①「文化芸術への関心を広げる」②「文化芸術を通じて人を育てる」などを位置づけ建設している。事業展開においては、次世代を担う子どもたちの感受性豊かな心の醸成などを育むため、学校等でのアウトリーチのほか、身近で親しみのあるコンサート（ロビーコンサート・ワンコインコンサート）を計画しており、このおんかつの事業内容は当施設が目指していく内容と一にするものであり、今後事業を展開するうえで、携わるスタッフ（開館時から指定管理者の運営）の企画能力向上が図れると思ひ応募に至った。

② 企画のポイント

事業全体の目的は、子ども・鑑賞者・職員の「育成」をテーマとし、企画のポイントとして、次世代を担う子どもたちの鑑賞力の向上をめざすため「小学校」を対象として行った。

アクティビティは、「文化芸術の聴き方を探る」をテーマに行う。目・耳・口・頭・体の様々な角度からアプローチを行い、自分独自の聴き方を模索する機会とした。内容としては、①声楽の仕組みを知る（声楽の歌い方を学び、普段の歌い方の違いを感じるなど声楽に興味を持ってもらう）、②体験（実際に学んだ歌い方で歌うことで声楽を体全体に感じてもらう）、③イメージする（同じフレーズを悲しい感じ、うれしい感じなど様々な感情で歌う場合どんな歌い方（強弱、高低など）になるか実際にイメージする。また、各国のふるさとを聞きどんな風景、お国柄をイメージするか考える）

コンサートは、「分かりやすいクラシックコンサート」をテーマに有名オペラ作品アリアやなじみのある世界の歌や日本の歌をメインに行ってもらった。ただし、アーティストの意向も尊重し、魅力が最大限発揮できるよう心掛けた。

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

- ・アクティビティとコンサートがそれぞれ別物となっていたため、どのように関連性を持った形にするか苦慮した。
- ・アーティストの縁のある地域でなく、また、市民にとって馴染みのないクラシック（声楽）コンサートでありチケット販売に苦慮した。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

- ・コンサート会場に一番近い小学校（アクティビティ先の一つ）に協力いただき、安来市の市歌を本コンサートで共演、また、ロビーにおいてアクティビティ先のパネルなどを展示することでアクティビティとコンサートが一本の線につながった。
- ・チケット販売はクリアしたとは言えないが、新聞折込、地元ラジオに担当が2回生出演（アーティストのCDを一曲流してもらう）したり、アーティストにアクティビティの合間を利用してご当地の地元ケーブルテレビで出演してもらった広報等々を行った。また、チケット料金を当日ワンコインに設定することで、気軽に来場いただける環境とした。

⑤ 事業を実施しての成果

一定の成果として、あまり馴染みの無いクラシック（声楽）コンサートにたくさんの観客に来ていただけたこと、また、アーティストの人柄・演奏の素晴らしさにより、新しい文化ホールでも今回のようなコンサートを聴きたいという回答を沢山いただけたこと。また、担当としてアクティビティを含めて

コンサートを作り上げる経験をさせていただいたことも、この事業を通じてのもう一つの成果であった。また、アクティビティの合間に、市内観光地（足立美術館・安来節演芸館）に行かれたお話をされ、会場から拍手が起こった。アーティストと縁がない土地だったので、観光地を案内するのは有効であった。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

当初企画書段階では、地元合唱団をアクティビティ先に想定していたが、合唱団の方いわく、楽器が違うのと同じくらい違いがあるので丁重にお断りされた。「声楽＝合唱」と安直に考えてしまっていた。しかし、この合唱団にはコンサートのチケット販売にご協力いただけたことは、今後のホールにとっては大きな財産となったと思う。今回のアクティビティ実施校は事業に協力的であったが、今後合唱団グループのようなことも想定されるため、十分に事例研究を行う必要があると感じた。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

本市の建設中の総合文化ホールのプレイベントとして実施した。今回、優れた公演等をされたアーティストが私たちに残していった文化の種を、ホールを運営する職員がしっかりと育て実を結ぶよう努力していきたい。また、新しいホールが建設されるが「あって良かった」といっていただけるよう、今回のアクティビティを継続していく必要があると感じた。

おんかつ史上初の外国人登録アーティストであるヴィタリ・ユシュマノフさんの最初のソロでの実施となった、島根県安来市おんかつ。緑深い山々の合間に川が流れ、瓦屋根の日本家屋が並ぶ、いかにも日本らしい風景が残る地域で、ロシア人声楽家によるおんかつが行われた。

島根県安来市は、松江市と米子市の間に位置する、人口約4万人の自然豊かな市である。どじょうすくいでも有名な安来節は、現在でも小学校で教えられており、人々の生活に密着した伝統芸能として根付いている。

今回のおんかつは、最近の公共ホールが抱える問題に、大いに悩み、つまづきながらも、チーム一丸となって真摯に取り組んだおんかつだったと思う。そこで、指定管理者、地域との関係づくり、チームワークという3つのキーワードから、安来市チームがどのように悩み、解決していったかを報告したい。

平成29年9月に新しく開館する、安来市総合文化ホール「アルテピア」の開館前のプレ事業として位置づけられた今回のおんかつは、文化ホール準備室が中心となって行われた。文化ホール準備室は安来市役所の職員で構成されているが、9月のホール開館後には、民間の指定管理者がホール運営を行うことになっているため、今回は、指定管理者の皆さんにも協力を依頼し、進めることになった。地域の事情や人々の様子を知り尽くしている文化ホール準備室は、アクティビティ先の学校との調整や広報活動、そして指定管理者はコンサート本番の進行と、得意分野を生かした役割分担をすることで、アクティビティもコンサートもスムーズに実施することができた。市役所職員と指定管理者と一緒に事業を行うことで、それぞれの長所・短所が分かり、開館後の運営の課題が見えたのではないかなと思う。ホール開館前にこのような機会をもつことはとても有意義なことなのではないかと感じた。

おんかつ担当の石倉さんは、最初の企画の段階で、市民と新しいホールとの関係を築く為に、地元合唱団へのアクティビティを検討していた。しかし、複数ある合唱団のうち、実施する団体と実施しない団体とが出てしまうと、今後ホールと合唱団が、良い関係性を築けなくなってしまう可能性があると考え、合唱団ではなく、小学校でアクティビティを行うことにした。小学校でのアクティビティは、先生も子どもたちも、ヴィタリさんの来校をとても楽しみにしており、間近で聴くバリトン歌手の歌声に、目を輝かせて聴き入っていた。アクティビティ先の一つである赤屋小学校の校長先生が、とても協力的で、コンサートにも足を運んでくださった。お話を聞くと、市内の小学校の先生の音楽部会の部長をされているとのことだった。新しいホールと合唱団との関係づくりは難しかったが、学校との関係づくりのきっかけになったのではないかなと思う。今回のおんかつのキーパーソンがこの校長先生だったと思った。

そして、担当の石倉さんを中心とした、文化ホール準備室の皆さんの絶妙なチームワークが、今回のおんかつと新しいホールにとって大きなポイントだったと思う。お互いの個性を尊重し合いつつ、必要な時には誰かがさりげなくサポートし合う安来市チームの皆さんは、ヴィタリさんとピアニストの山田さんにとって、とても有り難い存在だったと思う。コンサートのアンケートに、新しいホールを待ち望む声が多く書かれていたことは、文化ホール準備室チームのこれまでの努力の結果だと感じた。

安来市おんかつは、新設のホールのプレ事業ならではの様々な課題を抱えていたが、一つ一つ丁寧に解決していくことで、新しいホールにつながる事業にできたと思う。今後も新しいホールでアウトリーチ事業を継続し、アウトリーチ事業を通して、ホールが安来市民の文化拠点として発展することを期待したい。

実施団体：小松島市

実施時期：平成28年12月21日（水）～平成28年12月23日（金・祝）

出演アーティスト：福川 伸陽（ホルン） 三浦 友理枝（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：ぐるぐるぐる ホルンの魅力 I

期 日：平成28年12月21日（水） 12：50～13：40

会 場：徳島県立みなと高等学園 音楽室

参加者：1年生 16人 教員 5名

発達障がいのある学生が通う、みなと高等学園の1年生を対象にミニコンサートを行いました。ホルンについての解説も交えながらの演奏に、学生たちは前のめりで鑑賞していました。また、最後に全員で合唱した「花は咲く」は練習の成果もあり、大変印象に残る演奏となりました。

タイトル：ぐるぐるぐる ホルンの魅力 II

期 日：平成28年12月21日（水） 13：50～14：40

会 場：徳島県立みなと高等学園 音楽室

参加者：1年生 16人 教員 3名

発達障がいのある学生が通う、みなと高等学園の1年生を対象（Iとは別のクラス）にミニコンサートを行いました。吹奏楽部の学生もいたため、ホルンについての解説は興味深く聞いていました。また、最後に教員も含めた全員で合唱した「花は咲く」は素晴らしい演奏となりました。

タイトル：音楽のおくりもの I

期 日：平成28年12月22日（木） 11：00～11：30

会 場：小松島市ミリカホール リハーサル室

参加者：子育て中の保護者16人とその子ども6人

子ども連れではなかなかコンサートへ参加できない保護者の方に、生の音楽を聴いていただきたいという思いから、子どもと一緒に参加できるミニ演奏会を開きました。子どもの参加が少なかったこともあり、静かに鑑賞することができ、癒しのクリスマスプレゼントになったと感じています。

タイトル：音楽のおくりもの II

期 日：平成28年12月22日（木） 15：00～15：30

会 場：小松島市ミリカホール リハーサル室

参加者：子育て中の保護者18人とその子ども18人

子ども連れではなかなかコンサートへ参加できない保護者の方に、生の音楽を聴いていただきたいという思いから、子どもと一緒に参加できるミニ演奏会を開きました。当日は3歳児健診日でもあり、健診が終わった方にも参加できるように時間設定をしました。そのため、子どもの参加も多く少しザワザワしましたが、時折、静かに鑑賞することもあり、癒しのクリスマスプレゼントになったと感じています。



コンサート

タイトル：福川伸陽ホルンコンサート

期 日：平成28年12月23日（金・祝） 13：30開演

会 場：小松島市ミリカホール ホール（定員：308人）

入場者数：180人

超絶技巧を持つ福川伸陽さんのホルンに加え、三浦友理枝さんの素晴らしいピアノ伴奏による演奏会で、すべての観客が音色に魅了されました。特にホルンソロの『恒星の呼び声』は、ピアノ反響板を利用し、最後列の席まで残響が響いてとても印象的でした。



① 応募の動機・事業のねらい

小松島市は、自主事業にかかる予算が少なく、『魅力的なアーティストが呼べない→観客動員が見込めない（入場料収入が少ない）→予算を削られる』という負のスパイラルに陥る可能性があり、低予算で魅力的な自主事業を行うため、おんかつ事業に申請しました。

② 企画のポイント

ミリカホールの利用者や観客は過去のアンケートから検証すると高齢化しています。芸術文化愛好家となりうる若者を育てたいという願望から、観客動員の即戦力とはなりません、長い将来を見据えてアウトリーチの対象者をしぼりました。

③ 企画実現にあたり苦勞（問題となった）した点

みなと高等学園については、音楽の先生との交渉となり、苦勞は全くありませんでしたが、保健センターへの働きかけは、健診にきている保護者の方へお声かけするため、保健事業があるごとにチラシ配りやお声かけを実施しました。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

他の業務のために保健事業へ出向けない時は、担当の保健師へチラシ配りをお願いしました。

⑤ 事業を実施しての成果

子どもの保護者へのお声かけ時に、その方の興味のあるなしがハッキリわかったり、「今度はこんな人を呼んで」など、お話することでいろんな意見を吸い上げることができました。また、アーティストへの配慮もたいへん勉強になりました。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

今回はピアノ伴奏者のための譜めくりの必要性が毛頭になく、直前にマネジメントから依頼され慌てました。今後、ピアニストを呼んでのコンサートを実施する際には、調律と譜めくりをセットに考えるよう進めていこうと思います。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

過去の記録から、小松島市民は文化・芸術に興味は薄いと感じていましたが、広報活動するうえで、いろんな方と意見をかわすことで、興味がないわけではないことがわかってきました。興味がないのではなく、きっかけがないということだったのです。「誘ってくれたので行こうかな」という声を聞くことができ、今後の広報の仕方も考えなおすきっかけとなりました。

徳島県の東中央に位置し、徳島駅からは車で30分ほどの小松島市は、人口4万人規模の海沿いの街である。おんかつの舞台となったのは、保健センターと併設され、小松島市健康福祉部健康推進課が管理運営する小松島市ミリカホール（320席）。ホール職員のほとんどが保健師さんで構成される全国でも珍しいホールであろう。事業担当の成川さんが、小松島市のお客様にと企画を練り、アーティストはホルン奏者の福川伸陽さんとピアニストの三浦友理恵さんに決まった。

〈アウトリーチ〉

アウトリーチ先は、就業支援に力を入れるみなと高等学園の1年生2クラスで2回。そして、保健センターでは、通年を通して乳児相談や健診を行っており、健診に訪れる子育て世代に癒しを提供したいとの思いから、未就学児の親御さんを対象に2回（ホール内リハーサル室で実施）の計4回が決まった。

検診に訪れる親御さん向けのアウトリーチは、参加者の人数を事前に把握するために、事前申し込み制とした。併設される保健センターでは、月に2回の乳児健診（1歳未満なら誰でも参加可能）、毎月それぞれ月齢に合わせた健診（3～4か月、9～10か月、1歳半、3歳児健診など）、ぽんぽこクラブという未就学児の遊びスペースを月に2回開催しており、未就学児とその親御さんたちが定期的に通うイベントがあるため、その場で告知を行うことができた。

会場はホール内2階のリハーサル室。小さな子どもたち連れでもゆったりと過ごせるように、前の半分はゴザ敷きのスペースをつくり、後方には椅子を並べ、どちらでも選べるように配慮した。演奏が始まってからは、じっとしてられずぐずってしまう子どもたちをホール職員が一時的にリハーサル室から連れ出し、ホワイエで子どもたちと遊んだり、あやしたりする様子が見られた。普段から検診等で親御さん方とよくコミュニケーションをとり、子どもたち一人一人に目をかけて接し、信頼関係を築いているからこそ、安心してお任せできる雰囲気が伝わってきた。保健師さんがいらっしゃるホールならではの対応によって、アウトリーチの対象となった親御さん方もすこしの時間子育てから離れ、福川さんのあたたかなホルンの響きと三浦さんのピアノの音色に包まれるリラックスした時間がプレゼントされた。

〈コンサート〉

舞台の構造と、ホルンの楽器の特性（演奏時、音の出るベルが後ろを向く）から、音響面では時間をかけてサウンドチェックを行った。横に広く、舞台側面の音響反射板がなかったため、舞台上に移動式音響反射板を設置することや、ステージの高さも上下に可動することを利用し、天井に音が響く空間をつくれぬか試行錯誤を繰り返した。結果、移動式反射板は使用せず、ステージの高さを普段の高さの半分にすることで天井の空間を広くし、ホルンとピアノに最適な音響を作り出すことができた。

コンサート当日は、早くからホールに足を運んでいらっしゃるお客様の様子が見られた。アウトリーチ先ではなかったものの小・中学生の姿も見られ、また、近隣の市町村の音楽ファンも集まった。プログラムは、耳に馴染みのある優しい曲から、メシアン《峡谷から星たちへ》より「恒星の叫び声」などの現代音楽をおりませ、緩急のきいたホルンの魅力満載のプログラム。最後は、ピアノも活躍する超絶技巧のラプソディー・イン・ブルーで締めくくり、大喝采のなか終幕となった。

〈最後に〉

初日に行った移動式反響板を使った音響チェック、舞台上の準備やアウトリーチ会場のセッティング、アーティストのケア、プログラムや看板の準備など、すべてにおいてホールスタッフ皆様の力を合わせ

て乗り越えたおんかつであったと思う。小さなことにも全員で乗り切る協力体制が、アーティストの安心感につながり、お客様への最高のパフォーマンスにつながることを実感した。今後、改修工事を予定しているとも伺ったが、おんかつを足がかりにホールが強みを生かした事業が続いていくことを期待したい。

実施団体：九重町教育委員会

実施時期：平成28年9月30日（金）～平成28年10月2日（日）

出演アーティスト：加藤 文枝(チェロ) ヴィタリ・ユシュマノフ(バリトン)

アクティビティ

タイトル：音楽を五感で聞いてみよう

期 日：平成28年9月30日（金） 9：50～10：40

会 場：南山田小学校音楽室

参加者：小学1～3年生 45人

音楽を聴くときにどんな色や温度のイメージを持つことができるか、また絵画から受ける印象と音楽とをリンクさせるなど、新しいアプローチをアーティストが行ってくれた。これにより子ども達がどのように音楽を捉えられるかを知ることができたようで、聴くことに集中できている姿が印象的だった。



タイトル：音楽を五感で聞いてみよう

期 日：平成28年9月30日（金） 10：50～11：40

会 場：南山田小学校音楽室

参加者：小学4～6年生 43人

基本的なアプローチは低学年の時と同様であったが、高学年の子ども達の感想が深い感性を感じられたということで、アーティストが急遽選曲を変えてくれた。それに対して子ども達も豊富なボキャブラリーで受けた印象を表現してくれていた。



タイトル：音楽を五感で聞いてみよう

期 日：平成28年10月1日（土） 11：00～12：00

会 場：九重文化センターホール

参加者：地元コーラスグループ 25人

加藤さんの絵画ワークショップに加え、ヴィタリさんの発声ワークショップが追加された。普段行っているコーラスとは違うイメージの持ち方ができたようで、一瞬で声の音が変わるのは非常に興味深かった。



タイトル：音楽を五感で聞いてみよう

期 日：平成28年10月1日（土） 17：00～18：00

会 場：飯田公民館集会室

参加者：地元若者グループ 20人

地元の若者グループが家族連れで参加をしてくれていた。地域の公民館という身近な場所で普段活動を一緒にする仲間、家族と共にスペシャルな経験をしてもらうことができたと思う。こういった経験を共有する場をつくるのがこれからの地域づくりに必要になると感じた。



コンサート

タイトル：加藤 文枝、ヴィタリ・ユシュマノフ クラシックコンサート

期 日：平成28年10月2日（日） 14：00 開演

会 場：九重文化センターホール（定員：407人）

入場者数：184人

チェロと声楽という異色の取り合わせで、プログラムの中にはピアノソロ、地元コーラスとの共演なども盛り込んだ多彩なコンサートとなった。



① 応募の動機・事業のねらい

世界で活躍できるスキルを持つ若手音楽家が九重町を訪れ、じっくりと地域の人たちに向き合う。地域で活躍する若手グループに音楽芸術を間近で感じてもらい、本物の音楽を体験、楽しんでもらうことを通して、地域づくりの中で芸術が果たす役割について考えてもらう契機にする。

併せて、これから九重町の未来を担う子ども達とその親世代に素敵な思い出を作ってもらおう。

② 企画のポイント

アクティビティ先の候補として下記のような地域活動に積極的な団体をピックアップしたこと。

- ① タナー（飯田）
- ② 野上祇園（野上）
- ③ 読み聞かせグループ（九重町図書館）
- ④ ここのえ子育て交流センター（児童館）

③ 企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

社会人グループや祭りのための団体など、調整が困難であった。

④ 上記③をどのようにクリアしたか

①のタナーという地域の若者グループに対してアプローチを行い、アクティビティ後の交流会などアーティストと地域の方々が触れ合う機会の創出を促した。

⑤ 事業を実施しての成果

町の単独事業として行っているアウトリーチ事業ともあいまって、さまざまな場所で音楽に親しむ機会を設定できた。

⑥ 事業を実施しての反省点・課題

依然としてホールへの集客に課題が残る。

⑦ 今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

まちづくりや地域の活性化を考えたときに芸術文化の果たす役割の大きさを感じた。具体的には地域性を表現していかなければ、まちづくりや人づくりができないが、そのための方法を手に入れることや考えるきっかけとして本事業の価値は高いと思う。また、ホールという表現の場を町に住む人が持っているということは幸せなことだと改めて感じた。

大分県九重町は、大分県の南西部に位置しており、東は由布市、竹田市に、北西は玖珠町に、南西は熊本県阿蘇郡に接している。町の中央部を筑後川上流玖珠川が東西に走り、九州の屋根というべき名峰連なる九重山群に囲まれている。さらに、地熱資源をはじめ豊富な資源を有し、変化に富んだ自然景観にも恵まれた土地である。

今回、九重町でのおんかつは各地域と繋がるおんかつとなった。担当者の後藤さんは各地域の連携ができていないことを危惧しており、その突破口としてこの事業に取り組んだ。

アクティビティに伺った南山田小学校は全校生徒が87名と比較的小さな学校だ。今回のアクティビティは、1年生から3年生までの低学年と4年生から6年生までの高学年へのアクティビティとなった。アクティビティの構成は声楽のヴィタリ・ユシュマノフさん、チェロの加藤文江さんが共演する場面と、それぞれが演奏する場面に分けての実施。ヴィタリさんは自分がどこの国出身かを歌を自国の歌を歌いクイズ形式に、フランスやインドなどの回答もあった。また、オペラの解説で、オペラにはストーリーがあり、愛や友情、家族、歴史などの様々ストーリーを演じていると話した。加藤さんは、曲が与えるイメージを題材に、赤と黒、昼と夜などどちらを連想するか子供達の感想を聞きながらすすめて、子供達も少し照れながらも自分がその選択をした理由を答えていた。その回答が本当に様々でその想像力に驚かされた。また、低学年では曲を聞いて絵を描くという試みもあり、子供達は十分に楽しんで想像力を働かせるアクティビティとなった。

コールやまなみは九重町のコーラスグループとして活動するご婦人たちの会で、バリエーションに富んだ楽曲にチャレンジしている。今回のアクティビティではホールの舞台上に招いての実施であった。今回は主に聞き手に回っていただいたが、ヴィタリさんの歌声、加藤さんのチェロに感動しきりであった。

アクティビティに伺った団体、「タナー」とは町を愛し自分たちで何かできないかと行動に起こす人たちのことで、大人から子供まで活動している。普段は様々な活動を通して交流を行い、地域でのコミュニティ形成に努めている団体である。タナーの人たちはアーティストを暖かく迎えてくれた。アーティストの表現も真摯に受け止めてくれたし、自分たちの考えも素直に表現してくれた。特に印象的だったのは小さな子供たちが集中して聴いていて、質問や感想を積極的に話してくれたのがとても印象的であった。演奏のあとはタナーの人たちが用意してくださったお茶とお菓子を食べながらタナーの方々とアーティストがそれぞれの活動の話をするなど、充実したアクティビティとなった。

そんなアクティビティを経て迎えたホールでのコンサートは、多くの地域の方々が足を運んでくださった。会場を包み込むようなヴィタリさんの歌声は会場を魅了し「落葉松」は会場が息を飲むような場面もあった。また、加藤さんのチェロは「白鳥」、「シチリアーノ」など数曲を演奏し、トークとともにその優しい音色は会場の人たちを和ませ、感動させた。また、コンサート終盤ではコールやまなみの方々と武満徹の「小さな空」で共演し、観客から暖かく大きな拍手をもらった。コールやまなみの方々がヴィタリさん、加藤さんと共演できたことはとてもよい経験になったのではないだろうか。

今回のおんかつは担当者である後藤さんの熱意が伝わるおんかつであった。アクティビティの方々、コンサートに来場された方々にとっても、また、アーティストにとっても、後藤さんの気配りや思いが形になった結果だと思ふ。後ろで支えるホールスタッフの方々による適切なサポートもあり、コンサートには多くの方々が来場してくださったし、アクティビティではそれぞれの場所で喜んでもらった。これからもこの熱いスタッフたちがいるホールが各地域をつなぐ施設になるように、ホールから積極的に地域に影響を与え、発信し続けてほしい。

第3部
平成28年度公共ホール
音楽活性化事業
コーディネーターレポート

アウトリーチを活用するチカラ

例えば、アウトリーチを上手に活用して事業運営を成功させている「A」と「B」の二つのホールがあるとしたら。

Aのホールは、ホールと地域の繋がりを重視した地域づくり型ホールで、Bのホールは、鑑賞・創造型公演を重視した芸術劇場型ホール。それぞれ、活動の結果、Aのホールは地域の人達が集い多くの人に親しまれていて、Bのホールは「クラシック音楽の観客が増加し、事業経営も安定している。とします。

このような成功のお話も、一昔前まで「夢」であり「理想論」と言われていましたが、今では、すぐそこにある「事例」であり「実現可能な成果」になりました。

では、なぜ、全国にはアウトリーチ活動に積極的に取り組むホールが沢山あるにも関わらず、成功しているホールとそうでないホールに分かれてしまうのでしょうか？

アウトリーチ自体に色はない

成功しているA・Bとそうでないホールのアウトリーチには何か違いがあるのでしょうか？加えて、AとB。この個性が全く違う二つのホールのアウトリーチにも何か違いがあるのでしょうか？

(地元アーティストによる事業は除くとして)成功しているホール・していないホールも、Aのホール・Bのホールも、日本国内の公共ホールである限り、基本的には同じようなアーティストが出演していることが多くことから、その内容に大きな違いがあるとは思えません。加えて、アーティストが地域によって内容を大きく変えてくるとなると、それはアーティストにとっては非常に過酷なリクエストであるといえますので、普通に考えれば、内容に大きな違いはないと考えて良いでしょう。では、何が違うのでしょうか？

アウトリーチに色をつけるのは、ホールの役割

成功しているホールの殆どは、自分達のミッションや目指している成果(得たい成果)を明確に持って、それを実現するためにアーティストが地域に滞在する期間のなかでスタートとゴールを明確に定め、企画し、活動しています。

例えば、Aホールのような地域密着型のホールが、3日間の活動で1日目は子供たち向け、2日目は地域の大人向けのアウトリーチをして、最終日にはホールで親しみやすいコンサートを開催するという企画を実施するとします。そうしたシンプルな企画を、そのホールならではの企画へと変化させるためには、(小さなアイデア・工夫ではありますが)3日間の共通テーマを設定し、それをメッセージとしてコンサートタイトルとして掲げ、ホールのイメージを向上させていく。などが考えられます。とても“おんかつ的”ですよ。

芸術劇場型のBのホールであれば、Aのホールのような3日間の活動に加えて、本格的なリサイタルへと誘うことを目的として、クラシック音楽を深く知るためのワークショップも実施して、クラシック音楽ファン層を広げていく。などの活動が考えられます。

小さくてもそのホールならではのアイデア・工夫を加えていくことができれば、企画運営担当者の方は、そのホールならではの色がつきはじめてきたことを実感することができるでしょう。

ただし、そうした努力も一度きりの事業であれば、その効果は限定的なものではあります。

ビジョンを持って、積み重ねていくことで色を見せてくる。

残念ながら、今の公共ホール界は一時きりの事業で成功できるほど甘くはありません。

上手にアイデア・工夫を加えることができたとしても、一度きりの事業だと色がついたことに気が付くのは担当者の方だけで観客や地域の方々が気が付くことはないでしょう。

ホールの色（個性）を観客、地域の方々に気が付いてもらうためには、そのホールならではのビジョンを持ち、掲げ、そして、それらを基にした事業をコツコツと積み重ねていくことが何より大切です。もちろん、そうした活動を行うためには、資金の獲得も含めた計画が必要となってきます。

これからの公共ホールスタッフには、「アウトリーチを実施する力」だけでなく、「アウトリーチを活用する力」「ホールを運営する力」が求められる時代になってきました。

感情を表現する演奏家＝アーティスト

普段意識せずに、我々が「アーティスト」と言っている音楽家について、なぜ「ミュージシャン」や「プレイヤー」では無く、「アーティスト」と言うのか、について改めて考えてみました。

そもそも芸術と言われる世界の中で、一般的に親しみ易いと言われているジャンルの巨頭に「美術」と「音楽」が挙げられます。現在では文化芸術振興基本法が整備され芸術のカテゴリーも美術、音楽のみならず、演劇、舞踊、写真等、ひいては伝統芸能、芸能、まで様々あります。文化のカテゴリーまで包括するならばここに書ききれない程ありとあらゆるジャンルが存在しています。しかしながら私たちは幼少期からの教育等もあり、芸術の筆頭として「美術」と「音楽」の存在感には論を持たないといえるのではないのでしょうか。

さて、その「美術」と「音楽」は、その長い歴史の中で、お互いに触発しあい発展して来た事は皆様もご存知かと思えます。しかし、この「美術」と「音楽」は、観聴きする手法に決定的とも言える違いがあります。それが「伝達者」の存在です。美術館等で美術作品（絵画や彫刻等）を観るとき、作品と観る人の間にはなにも存在しません。つまり作者の作品を直接に観る事で、作者の思いをストレートに感じる事が可能です。これに対して、音楽は必ず作品と観聴きする人の間に「伝達者」が存在します。この「伝達者」無くして音楽を観聴きする事は出来ないとも言えるでしょう。作曲者の作品として「楽譜」を見る事で、音楽が頭の中で流れる人は何人いるのでしょうか。おそらく音楽の専門教育を受けた一部の人しかいないでしょう。当然ですがこれは楽譜を見る事が音楽を聴く事では無いからです。つまり演奏者という伝達者が存在して始めて音楽が成り立つと言えるのです。

では、演奏者はどのような心理状況で演奏と言う行為を行っているのでしょうか。演奏が単なる機械的な行為であれば、レコードやCDを再生するのと同様、プレイであり、演奏者はプレイヤーと言う言葉が適切かと思えます。しかし、楽器を演奏したり、歌を歌ったりする行為は誰もが出来る訳ではありません。殊に芸術的に演奏する歌唱すると言う行為は、それ自体が特殊な訓練を受けた高度な技術である事は皆様もご存知かと思えます。つまり、演奏すると言う行為は、演奏者が作曲者と、楽譜と言うテキストを使用して、心で会話をする行為なのです。楽譜と言う画一的な情報から作曲者の意図を汲み取り、演奏と言う行為を通じて常に作曲者と会話をし、その心情に寄り添い、演奏者の感情の吐露によって作品を表現しているのです。従って、演奏と言う表現行為そのものが、芸術的な行為であり、演奏者を表現者としてプレイヤーでは無くアーティストと呼んでいるのです。これは何もクラシック音楽界のみならず、ポピュラー音楽界も同様なのです。

では、ここで、先ほども申した「感情の吐露による作品」が音楽ならば、音楽によって伝えられることとは一体何なのでしょう。美術や文学、演劇や舞踊においては、人間の欲望や思想を表現する事が可能かと思えます。しかし音楽では欲望や思想は表現出来ないかと思えます。音楽が唯一表現し得るものは「感情」のみではないのでしょうか。古典派後期からロマン派の時代に作曲の形式が自由になると、多くの作曲家が文学作品をモチーフとしたり、政治的思想を作品に表そうと多くの楽曲を創作しています。又、印象派の時代になると絵画等の美術作品にインスピレーションを得て作曲された作品等も散見されます。もちろんそれらの作品は新しい音楽の扉を開く事になるのですが、結論からすると音楽での表現にはやはり限界があり、感情を構成する喜怒哀楽の表現に帰依すると私は思っています。音楽によるメッセージとは、演奏者の感情が旋律と言う喜怒哀楽となり、そこへ聴く人の感情や環境があいまっていろんな心象風景が形作られ、心が浄化されたり昇華したり、また同感の涙になったりするのではないのでしょうか。「感情」は誰もがもっている気持ちの表現です。音楽を聴くという行為は、演奏者と聴く人の感

情の相互作用によってもたらされる新たなる感情が「感動」と捉える事が出来るでしょう。

アウトリーチでは様々な対象にアプローチする事が可能です。音楽のアウトリーチにおいては、アーティストと参加者の感情表現の相互作用と言う点から、プログラム等の構成を検討してみる事も非常に効果があるのではないかと考えています。

※「演奏」と言う単語は楽器に対しての行為であり、声楽家の場合は「演奏」を「歌唱」に置き換えてお読み頂ければ幸いです。

今年度お伺いした4市区町（蕪崎市、日立市、文京区、美里町）では、それぞれユニークな企画を実施することができました。それは、それぞれのホールがこれまでの事業を通じて不足していると感じていること、乗り越えたいと思っている課題を明確に自覚されていたことにあったと思います。

それぞれにユニークな取り組みが出来た一方で、企画（コンサート）の面白さを伝えることの難しさも痛感しました。アーティストと練ったプログラムの面白さをどうしたら人々に伝えられるか、その点で最も苦労したのが蕪崎市でした。アーティストの喜名さんは実力もやる気も十分過ぎるほど兼ね備えていましたが、惜しむらくはまだ無名であることと、演奏楽器がチューバだったこと。「チューバ」と聞いて楽器のイメージがパツと頭に浮かぶ人はかなり限られているでしょう。正直なところ、私自身喜名さんの演奏を目の当たりにするまでチューバでのリサイタルなど聴いたこともありませんでした。ですが、彼の演奏は私のチューバという楽器に対するイメージを大きく変えるほど素晴らしいものでしたし、喜名さん自身も「チューバの地味なイメージを180度変える！」という強い信念のもとでこの事業に取り組んでくれました。

まずは「チューバという楽器を知ってもらおう」ことに焦点を当ててアクティビティ先を選び、コンサートの広報活動についても喜名さんの明るく元気な人柄が伝わるように楽しそうな雰囲気チラシを作ったり、喜名さんの動画メッセージをホームページで流したりしました。さらには、コンサートのことが街の話題になるようにとプログラムの一部を投票で決める方法（地元の皆さんなら誰でも知っている「武田節」か、喜名さんの出身地で、最近人気の沖縄民謡のどちらをチューバで聴いてみたいかというもの）を採用したりと、できるだけ多くの人たちに関心を持ってもらえるよう工夫しました。しかしながら、「武田節 v.s. 沖縄民謡」の投票は期待したほど盛り上がりせず、今一つコンサートの面白さが伝わりきらずにコンサートの日を迎えてしまった感があり、それは当日の集客の結果にも表れていました。終演後に回収されたお客さんのアンケートからは、担当の駒井さんたちの「来てくれれば絶対楽しめる！」という思いが伝わっていたことがわかっただけに、どうしたらコンサートの面白さをもっと効果的に伝えることができるかという点が課題として残った事業でした。

美里町のおんかつでも同様の苦労がありました。「クラシック」と言った途端にお客さんの足が向かなくなるという、クラシックコンサートに対するネガティブなイメージを払拭すべく、担当者の中兼さんは「矢沢永吉のコンサートのように、クラシックでも客席が盛り上がるコンサートを作りたい！」という思いで、ピアニストの岩崎さんと共に「お客さんと一緒に作る・参加できる」コンサート作りをしました。しかし、チラシ作りの工程で中兼さんの抱いていたコンサートのイメージが上手くデザイナーさんにうまく伝わらず、典型的な“ピアノ・リサイタル”的なデザインのチラシになってしまったり、プログラム内に仕掛けたさまざまな工夫は「当日までのお楽しみ」ということでチラシに詳細を盛り込むこともできず、「いつものピアノ・リサイタルとは違うんだ！」という中兼さんの思いはチラシからは伝わらない（というより、おそらく想像すらできない）形になってしまいました。予想通り、発売開始からチケットの売り上げが全くのびず、危機感を抱いた中兼さんがご自身でチラシを配って歩き、口頭でコンサートの内容を説明して回った結果、コンサート当日は大勢の方にご来場いただけてコンサートも大いに盛り上がりました。公演担当者が「足で稼ぐ」のも確かに重要ではありますが、広報活動の初期段階においてもっと効果的な方法があったのではないかと反省は残りました。

一方の文京区では、「正確に伝える」ことの難しさを痛感させられました。担当者の津田さんの発案で、これまでホールとしてターゲットにしてこなかった妊婦さん（プレママ）と子育て中のお母さん（ママ）たちに向けたコンサートを実施することになり、子育てに追われて慌ただしい毎日を過ごしているママや、家に閉じこもりがちでプレママにリラックスしてリフレッシュしていただくことを目的として、一

番出掛けやすい平日昼間の1時間、盛りだくさんのプログラムを作りました。津田さんの狙いは的中し、チケットはあっという間に完売してしまい、アーティストの坂口さんもさらにやる気に拍車がかかっていました。ところが、開演時間になってみるとロビーはベビーカー渋滞ができ、客席を覗くと文京区中の乳幼児が集まったのではないかと思わせるほどのお赤ちゃんや未就学児の数。ママが来やすいようにと未就学児の入場を可能にしてしまった結果、「子供“も入れる”」コンサートがいつのまにか「子供“が聴ける”」コンサートにすり替わってしまい、ママ向けに準備したプログラムは、赤ちゃんのぐずり声やそれをあやすママたちの声にかき消されて肝心のママやプレママの耳には届かないコンサートになってしまいました。文京区独特の地域性にも一因はあったと思いますが、蕪崎市や美里町とは全く違った意味で、「伝えることの難しさ」を痛感した事業でした。

コンサートの意図を「伝える」ことが一番スムーズにいったのが日立市でした。併設されているプラネタリウムにばかりに集まる子供たちを、どうしたらホールにも足を向けさせることができるかという担当者の井原さんの課題から始まった日立市のおんかつでは、ジュニアサポーターとして子供たちを企画の段階から巻き込んでしまう方法を取りました。子供たちから出たアイデアをアーティストの塚越さんと相談の上プログラムに盛り込んだり（「家族で楽しめる曲」をジュニアサポーターたちに提案してもらい、お客さんに投票してもらって当日塚越さんが演奏する曲を決めるシステム）、当日配布するプログラムのデザインを手伝ってもらったり、舞台に参加するための衣装作りをしてもらったりし、その準備に取り組む様子は、ミーティングが行われる度にtwitterで随時発信しました。

今回のジュニアサポーターはアクティビティで訪問した学校から参加してもらいましたが、子供たちの活動を通して学校や父兄、地域へとコンサートの話題が広がっていったことは確実で、「塚越慎子の魔法のマリンバ」という公演タイトルにちなんでホール空間を「魔法の館」に見立てて、魔女見習いの衣装で公演当日にチケットのもぎりをするジュニアサポーターに暖かい声を掛けて下さるお客さんがいらっしゃいました。初めてジュニアサポーターを募ったため、その説明や曲の投票の説明など文字情報がかかり多いチラシになってしまいましたが、それらをうまくデザインの中に組み込んでコンサートの雰囲気損なわないチラシができたことも井原さんがデザイナーさんと細かくやり取りされた結果だと思っています。

おんかつは企画を練るだけでもなかなか大変なことで、その上アクティビティの段取りも重なってくるとコンサートの宣伝まで十分気が回らないことが多いと思います。ですが、せっかくアーティストと一緒に「我が町ならでは」の企画を作っていただくのですから、それを街の皆さんに知っていただき、ホールに足を運んでもらって楽しいひと時を過ごしてもらえよう、どうしたらより良く（効果的に）コンサートのことを伝えられるか。伝えたいことが明確なチラシ作りはもちろんのこと（掲載内容だけでなくデザインも）、twitterやFacebook、ホームページなどでの動画の活用（アーティストからのメッセージや演奏シーンなど）、そしてチケット発売時だけでなく、コンサートの向けて盛り上げていけるような段階的な情報発信など、これからもいろいろな可能性を探っていきたいと思います。

過去を省みて

今年度出会ったご担当者お一人お一人の顔を思い浮かべながら、おんかつがもたらすものに思いを巡らせてみた。

もうずいぶん昔の私事ですが、公演制作の仕事についていた時、アーティストのアーティストイックな言動に振り回され、釈然とせず公演準備を行っていたことがありました。しかし本番を迎え、アーティストが舞台へと歩いていき、本気の演奏をし、それを聴いてありったけの拍手を送ってくださるお客さんを見た時『この公演のためにもっとできたことはなかっただろうか』と自省したことがありました。後悔のないよう準備し尽くせたら幸せですが、もしかしたら真に準備すべきことは実施を経験して見えてくるものなのかも知れません。おんかつも同じく、アーティストを前に目を輝かせながら興味津々に全神経を注いでくれる子どもたちの様子を目の当たりにして、『もっともっとあの子たちのためにしてあげられたことはなかっただろうか』と自らを振り返り、発見するところから始まることもあるのかも知れません。

今を創出する

準備とは何のためのものなのでしょうか。初回のおんかつにおいてはアーティストとの心理的および物理的な距離を形成してしまう環境を、できるだけ自然に排除すること。と、私は思っています。例えば、椅子の並べ方ひとつをとっても、対象者がアーティストの視界からこぼれてしまっていないか、または近すぎて緊張を与えてしまう距離感になっていないか。また、共演プログラムを行う際には、アーティストが入ることによって普段の役割を奪われてしまう人が生じないか、またプロとの比較対象となってしまうナーバスにさせてしまうことはないか等々、その場にいる全ての人たちにとって、居心地の良い時間と空間になるように想像力や感受性を働かせることかと思えます。

余談になりますが、子どもたちの椅子を並べる際は、ひとつひとつ座りながらアーティストとの距離感を感じてみてください。最前列、最後列、真ん中、端っこ、それぞれの位置に子どもの立場になって座ってみると、椅子ひとつ並べるのもなかなか奥深いものがありますので、是非試してもらえたらと思います。

今年度もそんなことを念頭におきつつ取り組んだ中で、印象に残ったというか不思議な感覚をおぼえたまちがあったので紹介したいと思います。

アウトリーチの対象は4コマともすべて小学4年生1クラス。取り立てて特徴のあるものではなく、制作面からすると、スタンダードなおんかつでした。

例えスタンダードであれ、いつもと同じく丹精込めてアクティビティ環境を創出するのですが、どうも手応えが感じられない。いや、悪い意味ではなく。

それはおそらく、環境を整えなくても、子どもたちは受け入れる体制をとっていてくれて、目の前で起こっていることに対して素直にそして貪欲に吸収してくれる、そんな素地があったのだと思う。

またコンサートにおいても同様の感覚をおぼえました。アーティストのトークの中での問いかけに臆することなく答えてくださったり、その答えに他の方が笑ったりつっこんだり、町中の大人も子どもも心開かれた状態なのが、客席の隅っこの方からでも感じ取ることができました。

思い起こせばこのまちでは、職員さん同士のやりとり、学校の先生とのやりとり、コンサートにきてくださった方や当日券を求める方とのやりとり全てが、気負いなく自然体で行われていたように思う。

つまり、おんかつで目指しているもののひとつである「心の交流」の土台となるものがすでに形成されており、互いの距離感を探り合う時間が不要なため、造作無く心の交流をクリアできてしまったことに、良い意味での手応えのなさを感じたのだと思うのです。

未来を見据えて

前述の例のように、おんかつで目指したい心の有り様が元から在る場合もあれば、少しずつ解きほぐして関係性を築いていく場合もあり、ひとつひとつ異なる事例があるのは当然ながら、一番大切なことは、担当者自身が目指すべきものを明確に掴み、実現にむけて準備し続けることになるのではないのでしょうか。

初回のおんかつを通して、人と人との距離感や心が交流する現場を体感されたならばきっと「おんかつはいいもんだ」と感想を持たれることと思います。そして「もっとたくさんの人たちに届けたい」と思われるのも自然な流れでしょう。さらにはもっと経験を積み重ね、共有してくれる仲間が欲しくなってくることでしょう。

そのためどうか、実施する理由を自分の中に持って欲しいと思います。難しいことはありません。実施したい、実施しなければならないと思った動機を言葉にしてみてください。

そして、次のおんかつ、その次のおんかつを迎えられるよう、一年先、二年先、数年先までを見据えて、少しずつ環境を整えてください。学校から実施希望の声をあげて欲しいならば、まず先生方に見てもらい機会を作ってください。予算が必要であれば、まちにどんな成果をもたらしてくれるのか、行政面からの魅力を伝えてあげてください。

すぐ先の実施日のことだけでなく、少し先の未来、ずーっと先の未来に思いを馳せて、今やっておかなければならないことを逆算し、実行して欲しいと思います。

おんかつがもたらもたしてくれるもの、それは『もっとできることがあるはず』の視点であり、事業を行う原点を考えることではないでしょうか。

第4部

平成27-28年度公共ホール音楽活性化
アウトリーチフォーラム事業

1 事業趣旨

一般財団法人地域創造（以下「地域創造」という。）は、地域における芸術活動を担う人材の育成および環境づくりに寄与し、あわせて創造性豊かな地域づくりに資することを目的とし、都道府県等との共催により、公共ホール等を拠点とした、クラシック音楽の演奏家による地域交流プログラムに関する事業を実施する。

2 実施内容

(1) 実施団体

- ①対象団体（研修事業・総括公演プログラム事業）：（公財）ひろしま文化振興財団
- ②公演実施団体（市町村公演事業）：広島市、呉市、三次市、庄原市、東広島市、廿日市市

(2) 事業内容

対象団体は事業を2ヶ年で実施することとする。

①研修事業

ア) 研修プログラムⅠ（シンポジウム、セミナー等）

対象団体は、都道府県内または政令指定都市内の公共ホール職員、文化行政担当者および教育関係者等を対象として、アウトリーチや文化・芸術による地域づくりに関するシンポジウム、セミナー等を開催する。

イ) 研修プログラムⅡ（全体研修会）

対象団体は、実施団体に対して、市町村公演事業の実施に必要な実践的ノウハウを取得するための研修会を開催する。

ウ) アウトリーチ研修

対象団体は地域創造と協力して、対象団体の職員および演奏家を対象として、アウトリーチによる地域交流に関する手法開発研修を実施する。

②総括公演プログラム事業（ガラコンサート）

対象団体は、有料の総括的公演（ガラコンサート）を実施する。

③市町村公演事業

公演実施団体は、原則として4日間の連続した日程で次の事業を実施する。

- ア) 地域交流プログラム 学校や福祉施設でのアウトリーチ（ミニコンサート）等、地域との交流を図る事業。原則として6回（1日につき2回・3日間）実施する。
- イ) コンサート 公共ホール等において有料のクラシック音楽のコンサートを実施する。

3 事業実施に対する支援

(1) チーフコーディネーターの派遣

地域創造は、事業計画の策定・実施にあたり対象団体担当者のコーディネート能力の向上を図るため、また地域におけるアウトリーチ手法のノウハウ蓄積のため、地域の芸術活動に詳しい専門家を派遣する。

(2) コーディネーターの派遣

地域創造は、実践的なノウハウを習得する機会を提供するとともに事業の円滑な運営を図るために、企画制作の経験が豊富な専門家を派遣する。

(3) 講師の派遣

地域創造は、実践的なノウハウを提供できる企画制作の経験が豊富な講師等を、研修プログラムの実施時に派遣する。

4 経費負担

事業実施に伴う下記の経費については、地域創造が負担する。

①演奏家派遣経費

- ・事業参加に係る報酬（出演料、謝金等を含む）
- ・派遣に係る交通費（現地移動費を除く）、宿泊費、日当、楽器運搬費（現地運搬費を除く）
- ・派遣に係る損害保険料

②研修事業・総括公演プログラム事業（ガラコンサート）負担金

対象団体が支出した研修事業及び総括公演プログラム事業（ガラコンサート）実施に係る経費（③の経費を除く）について、事業実施年度の2年間で50万円を限度として負担する。

③アウトリーチ研修経費

対象団体が支出したアウトリーチ研修実施に係る経費のうち、ピアノ調律費及び現地楽器運搬費について負担する。

④市町村公演事業負担金

実施団体が支出した公演事業実施に係る経費のうち、ピアノ調律費について、1団体につき15万円を限度として負担する。また、ピアノ調律費を除く経費について、1団体につき5万円を限度として負担する。

5 派遣アーティスト 及び 派遣コーディネーター

(1) 派遣アーティスト

サクソフォン四重奏（Lumie Saxophone Quartet）

住谷美帆（S.sax）、戸村愛美（A.sax）、中嶋紗也（T.sax）、竹田歌穂（B.sax）

ピアノトリオ（トリオ・ノート）

大野真由子（Pf）、高瀬真由子（Vn）、田辺純一（Vc）

弦楽四重奏（ピエーレ弦楽四重奏団）

小林沙紀（Vn）、伊師裕人（Vn）、正田響子（Va）、野村杏奈（Vc）

(2) チーフコーディネーター

中村透（作曲家・芸術文化学博士・琉球大学名誉教授 / 音楽工房凜主宰 南城市文化センター・シュガーホール芸術監督）

(3) コーディネーター

花田和加子（Keynote代表、ヴァイオリニスト）

菱川浩二（(株) TmZm代表取締役社長／プロデューサー）

加藤直明（トロンボーン奏者、金管五重奏 Buzz Fiveメンバー、日本トロンボーン協会理事）

(4) アシスタントコーディネーター

丹羽梓（横浜国立大学 都市イノベーション学府博士課程前期）

三浦幸恵（神奈川県立音楽堂業務課）

桜井しおり（ワークショップデザイナー、ピアニスト）

6 事業概要

(1) 研修事業

①研修プログラム I（シンポジウム）

日 時：平成27年8月26日 13：30～

場 所：広島県民文化センター 第一練習室

内 容：市町村文化担当者、公共ホール職員等を対象とした、アウトリーチ活動の意義や可能性を学び、理解を深めるためのシンポジウム

・ 基調講演及びワークショップ

【講師】 中村透 氏

【演題】 音楽アウトリーチが地域文化にもたらすもの～おんがく、からだ、知の回路を発見～

【ワークショップ】 演奏とダンスのコラボレーション体験

【実演講師】 隅地茉歩 氏（振付家・ダンサー）

早稲田桜子 氏（ヴァイオリニスト）

・ アウトリーチ体験

【実演講師】 早稲田桜子 氏（ヴァイオリニスト）

志鷹美紗 氏（ピアニスト）

隅地茉歩 氏（振付家・ダンサー）

・ アーティスト・トークセッション

中村透 氏／隅地茉歩 氏／早稲田桜子 氏／志鷹美紗 氏



②研修プログラムⅡ 全体研修会

日 時：平成28年4月28日（火）13：00～17：30

場 所：広島市まちづくり市民交流プラザ マルチメディアスタジオ
（広島市中区袋町6番36号）

対象者：市町村公演事業担当者等／参加者数：31人

内 容：中村チーフコーディネーターによる公共ホールのミッションやアウトリーチの実態、今後の課題等示唆に富んだ講義の後、アーティストを交えた個別打合せを実施。



6/28	◎個別研修	<p>ランスルー実施前に各チームとも他チームのコーディネーター等にプレランスルーを披露。アドバイス等を受ける。</p> <div style="display: flex; flex-wrap: wrap;"> <div style="width: 50%; text-align: center;"> <p>コーディネーター等打合せ</p>  </div> <div style="width: 50%; text-align: center;"> <p>トリオ・ノート</p>  </div> <div style="width: 50%; text-align: center;"> <p>ルミエSQ</p>  </div> <div style="width: 50%; text-align: center;"> <p>ピエーレ弦楽四重奏団</p>  </div> </div>
6/29	◎個別研修 ◎ランスルー 場所：第1練習室 見学者：13人 (市公演事業担当者人名、各ホール登録アーティスト6人、県外施設職員1人)	<div style="display: flex; flex-wrap: wrap;"> <div style="width: 50%;">  </div> <div style="width: 50%;">  </div> <div style="width: 50%;">  </div> </div>

6/30	<p>◎アウトリーチ実施①</p> <p>場所：坂町立坂小学校（坂町坂東二丁目22番1号）</p> <p>■トリオ・ノート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会場：音楽室 ・時間：10：20～11：05 ・対象者：26人（5年1・2組合同） ・見学者：7人（施設担当者、施設登録アーティスト等） <p>■Lumie Saxophone Quartet</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会場：多目的室 ・時間：10：20～11：05 ・対象者：24人（5年2組） ・見学者：9人（施設担当者、施設登録アーティスト等） <p>■ピエーレ弦楽四重奏団</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会場：多目的室 ・時間：13：40～14：25 ・対象者：24人（5年1組） ・見学者：8人（施設担当者、施設登録アーティスト等） <p>■給食交流</p>	    
------	--	--

6/30	◎全体ミーティング	
7/1	◎アウトリーチ実施② トリオ・ノート ・熊野町立第四小学校（熊野町川角五丁目12-1） ・会場：音楽室 【1回目】 ・時間：11：30～12：15 ・対象者：6年1組34人 【2回目】 ・時間：11：30～12：15 ・対象者：6年1組34人 ・見学者：6人（施設担当者、施設登録アーティスト等）	 
	Lumie Saxophone Quartet ・熊野町立第二小学校（熊野町初神三丁目25-1） ・会場：音楽室 【1回目】 ・時間：11：30～12：15 ・対象者：3・4年33人 【2回目】 ・時間：13：45～14：30 ・対象者：5・6年31人 ・見学者：2人（施設担当者、施設登録アーティスト等）	 

ピエーレ弦楽四重奏団

- ・坂町立横浜小学校（坂町横浜東一丁目9-3）
- ・会場：音楽室

【1回目】

- ・時間：11：25～12：10
- ・対象者：6年40人

【2回目】

- ・時間：13：45～14：30
- ・対象者：5年57人

- ・見学者：7人（施設担当者、施設登録アーティスト等）



◎グループミーティング

- ・会場：サテライトキャンパスひろしま505講義室



◎閉講式

- ・会場：サテライトキャンパスひろしま505講義室



(2) 市町村公演事業

①東広島市公演

アーティスト：Lumie Saxophone Quartet

期 間：平成28年9月27日（火）～10月1日（土）

主 催：東広島芸術文化ホールくらら指定管理者 JTB・NHKアート・日本管財共同企業体
（代表団体（株）JTBコミュニケーションデザイン）

◎アウトリーチ

<p>9/28</p>	<p>河内小学校（東広島市河内町中河内1013）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会 場：音楽室 ・時 間：10：40～11：25 ・対象者：47人（1年6人、2年5人、3年10人、4年8人、5年10人、6年8人） <p>※給食交流なし</p>	
	<p>河内西小学校（東広島市河内町河戸828）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会 場：音楽室 ・時 間：14：30～15：15 ・対象者：26人（1年6人、2年3人、3年5人、4年3人、5年4人、6年5人）、保護者・地域の方・保育園児等20人 <p>※給食交流なし</p>	
<p>9/29</p>	<p>久芳小学校（東広島市福富町久芳3329-3）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会 場：音楽室 <p>【1回目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時 間：11：25～12：10 ・対象者：31人（1年11人、2年8人、3年12人） <p>【2回目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時 間：13：10～13：55 ・対象者：28人（4年6人、5年15人、6年7人） <p>※給食交流あり</p>	
<p>9/30</p>	<p>風早小学校（東広島市安芸津町風早789）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会 場：音楽室 <p>【1回目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時 間：10：15～11：00 ・対象者：4年35人 <p>【2回目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時 間：11：15～12：00 ・対象者：5年29人 <p>※給食交流なし</p>	

◎コンサート

日 時：平成28年10月1日（土）開場13：30 開演14：00 終演15：50（晴れ）
 場 所：東広島芸術文化ホールくらら 小ホール（245席）（東広島市西条栄町7番19号）
 入場者数：214人



▲公演（アンコール）



▲終演後 サイン会

②三次市公演

アーティスト：Lumie Saxophone Quartet
 期 間：平成28年10月15日（火）～11月19日（土）
 主 催：三次市民ホール事業運営委員会

◎アウトリーチ

<p>10/15</p>	<p>八次小学校（三次市畠敷町1725-1） ・会 場：音楽室 【1回目】 ・時 間：11：40～12：25 ・対象者：4年31人（1クラス） 【2回目】 ・時 間：14：00～14：45 ・対象者：4年62人（2クラス合同） ※給食交流あり</p>	
<p>10/16</p>	<p>三次小学校（三次市三次町1851） ・会 場：音楽室 【1回目】 ・時 間：11：25～12：10 ・対象者：6年27人 【2回目】 ・時 間：13：55～14：40 ・対象者：6年27人 ※給食交流あり</p>	

<p>10/18</p>	<p>みらさか小学校（三次市三良坂町三良坂2772-1）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会 場：音楽室 ・時 間：10：45～11：30 ・対象者：6年31人 <p>※給食交流なし</p>	
	<p>三和小学校（三次市三和町敷名11496）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会 場：音楽室 ・時 間：14：05～14：50 ・対象者：31人（5年・6年合同） <p>※給食交流なし</p>	

◎コンサート

日 時：平成28年11月19日（土）開場13：00 開演14：00 終演15：50（晴れ）
 場 所：三次市民ホールきりり 大ホール（1,006席）（三次市三次町111番地1）
 入場者数：200人



▲開演前



▲公演中



▲終演後 サイン会



▲アウトリーチの紹介展示

③廿日市市公演

アーティスト：トリオ・ノート

期 間：平成28年11月15日（火）～11月19日（土）

主 催：（公財）廿日市文化スポーツ振興事業団

◎アウトリーチ

<p>11/16</p>	<p>大野東小学校（廿日市市大野720） ・会 場：音楽室 【1回目】 ・時 間：10：30～11：15 ・対象者：4年1・2組65人 【2回目】 ・時 間：11：35～12：20 ・対象者：4年3・4組64人 ※給食交流なし</p>	
	<p>津田小学校（廿日市市津田2740番地） ・会 場：音楽室 ・時 間：14：20～15：05 ・対象者：5・6年 41人 ※給食交流なし</p>	
<p>11/17</p>	<p>宮内小学校（廿日市市宮内1518） ・会 場：音楽室 【1回目】 ・時 間：10：30～11：15 ・対象者：6年1組36人 【2回目】 ・時 間：11：35～12：20 ・対象者：6年2組37人 ※給食交流なし</p>	
<p>11/18</p>	<p>四季が丘小学校（廿日市市四季が丘8丁目1-1） ・会 場：音楽室 ・時 間：11：35～12：20 ・対象者：4年1・2組65人 ※給食交流あり</p>	

◎コンサート

日 時：平成28年11月19日（土）開場13：30 開演14：00 終演15：50（晴れ）

場 所：はつかいち文化ホールさくらびあ 小ホール（296席）（廿日市市下平良1丁目11番1号）

入場者数：128人



▲公演中



▲終演後 見送り



▲アウトリーチの紹介展示



④広島市公演

アーティスト：トリオ・ノート

期 間：平成28年11月29日（火）～12月3日（土）

主 催：（公財）広島市文化財団 事業課

◎アウトリーチ

11/30	<p>中島小学校（広島市中区加古町10-8）</p> <ul style="list-style-type: none">・会 場：音楽室 <p>【1回目】</p> <ul style="list-style-type: none">・時 間：11：30～12：15・対象者：4年2組30人 <p>【2回目】</p> <ul style="list-style-type: none">・時 間：14：15～15：00・対象者：4年1組29人 <p>※給食交流あり</p>	
-------	--	--

<p>12/ 1</p>	<p>基町小学校（広島市中区基町20-2）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会 場：音楽室 <p>【1回目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時 間：11：35～12：20 ・対象者：3・4年50人 <p>【2回目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時 間：14：05～14：50 ・対象者：5・6年50人 <p>※給食交流あり</p>	
<p>12/ 2</p>	<p>神崎小学校（広島市中区舟入中町1-36）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会 場：音楽室 <p>【1回目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時 間：11：30～12：15 ・対象者：4年1組32人 <p>【2回目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時 間：14：05～14：50 ・対象者：4年2組33人 <p>※給食交流あり</p>	

◎コンサート

日 時：平成28年12月3日（土）開場13：30 開演14：00 終演16：00（晴れ）

場 所：JMSアステールプラザオーケストラ等練習場（180席）（広島市中区加古町4番17号）

入場者数：180人



▲公演中



▲楽器体験

⑤庄原市公演

アーティスト：ピエーレ弦楽四重奏団

期 間：平成28年11月29日（火）～12月3日（土）

主 催：NPO法人庄原市芸術文化センター・庄原市教育委員会

◎アウトリーチ

<p>11/30</p>	<p>永末小学校（庄原市永末町37-1）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会 場：音楽室 ・時 間：10：45～11：30 ・対象者：18人（3年10人、4年8人） <p>※給食交流なし</p>	
	<p>板橋小学校（庄原市板橋町165-1）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会 場：音楽室 ・時 間：13：50～14：35 ・対象者：4年32人 <p>※給食交流なし</p>	
<p>12/ 1</p>	<p>庄原小学校（庄原市西本町二丁目13-1）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会 場：音楽室 <p>【1回目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時 間：11：25～12：10 ・対象者：4年1組24人 <p>【2回目】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時 間：14：00～14：45 ・対象者：4年1組24人 <p>※給食交流あり</p>	
<p>12/ 2</p>	<p>東小学校（庄原市上原町376-1）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会 場：音楽室 ・時 間：10：35～11：20 ・対象者：4年19人 <p>※給食交流なし</p>	

12/ 2 峰田小学校（庄原市春田町101-3）
・会 場：図書室
・時 間：14：00～14：45
・対象者：3・4年生16人（複式学級）
※給食交流なし



◎コンサート

日 時：平成28年12月3日（土）開場13：30 開演14：00 終演15：40（晴れ）
場 所：庄原市民会館（926席）（庄原市西本町2丁目17番15号）
入場者数：153人



▲開演前



▲公演中



▲終演後 見送り



▲アウトリーチの紹介展示

⑥呉市公演

アーティスト：ピエーレ弦楽四重奏団

期間：平成28年12月5日（月）～12月9日（金）

主催：（公財）呉市文化振興財団

◎アウトリーチ

<p>12/6</p>	<p>宮原小学校（呉市宮原4丁目8-1）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会場：音楽室 【1回目】 ・時間：11：25～12：10 ・対象者：5年19人 【2回目】 ・時間：14：00～14：45 ・対象者：4年23人 <p>※給食交流あり</p>	
<p>12/7</p>	<p>和庄小学校（呉市八幡街10-2）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会場：音楽室 【1回目】 ・時間：11：30～12：15 ・対象者：3年41人 【2回目】 ・時間：13：55～14：40 ・対象者：4年32人 <p>※給食交流あり</p>	
<p>12/8</p>	<p>警固屋小学校（呉市警固屋7丁目5-1）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会場：音楽室 【1回目】 ・時間：11：35～12：20 ・対象者：3年15人 【2回目】 ・時間：13：50～14：35 ・対象者：4年13人 <p>※給食交流あり</p>	

◎コンサート

日 時：平成28年12月9日（金）開場18：00 開演18：30 終演20：15（晴れ）

場 所：くれ絆ホール（581席）（呉市中央4丁目1番6号）

入場者数：176人



▲開演前



▲公演中



▲終演後 見送り



▲アウトリーチの紹介展示

(3) 総括公演プログラム事業 (ガラコンサート)

日 時：平成28年12月17日 (土) 開場13:30開演 14:00 終演16:20

場 所：広島県民文化センター ホール (広島市中区大手町1丁目5番3号)

入場料：一般1,000円 高校生以下無料

入場者：200人 (一般 182人 高校生以下 18人)

内 容：オープニングとエンディングに3組が合同で演奏し、その間を各組が市町村公演事業を振り返るエピソードを加えながら演奏を披露するガラコンサートならではのプログラム構成であった。また、エンディングのファイナルセッションでは、広島ならではの編曲を加えたプログラムであったり、市町村公演担当者が舞台上も登場したり、広島セッションの集大成となる公演となった。



▲オープニング (シンコペーティッド・クロック)



▲ファイナルセッション (リベルタンゴ〜じゃけえ! サプライズ版〜)



▲Lumie Saxophone Quartet



▲ピエール弦楽四重奏団



▲トリオ・ノート



▲アウトリーチの紹介展示

トリオ・ノート（ピアノ・トリオ）

○大野 真由子（おおの まゆこ）ーピアニストー

東京藝術大学音楽学部器楽科卒業、同大学大学院音楽研究科修士課程ピアノ専攻修了。
第45・46回鎌倉市学生音楽コンクール第2位、第13回吹田音楽コンクールピアノ部門第1位、第17回友愛ドイツリート（歌曲）コンクール優秀共演者賞等受賞。大阪センチュリー交響楽団、芸大フィルハーモニア等共演。同声会新人賞及び読売新人賞受賞、両新人演奏会出演。室内楽・伴奏ピアニストとしても活動中。横浜市栄区民文化センターリリス・レジデンス・アーティスト。現在、東京藝術大学管楽器科非常勤講師（伴奏助手）及び聖徳大学音楽学部ピアノ科専任講師。

○高瀬 真由子（たかせ まゆこ）ーヴァイオリニストー

桐朋女子高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学卒業。第5回大阪国際音楽コンクール大学の部にて第3位（1位なし）、第23回リトル・カメラ・コンクールにて第1位及び大阪府知事賞など、各賞を受賞。これまでにヴァイオリンを、佐々木由実、鈴木亜久里、石井志都子、漆原啓子の各氏に、室内楽を金木博幸氏、東京カルテットに師事。横浜市栄区民文化センターリリス・レジデンス・アーティスト。2015-16シーズン兵庫芸術文化センター管弦楽団レジデント・プレイヤー。2014年7月初のソロCDアルバム「Meditation」をリリース。

○田辺 純一（たなべ じゅんいち）ーチェロー

千葉県生まれ。東京藝術大学音楽学部を経て同大学院修士課程卒業。東京国際芸術協会新人オーディション奨励賞。市川市文化振興財団新人演奏家コンクール優秀賞。弦楽四重奏でライブツイヒ弦楽四重奏団、ヘンシェル弦楽四重奏団のマスタークラスを受講。また学内の室内楽定期演奏会では選抜されショスタコーヴィチの弦楽四重奏曲、ヤナーチェクの弦楽四重奏曲を演奏。フィリップ・ミュレル、アントニオ・メネセス各氏のマスタークラスを受講したほか、これまでにチェロを白神あきえ、伊藤耕司、菊地知也の各氏に、現在は向山佳絵子氏に師事。現在室内楽やオーケストラを中心に、ピアノ伴奏やアレンジなど、多方面で活動中。

ピエーレ弦楽四重奏団（弦楽四重奏）

○小林 沙紀（こばやし さき）－1st ヴァイオリナー

4歳よりヴァイオリンを始める。桐朋女子高等学校音楽科、桐朋学園大学音楽学部卒業。学内試験優秀者による桐朋学園大学室内楽演奏会などに出演。日本クラシック音楽コンクール、大阪国際音楽コンクール、秋吉台音楽コンクールに入選、レ・スプレンドル音楽コンクール審査員特別賞受賞。これまでに、ヴァイオリンを、野口千代光、エドアルド・オクーン、加藤知子の各氏に、室内楽を、漆原啓子、藤原真理、クリスティアン・ギガー、金木博幸の各氏に師事。

○伊師 裕人（いし ひろと）－2nd ヴァイオリナー

8歳よりヴァイオリンを始める。桐朋学園大学音楽学部卒業、同研究科修了。アバディーン（スコットランド）国際青年音楽祭にソリストとして招かれる。同音楽祭コンクール第2位。PMFオーケストラアカデミー、ルツェルン祝祭アカデミーに奨学生として参加。茨城県芸術祭県民コンサートにて奨励賞及び茨城新聞社賞受賞。第40回茨城県新人演奏会に出演。これまでにヴァイオリンを脇田優子、山田圭子、木野雅之、篠崎功子、水島愛子の各氏に師事。

○正田 響子（しょうだ きょうこ）－ヴィオラー

桐朋女子高等学校音楽科卒業、桐朋学園大学音楽学部4年に在籍。第64回全日本学生音楽コンクールヴァイオリン部門 高校の部 東京大会本選入選。ザルツブルク＝モーツァルト国際室内楽コンクール2013 第1位。2015年別府アルゲリッチ国際音楽祭に出演。小澤征爾音楽塾に参加。これまでにヴァイオリンを石井志都子氏、現在ヴィオラを佐々木亮氏に師事。

○野村 杏奈（のむら あんな）－チェロ

7歳よりチェロを始める。桐朋女子高等学校音楽科、桐朋学園大学音楽学部卒業。第11回泉の森ジュニアチェロコンクール銅賞。ザルツブルク＝モーツァルト国際室内楽コンクール2013特別賞。第7回蓼科音楽コンクール奨励賞。第68回全日本学生音楽コンクール入選。これまでにチェロを間瀬利雄、倉田澄子、室内楽を毛利伯郎、藤原浜雄、徳永二男、佐々木亮、銅銀久弥の各氏に師事。

Lumie Saxophone Quartet (サククス四重奏)

○住谷 美帆 (すみや みほ) —ソプラノサクソフォン—

茨城県水戸市出身。幼少期からピアノを習い、12歳から吹奏楽部でサクソフォンを始める。第22回クラシック音楽コンクール全国大会 第1位受賞。入賞者披露演奏会にてトマジ作曲「サクソフォン協奏曲」(橋本久喜指揮 入賞者オーケストラ)を演奏。第15回ジュニア・サクソフォンコンクール第1位受賞。第15回日本ジュニア管打楽器コンクール 金賞受賞。第31回日本管打楽器コンクール4位入選。これまでにサクソフォンを須川展也、鶴飼奈民の各氏に師事。2014年度よりヤマハ奨学生。現在、東京藝術大学3年在学中。

○戸村 愛美 (とむら まなみ) —アルトサクソフォン—

静岡県沼津市出身。第14回日本ジュニア管打楽器コンクール金賞。第33回静岡県学生音楽コンクール第1位。第15回ジュニア・サクソフォンコンクール第2位。これまでにサクソフォンを矢辺新太郎、服部吉之、須川展也の各氏に、室内楽を大城正司、須川展也の各氏に師事。2013年度よりヤマハ音楽奨学生。グランシップ・アウトリーチ登録アーティスト。第21回「静岡の名手たち」オーディション合格、ロダン賞受賞。現在、東京藝術大学4年在学中。

○中嶋 紗也 (なかじま さや) —テナーサクソフォン—

東京都出身。東京藝術大学音楽学部器楽科を経て、2016年同大学院音楽研究科修士課程器楽科を修了。修了時に大学院アカンサス音楽賞を受賞。

これまでに富岡和男、須川展也、大城正司、後藤典子、富岡祐子、貝沼拓実の各氏に師事。

第4回チボリジュニアサクソフォンコンクール第2位。第41回東京藝術大学室内楽定期演奏会に選抜され出演。その他数多くの演奏会に出演する。

現在はソロ、アンサンブルでの活動の他、国内プロ吹奏楽団やオーケストラの演奏会や録音に参加するなど、様々なジャンルで演奏活動を行っている。

○竹田 歌穂 (たけだ かほ) —バリトンサクソフォン—

鳥取県鳥取市出身。第4回チボリジュニアサクソフォンコンクール 高校の部 第一位入賞。第2回鳥取県新人クラシックアーティストオーディション 管打楽器の部 最優秀賞受賞。第31回日本管打楽器コンクール 入選。第41回東京藝術大学室内楽定期演奏会に選抜され出演。2016年3月 東京藝術大学音楽学部を経て東京藝術大学音楽研究科修士課程を修了。現在ソロ、室内楽、吹奏楽団、オーケストラ等様々な演奏活動を行う。これまでに原ひとみ、大城正司、須川展也、大石将紀、林田祐和の各氏に師事。

1. 実施経過

本事業は、市町立公共ホールの音楽事業活性化を目的として（一財）地域創造が広島県（（公財）ひろしま文化振興財団）と連携し、県と市町村のネットワークづくり、及び事業ノウハウの蓄積を目的に実施したものである。ひろしま文化振興財団では、「文化施設職員等研修事業」と位置づけた研修事業である。

現地打ち合わせ、啓蒙を目的としたセミナー&シンポジウム、派遣アーティスト（アンサンブル3団体）の選考会（東京）、実施市町村対象の全体研修会、アーティスト対象のアウトリーチ研修といった1年に及ぶ準備期間を経て、各市町村でのアウトリーチ実践と公演、最後にはガラコンサートで締めくくられる長期的な事業である。

長期的であること、関係担当者相互の協働が具体的かつ実践的であるということから、都道府県と基礎自治体との連携で公共ホールの活性化を図るという事業目的は、十分に達成できたと省察する。

とくに、県文化財団担当者の高い士気と積極的なフットワークによる市町村担当者との連携は特筆に値する。アーティストを仲立ちとした文化芸術の事業展開では、組織的業務展開だけでなく担当者の使命感や共感的態度が、個々の困難な課題をクリアする力となる場合が多いからである。

2. 派遣アーティストとコーディネーター

本事業で選考されたアーティストは、①ピアノトリオ ②弦楽四重奏 ③サクソ・カルテットの3団体で、②③は大学在学も含む若手の構成であった。選考会への応募団体は例年より多く、またその演奏レベルも総じて高度であった。

若手のアーティストたちが、アウトリーチに深く関心をもち、同時に独自の地域活動に高いモチベーションのあることが、面接インタビューからも窺えた。音大出身者のキャリア・デザインが、従来型のステージ活動志向、オーケストラ志望から変化している傾向が窺える。

一方、アーティスト個人の技量とは別にアンサンブル技術は重要で、その技量は一朝一夕では達成できない。後続のアンサンブル編成を想定した個人での応募方式には、今後考慮の余地があると思う。

今回は若い2団体を演奏経験の豊かなコーディネーターがチューター・ケアし、そのアンサンブル能力を高めるのに尽力してくれたのが幸いではあったが。

3. 学校アウトリーチ研修と実践

若いアーティストにとっては未経験に近い接近戦という演奏環境、アウトリーチのトーク内容、子どもの受け止めや質問への即時的な対応等、音楽的、教育的パフォーマンスの深化に多くの学習時間が費やされた。全体に集中的なスケジュールのなかで行われ、各コーディネーターが寄り添う姿勢を保持しながらタイムリーなアドバイスを与えたことで、その学習効果は顕著であった。

一方、過密なスケジュールからは心的疲労も垣間見え、「なにもしない」余裕の時間、あるいは内省によって貯め込む時間をもっと必要だと痛感した。

とくに、農山村地区などの子どもたちは、地域の歴史・文化をバックボーンとした生活を送っているので、学校や子どもの背景となっている地域の文化を幅広く学ぶ機会があってほしい。若い感性による地域文化への眼差しが、音楽創造やアーティストとしての人生観に意味を与えると考えるからである。

4. 地域でのコンサート

コンサートは、当該地域での数日のアウトリーチの最後に実施されたので、地域市民の関心を喚起するのに効果的であった。また、演奏もアウトリーチ実践の積み重ねの上に行われたので、観客へのアプローチ方法が多彩で、集中度の高いものであった。

ホールの立地する自治体によって、集客にバラツキがあったのが残念である。とくに、組織・財政上のハンディから自主事業をあまり行っていない公共ホールにその傾向がみえ、こうした施設職員とは、広報、集客等のマネジメント研修をその都度綿密に行う必要があると反省する。

5. ガラコンサート

三つのアンサンブル団体が集結して12月17日（土）に広島県民文化センターで行われた。あらかじめ主催側であるひろしま文化振興財団と連携しながら、演奏順、プログラム内容、ステージ構成と演出、合同演奏の曲目、広報デザインと集客戦略が検討された。

合同演奏は、特殊な編成に必然性をもたせること、想定する観客層の趣向性を考慮して、チーフ・コーディネーターが開始曲とアンサンブル・フィナーレの広島オーダーメイド版を編曲した。

合同のリハーサルでは、ピアニトリオ・ヴァイオリニストがアンサンブルを強力にリードし、精度の高い演奏を行った。

フロント・サイドには県内アウトリーチの経過が、写真等でディスプレイされ、バックステージではアウトリーチを実施した市のホール担当者も支援に入り、広島県、市公共ホール、アーティスト、地域創造の一体感が醸成された。

今後、これらの経験を活かして各自治体が、またその文化施設がアウトリーチとコンサートを有機的に組み合わせた音楽事業の活性化をはかることを期待したい。

プログラム作成) 動画による検証と思考の視覚化

トリオノートのメンバー個人はアウトリーチの経験が豊富であり、また、研修に入るまで事前にプログラム構成、アウトリーチに対しての考え方や向き合い方などの課題を行ってもらった。結果として非常によく考えられているものであり、数多くの素晴らしいアイデアがそこにはあった。今回の研修では、できる限りそれらを客観的事実に基づいて整理整頓することを心がけた。初日から最終日まで毎日ランスルーを行い、また、全てのランスルーを動画撮影し、メンバー、スタッフ全員で検証する時間に多くを割いた。また、思考を共有化するためホワイトボードでプログラムの構造化、フローチャート化を行い、常に全体として、個人として振り返ることのできるコンテンツを多くつくった。

最終段階として出来上がったプログラムに対し、「何を大切にしているのか」「目的はどこに向かっていくのか」をもう一度検証した。そして、1つ1つの楽曲、繋ぐ言葉、最後に伝わるモノが明確となり、トリオノートとしても、メンバー個人としても納得できる形でアウトリーチに取り組むことが出来た。

プログラムの中では、交響曲第94番（ハイドン）「驚愕」の演出、曲順、実施する意味、伝える言葉、全てが最後まで課題として残ったが、最終日前日にその答えにメンバー自ら気づき、1つのプログラムとしての骨格が見えた。

廿日市市ミッション) 今までに届けきれしていない地域（学校）へのアクティビティ

廿日市市のミッションに対応するべく、特に人数の多い大規模校への対応を検討した。プログラムの中で子どもたちを動かす仕掛けを人数に合わせてどうすべきか。直座りか椅子かをどのような基準で選択すべきか。「音楽の伝わる濃度」と「子どもが楽しい仕掛け」のバランスと配慮をどうすべきか。など、研修期間中ではできなかったより詳細な、より意味のあるプログラム作成のため、日々全体での振り返りを実施し、その完成度は高まっていった。

廿日市市のスケジュールは、初日に3回のアクティビティ、2日目に2回、3日目に1回、本公演と続いたが、結果として、本公演の準備に余裕を持って取り組むことができた。会場全体を使った演出も取り入れるなど、トリオの特性を活かし、お客様を飽きさせない満足度の高い公演を実施することができた。

広島市ミッション) 都会型：広島市中心部の小学校へのアプローチ/地域性に合わせた対応

広島市のミッションを遂行するため、学校の下見、先生との打合せと平行しフィールドワークを実施した。都会型の小学校というくりでは合ったが、対象児童の経験や、教育水準の差はかなり大きく、それに合わせたプログラム対応が今回の一番大きな課題であった。特に基町小学校では外国籍の児童も多く、言葉の問題や、文化の問題など、広島市入りする前の段階からトリオノートのメンバーと何度も打合せを行った。

初日の2回のアウトリーチ後に全ての関係者を交え、基町小学校の対策を検討した。その結果、机上の理論に基づいた変更をするよりも、今まで完成されたプログラムをぶつけることが現時点での最善解とした。その場で感じた空気をどうトリオノートが微調整していくのか、その対応力が求められる現場となったのは言うまでもない。3・4年生、5・6年生と2回のアウトリーチ実施の中で、次に繋がるアイデアが数多く生まれた。今回、基町小学校でのアウトリーチは初めてということだったが、ぜひ、この子どもたちに相応しい最善のプログラムを改良し継続して届けたいと心から思った。また、想定が非常に難しい中、トリオノートは言葉、間、表現手段等、様々な工夫を凝らし全力でぶつかったことに敬意を表したい。

広島市の本公演では会場の選択肢として、オーケストラ練習場（照明効果無し）多目的ホール（残響効果無し）があり、難しい選択を迫られたが、演奏会場を前者、楽器体験を後者とし、両会場を使用したバラエティに富んだ内容を実施。2階席からヴァイオリン（高瀬）チェロ（田辺）の登場や、客席中央で背中合わせに演奏するパフォーマンスをするなど、廿日市同様お客様を飽きさせない工夫を散りばめた。特に、楽器体験ではヴァイオリン（高瀬）が丁寧にレクチャーするなか、待っているお客様にピアノ（大野）とチェロ（田辺）がアウトリーチプログラムに近い内容を届けるなど、サービス精神に溢れた心温まる時間となった。

全体を振り返って)

【トリオノートの進化】プログラムの完成度は実際のアウトリーチの現場を踏むたびに高まっていったことは言うまでもない。特筆すべきは、その場に流れる雰囲気や、子どもたちの特性を瞬時に理解し、どんな状況下においてもより繊細に1つ1つの動きや言葉を変えられるようになったことだろう。子どもたちが音楽の扉の中にいる「奇跡の5分」。その時間に向かい、考え、導く流れを毎回のアウトリーチで実践できていた。ぜひ、これからもトリオノートとして多くの子どもたち、音楽を必要としている人たちに届けていって欲しい。

【ミッションの遂行】全ての関係者がもっと成功のイメージを共有できていれば、さらなる満足度、達成度に繋がっていたかもしれないと思うことが何回かあった。今回の私の一番の反省点。これからの課題として、その時間にできるだけ多くを費やし、研修から実践へ繋がる仕組みづくりまでを考慮した動きを自らできるようにしたい。

悩み苦しみ続けた2週間の先に見えたものは

広島セッションに参加したピエーレ弦楽四重奏団は、桐朋学園の先輩・後輩でこの事業のために組まれたアンサンブルでした。これまでもアウトリーチフォーラム事業で弦楽四重奏を担当させていただいたことがありますが、この事業のために新たに組まれるアンサンブル形態の中で、やはり弦楽四重奏が一番難しい（つまり、一つのアンサンブルとして音楽的にまとまった響きを作れるようになるまで、他のアンサンブル形態よりとにかく時間が必要という意味で）と改めて思い知らされました。6月のキャンプに始まり、終始時間との競争でした。

全体研修中にどうアウトリーチのプログラムを組み立てていくか、アプローチの仕方はいろいろあると思いますが、組み立てほやほやのアンサンブルにとっては時間との競争になるのが予想できたので、まずコンサートでメインとして演奏したい作品を選んでもらい、それをどうアウトリーチの中で使っていかかという方向で進めることにしました。そこでピエーレが選んだのが、なんとシューマンの弦楽四重奏曲第3番。キャリアを積んだ弦楽四重奏であってもプログラムに取り入れるにはある種の“覚悟”が必要な作曲家・作品であり、組んで間もないグループには荷が重すぎないかと思いましたが、メンバー全員のシューマンへの熱い想いに心動かされて、シューマンに取り組むことにしました。

ですが、そんな熱い想いを持っているはずなのに、「なぜ、シューマンのこの作品なのか？」という問いに対する答えを見付けるまではかなり長い間悩み続け、その上で出てきた答えが「シューマンが抱える様々な気持ち・感情が音楽に込められており、その中には言葉にできないような複雑なものが含まれているから」というものでした。では、これを小学4年生に伝えるにはどうしたらいいのか？ 悩みはさらに深く、複雑になっていきました。

まずは音楽と感情を結び付けて体験してもらうことから始めることにし、最初は作曲家が明らかに楽しい・明るい気持ちの時に書いた曲は、聴くとどんな気持ちになるかを体験してもらい（ドヴォルザークの弦楽四重奏曲第12番「アメリカ」より最終楽章）、次のステップとして今度は音楽を聴いて、そこから作曲者の気持を想像してみるという体験をしてもらいました（プッチーニの「菊」）。ここではさらに、同じ音楽を聴いても聴く人によって違う感情を抱くことがあり、またその場で言葉には置き換えられないような複雑な感情を得ることもあるということを指摘した上で、最後のシューマンの第3楽章では作曲家がどんな気持ちでこの作品を作曲したかを想像してもらったり、曲を聴いている間、どんな気持ちになったかを考えてもらうという流れになりました。

子供たちにとっては（特に小学3年生は）音楽を聴いてストーリーや場面を想像することはできても、それをすぐに感情にまで結び付けることは難しく、メンバー達は子供たちから飛び出してくる「感情や気持ち」ではない言葉や表現に振り回され、話を先に進めるために半ば強引な（押し付けとも感じられかねない）結論の導き方をしてしまって落ち込んで次の演奏に入ることもありました。また、回を重ねるうちに自分たちがシューマンを子供たちに聴いてもらいたいと思う理由が「音楽は言葉ではとても言い表せないような複雑なものを表すことができる、その音楽のすばらしさ」を伝えたいのではないかとということに変化し、「言葉で表せないはずのもの」にもかかわらず、子供たちに「言葉」を求めることへの矛盾を感じて悩んだメンバーもいました。

ピエーレ弦楽四重奏団はスケジュールの関係で2市を続けて訪問することになり、疑問や悩みを感じてもそれをじっくり考えて答えを出すだけの時間的な余裕がなく、悩み苦しんで暗中模索の状態のまま、もしくは6月のキャンプでとりあえず作った形にとらわれ過ぎて新たなアプローチにチャレンジする余裕がないまま2週間が過ぎてしまった感じがありました。ですが、この事業を通して彼らが得た一番大切なことは、聴いて下さる相手（それが学校の子供たちでもホールに来て下さったお客さんでも）のことを考え、その人たちのために音楽家・演奏家として自分は何をするべきなのか、自分が果たすべきアーティストとしての（社会的）役割とは何なのかを考えなければならないということに初めて気が付いたということでしょう。これまでは単純に音楽や楽器が好きだから勉強してきて、コンサートのチャンスをいただいたから音楽を演奏するという、あくまでも自分を中心にした活動が主でやってきたと思います。そのような状況の中で、今回初めて“相手”の存在を意識しその相手に向かって演奏するということは、音楽だけではない「何か」を伝えなければならないのだという、プロの演奏家として様々なコミュニティの中で求められ・果たさなければならない役割があることに気付いたという点で、プロの演奏家への第一歩を踏み出したのではないかと感じました。

アウトリーチの実施とアーティスト育成の必要性について

今までおんかつアーティストとして10年以上活動をし、ひたすら自分の努力を受け止めてもらえるにはどうしたら良いのか追求してきたが、今回初めてアウトリーチフォーラムにコーディネーターとして参加し、そもそもアウトリーチとはなんなのか、またそれを実施するという事、アーティスト育成の必要性について考えさせられた。

特に、今までおんかつアーティストとして感じてきたアウトリーチに対しての考えは、大きなアウトリーチの取り組みの中の一部に過ぎなかったという事を実感出来た事は自分自身にとって大きな収穫となった。

まずアウトリーチの実施について、通常想定される音楽教室や芸術鑑賞会といった類いの物とは大きく異なり、その地域社会に対して主催者（事業主）の趣旨（6W3H）や信頼性、アプローチ等が重要になり、単に対象者（児童や生徒等）に音楽を聴かせる、または美術や伝統芸能を観せるといった主にそのビジネス面での売り込みを買い与えるだけでは決して成立しないのではないかとといった疑問が湧いてきた。

ここで「6W3H」を理解しておきたい。

「Whay（何を）Why（なぜ）Who（誰が）Whom（誰に）When（いつ）Where（どこで）How（方法）How many（規模）How much（予算）」。

コーディネーターとして関わる事のできる事は限られているが、アウトリーチの実施にあたっては主催者側の趣旨（6W3H）、信頼性が先行され、更にはその地域への総合的な理解力が必要不可欠になるだろう。

そして地域への説明、実施場所の選出、決定後の下見（セッティング）等、アーティストからは中々見る事は出来ないが、このアウトリーチ実施前の段階で如何に準備が出来るかが重要になってくるだろう。

特に趣旨に至ってはその地域社会に於いて文化の担い手としての理解力が重要なポイントになってくる為その手腕が問われる事になる。

一方、今回アウトリーチフォーラムで関わった各主催者はそこを理解し、スムーズなアウトリーチの運営に努めていた。

また、アウトリーチ実施場所への説明に於いても、それぞれの受けとらえ方に大きな差はなく、アーティストが気持ちよく演奏しアウトリーチ活動が出来た。

この様に主催者がアウトリーチに取り組むという事は、その地域社会を創造していく事に繋がり、延いてはその地域社会の文化力、人間性の向上に繋がるのではないかとと思う。

これはアウトリーチフォーラム事業を受け入れる体制やその地域社会に対しての計画性の一致、また（一財）地域創造が今までこの事業を継続してきた事への信頼性、有効性があっての事だろう。

昨今アウトリーチという言葉だけが一人歩きをし、主催者の趣旨が明確ではなかったり、アーティストがそれを理解していないケースがあり、今後アウトリーチをどの様に普及して行くか模索していく事が必要になるだろう。

次にアーティストの育成について、アウトリーチフォーラムは私自身がおんかつアーティストのオーディションを受けた頃はなかったが、実際に今回「Lumie Saxophone Quartet」と共に参加をし「アウトリーチとは…」を追求出来た事はこれから彼女達の音楽家としての活動の礎になるだけではなく、将来を担うアウトリーチアーティストの育成に大きな意味があるだろう。

今回はアウトリーチ対象者に対して「伝えるとは・・・」を徹底的に考えてみた。

それは、彼女達が広島で合宿をするまでの自分たちを理解するところから始まった。

4月のオリエンテーションの際に自分たちの持っているレパトリーをフォルダ分け（ジャンル分けではなく）しておいて欲しいと宿題を出し、合宿間近になってプログラムを組む様に指示を出した。

もともとアウトリーチフォーラムに応募する前から演奏活動を始めていたグループなのでレパトリーに心配はなかったのだが、フォルダ分けをどのようにしているのか知りたかったので合宿に向けてステップを踏んでみた。

合宿に入ってからは組んできてもらったプログラムを基に、「Lumie Saxophone Quartetとして伝え

たい事は…」をまず紐解いていった。

流石に普段から活動しているだけあって、その時点からアウトリーチにおいて伝えたい事がはっきりとしていたが、それを伝えるツールを持ち合わせていなかった。

私自身が長年アウトリーチ活動をしてきたので、答えを押しつけてしまうのではないか？という恐怖と戦いながら彼女達と共に「どうしたら伝わるのか…」をテーマにほぼ訓練の毎日を送った。

実際には時間の感覚、そして伝える言葉の選択が課題となり、NASAが訓練で実際に取り組んでいる手法を取り入れて実施した。これは、二人一組になり二人の間に仕切りをつくりお互いに見えない状態から、片方は目の前にある絵（図形）を言葉のみを使い制限時間内に相手側に同じ絵（図形）を描いてもらおうと言うもの。

この手法を使う事で話しをする際の時間の感覚と言葉の選択の感覚がつかめるようになる。

プログラム構成に関しては一部分入れ替えをしたものの当初組んできたプログラムの大きな修正はなかった。流石である。

この様におんかつのオーディションを受ける前に勉強をし、学んだ事をすぐに現場で試し修正していく事が出来る事で、おんかつアーティストのオーディションを高いレベルで受ける事が出来、それが将来のおんかつにつながって行くのであれば、その有効性は疑う余地さえ見せないだろう。羨ましい事しきりである。

今回、アウトリーチフォーラムにコーディネーターとして参加した事で、アウトリーチに於いては主催者、アーティスト、受け入れ側の三者がそれぞれ趣旨や計画性を持ち、互いにそれを理解し「伝えたいこと」を明確に持つ必要があると確信が持てた。

そして標題に掲げたように、アウトリーチの必要性和アーティストの育成が必要不可欠である事を実感した。

アウトリーチフォーラムのその先に

トリオ・ノートが向かったのは、廿日市市と広島市。人口10万人規模で宮島を中心に観光業が栄える廿日市市、そして、人口100万人規模の政令指定都市であり歴史ある都市・広島市。どちらの市も経験豊富な団体であったため、今までの活動を振り返り、このフォーラム事業では今までは手が届かなかった部分は何かを考えるところからスタートした。

まずは11月に訪れた廿日市市。以前よりアウトリーチを行ってきた経験から、学校に希望を募り、普段の事業ではスケジュール上なかなか伺う機会の少なかったホール遠方の小学校を優先的に実施することにした。3日間で4校（大野東小学校4年生、津田小学校5・6年生、宮内小学校6年生、四季が丘小学校4年生）6回のアウトリーチを行った。学校の希望により、大野東小学校と四季が丘小学校は60名ほどの実施になり、想定した人数よりも多かったが、結果として、人数や学年に応じて子どもたちの反応が大きく違うこと、受け止め方や進行の仕方のバリエーションをもつことなど多くの改善点を気付かせていただいた。

ご担当の田雁さん（(公財)廿日市市文化スポーツ振興事業団）はこの事業を通じて「一度きりではなく、何年もかけて一緒に事業をつくる関係性をアーティストとつくりたい」という思いがあったため、他の職員も巻き込み、アーティストと事業について語り合う時間を意識的にとるように心がけているようだった。アウトリーチの内容から今後の事業について、トリオ・ノートと厚い信頼関係を築けたことがこのアウトリーチフォーラムで得たことのように思う。

そして2週間空けて、次に訪れた広島市。広島市は区立、県立、民間のホールがあるため、毎日どこかでコンサートが行われている背景が、アウトリーチ先やホール公演を組み立てることに大きく影響した。アウトリーチ先は、多くある小学校の中から改めてホールの近くの小学校に赴き、ホールと親しみを持ってもらいたいという思いから、ホールから徒歩でも通える3校（中島小学校4年生、基町小学校3～6年生、神崎小学校4年生）に決定した。中島小学校、神崎小学校では、廿日市市でのアウトリーチで培った対応力を発揮し、子どもたちとよくコミュニケーションがとることができ、子どもたちの笑顔が輝くアウトリーチであった。基町小学校は、小規模校かつ外国籍の子どもたちが多いということが、ホールにとっても地域創造スタッフにとっても初めての取り組みとなった。今回のフォーラムの枠組みの中では、アーティストとコーディネーターが現地に伺える機会は1回のみだったが、今後継続でき、時間や人手をかけられるのであれば、演奏を聴いてもらう前に、事前に何度か訪問しアーティストと子どもたちが交流する時間をつくりたいと強く感じた小学校であった。

トリオ・ノートが作り上げたプログラムは、洗練されたピアノ・トリオの魅力を立体的に楽しめる工夫があり、それぞれの楽曲を聴きやすいトークを加え、問いかけることでその場にいる人たちと感情を分かち合うことをよく考えたものだった。また、ハードなスケジュールの中でも、毎回のアウトリーチが終わるたびにメンバー同士で言葉遣いや段取りの確認・修正、演奏面の振り返りを怠らず、小さなことも妥協せずに向き合い続けたことが、更にプログラムの完成度を高めたことは間違いない。そして、事業担当となった廿日市市・田雁さん、広島市・崎村さん（(公財)広島市文化財団）は、普段は優しく、時には厳しく、いくつもの問題提起をくださったことで多くの視点を学ぶ機会をいただけたと思う。

ホール、アーティスト、小学校、このトライアングルを間近で見させていただき、アウトリーチ活動に必要なものが何か少し見えてきた気がする。それは、互いの思いや能力を認め合い、尊重し合う「関係づくり」である。その「関係づくり」こそが、関わる人々（ホール、アーティスト、学校、子どもたち）のそれぞれの良い面を引き出すことに繋がり、事業をより立体的にし、アウトリーチを行う意味を強固なものにするのだろう。おそらく、今後もアウトリーチ活動をされていく廿日市市・広島市にはあたたかなアウトリーチの輪が広がることを期待したい。

「スタッフと共に創り上げるアウトリーチ」

11月29日から12月10日までの12日間で、広島県庄原市と呉市でのアウトリーチとコンサートを行った。通常は市町村毎に別々の日程で実施するのだが、今回は日程が連続していた為、山間の庄原市から瀬戸内海に面する呉市までの約120キロの大移動を含んだ長期間の実施となった。

アーティストは、ヴァイオリンの伊師さんを中心として、今回の事業の為に結成されたピエーレ弦楽四重奏団。同じ大学出身で、お互いの顔は知っていたものの、このメンバーでカルテットを組むのは初めてであり、それぞれのアウトリーチ経験はそれほど多いわけではないメンバーであった。そのため、キャンプ中に曲のレパートリーを作り、その上でアウトリーチについてイメージを膨らませ、アウトリーチ用のプログラムを考えなければならなかった。限られた時間の中で、ピエーレらしいレパートリーを作り、アーティスト一人一人の個性が際立つアウトリーチプログラムを作り上げ、そしてスムーズに実践することができたのは、実施市町村である庄原市と呉市、そして公益財団法人ひろしま文化振興財団のスタッフのみなさんの懐の深いサポートがあったおかげであったと思う。今回のアウトリーチでは、アーティストの努力もさることながら、若手アーティストの努力を見守り、それを支えるスタッフのみなさんの活躍が重要なポイントであったと感じた。そこで、ひろしま文化振興財団、そして庄原市と呉市のスタッフのみなさんの事業へ関わり方を中心に報告したい。

庄原市民会館は特定非営利活動法人庄原市芸術文化センターが運営。自主事業を積極的に行っており、アウトリーチ経験館であった。担当の三玉さんは、研修会での話やキャンプの様子を見て、今までに実施したことのあるアウトリーチとは、今回の事業が異なるものであるということにすぐに察知し、学校選びに反映してくださった。庄原市で今まで実施していたアウトリーチは、体育館などで全校児童向けに実施するいわゆる出前コンサートのスタイルのもので、今回ピエーレが取り組んだ子どもたちとのコミュニケーションを重視するプログラムとは全く異なるものであったのである。三玉さんは、小さな会場（音楽室など）、少人数（1～2クラス）、短い時間（45分）というアウトリーチの原則を理解し、協力してくれそうな学校であることを条件にし、学校選びを進めてくださった。アーティストが安心してアウトリーチに取り組めたのは、三玉さんが学校側への事業説明や、事前打ち合わせを綿密にしてくださったおかげである。学校との関係づくりは一朝一夕でできるものではない。アウトリーチ実施までに、ホールと学校との関係がどのように築かれてきたのかが、アウトリーチ実践に大きく影響してくるということに改めて感じた。

呉市文化ホールを運営している公益財団法人呉市文化振興財団は、おんかつの経験があり、その経験を生かして登録アーティストによるアウトリーチ活動に取り組もうとしている、アウトリーチに意欲的な財団である。担当の小笠原さんは、顔合わせの時から、アウトリーチやコンサートのアイデアをいくつも提案してくださり、そして、キャンプでは、経験者ならではの視点で子ども達の反応を想定したアドバイスをしてくださるなど、プログラムを作るアーティストにとって、とても貴重な存在であった。アウトリーチ先の小学校選びでは、今回の事業を通して、アウトリーチを実施したことのない学校との新しい関係作りを試みたいということで、多忙な仕事の合間を縫って、学校に掛け合い、実施経験のない学校でアウトリーチができるようセッティングしてくださった。他の自主事業や業務をいくつも抱えた中で、新しい学校を探すのは相当骨の折れることである。なるべく多くの呉市の子ども達に演奏を届けたいという、小笠原さんの熱い想いが、学校選びからも伝わってきた。コンサートでは、呉市の小学校で必ず歌う呉市歌を入れてはどうかとアイデアをいただき、アンコールで演奏した。呉でしか聴けない、呉ならではのコンサートになり、ピエーレにとっても忘れられないコンサートになったと思う。

最後に忘れてはならないのが、市町村とアーティストをつなぐひろしま文化振興財団の存在である。メイン担当である高井さんは、6市町村の担当者と連携を取り、各市町村でよりよいアウトリーチが実施できるよう調整をしてくださった。庄原市、呉市の担当者が地域の子どものことを第一に考えて、アウトリーチを実践できたのは、高井さんの人柄に加え、細やかな心配りと、日頃の担当者との関係性の構築の結果だと感じた。アウトリーチフォーラムは、多くの人が関わる事業のため、一人一人の役割を見極めるのが難しい。高井さんの前に出過ぎず、遠慮し過ぎることもない絶妙なリーダー力が、今回の事業をうまくまとめるポイントとなったのではないかなと思う。

アウトリーチは、アーティストだけが行うものではなく、その場に関わる人々も含めて実践されるも

のであると思う。各担当者をはじめ、現場で関わってくださったスタッフのみなさんがいなければ、アウトリーチは成立しない。今回は、スタッフの熱意やサポートの重要性を実感したフォーラムであった。

新しいホール、若いアーティストのこれから

日本人にとって特別な位置にある広島。今年度は特に、歴史的に見ても大きな意味を持ち、スポーツの面でも大いに盛り上がっていた広島。そんな地でアウトリーチ・フォーラムが開催された。

ルミエ・サクソフォン・カルテットは、フォーラム応募前から結成されているチームでありながらも、平均年齢が23歳、メンバーの2人が現役の学生という若々しいチームであった。同時に、今回訪れた市町村2箇所のホールもオープンして日が浅く、若い！という共通点があった。

ルミエ・サクソフォン・カルテットのアウトリーチ・テーマは、“伝える”という事。これは、フォーラム以前から演奏機会を多く持っていた本チームならではのテーマだったと感じた。6月のキャンプ時にも、自分達のアウトリーチで何を伝えたいのか？どのように伝えるのか？自分達ならではのアウトリーチとは何か？をコーディネーターと徹底的に話し合い、苦しみながらも答えを産み出しているように見えた。チームとしてのレパートリー曲を多々持っていた事もあり、練習時間よりも話し合いに多くの時間を使っていた。

その成果が、9月、11月に訪れた東広島市と三次市で明らかになった。

広島県の中央に位置する東広島市は、交通網の充実と共に、大学を中心とした学術研究所の集積や企業の立地なども盛んな人口約20万人の都市である。同じ市内であっても中心部とそれ以外では、芸術や文化の浸透度合いに大きな温度差が激しいという現実を抱えており、本事業では、担当の能見さんの願いから、中心地から少し離れたところに位置する小学校5校で実施された。5校のほとんどが小規模校であったため、全生徒へアウトリーチを実施する学校もあった。それぞれの学校の特色が濃く、中には生徒全員が年間通して自分の歌を持つという独自の文化を持つ学校もあった。

アウトリーチでは、会場入場から工夫を凝らした演出、小芝居を入れながらの楽器説明等、次々に発信される仕掛けに生徒たちは終始釘づけになっており、サクソフォンの仕組みについても十分に理解できる内容だったと感じた。勿論、演奏については、4本それぞれのサクスの魅力を存分に聴かせつつ、アンサンブルの面白さがわかりやすいプログラム構成で、音楽的にも十分に堪能できたと思う。また、プログラムの中で、生徒が演奏に参加できるシーンも導入しており、非常に生徒たちの満足度は高いように見えた。

本公演で演奏した東広島芸術文化ホールくらはは、2016年4月オープンであり、近隣の方々のホールへの注目度も高く、非常にたくさんのお客様にお越し頂いた。今後どのようにして、ホールを地域に根付かせるのか。これが課題であると能見さんは仰っていたが、終演後のアンケートやサイン会の様子から、本公演は、サクソフォン・カルテットの魅力を存分にお客様に伝えることができた公演だったと感じた。

続いて、11月に訪れた三次市。こちらは広島県北部に位置し、北部は島根県と隣接している人口約5万人の都市である。中心地にある三次市民ホールきりりは、2015年2月オープンとまだ新しいホールであるが、担当者の竹内さん、前岡さんはじめ、スタッフの方々がご熱心にご尽力頂き、本公演は、沢山のお客さんに聴いて頂く事ができた。中には、アウトリーチ先の先生もいらして下さり、温かいお言葉をかけて頂き、よい感触を残せたのではないかと感じた。これは三次市スタッフの素晴らしい団結力にあったと強く思う。

アウトリーチでは、市内4校の小学校で実施し、9月のアウトリーチプログラムから更に工夫を加えて行った。9月の東広島市でも同様であったが、ルミエ・サクソフォン・カルテットのアウトリーチは、生徒だけではなく、先生からの印象がとてもよいのが一つの特徴であると感じる。サクスという日常では耳にする機会が少ない楽器という事もあるが、生徒とのコミュニケーションの取り方、サクスという楽器の魅力を演奏だけではなく、様々な手法でアプローチしている姿に好印象を持たれていらっしやるようだった。終演後も先生よりアーティストを交えたクラス写真撮影の依頼があり、非常に良い空気間の中で行われた。

ルミエ・サクソフォン・カルテットにとっての今回のアウトリーチ事業は、非常に大きい挑戦であり、模索、産みの苦しみの連続だったと思う。“自分たちがアウトリーチをする理由”から考え初め、それをどのように具体化するのか、本当に苦しい日々が続いたと感じた。しかし、彼女たちの凄さは、それらを模倣ではなく、最終的に“自分達ならでは”を自力で見つけることが出来る事である。ルミエというチーム名は、光という意味に由来している事だが、キラキラとした光だけではなく、芯の強い光も同時に持ち合わせており、またその光のもとに周囲のスタッフの方々はじめとした周囲を大きく巻き込む力を持ったカルテットであった。

東広島市、三次市という若く新しいホールでの今回の事業は、若いアーティストにとっても、ホールにとってもよい一石を投じる事が出来たのではないであろうか。今後が楽しみな広島セッションであった。

◎広島県の状況

- ・県内23市町（14市9町）のいずれも公共ホールを保有している。その運営は指定管理が9市、直営が5市9町である。
- ・アウトリーチの実施は、指定管理施設が（一財）地域創造登録アーティストと連携したり、公演事業に関連したり、独自であったりと様々であるが、直営施設ではあまりない。
- ・市町文化行政担当部局が実施することはあまりなく、学校が単独で実施することはあるが、実施地域が固定化されている。
- ・企業・大学等が学校等へアーティストを派遣するケースはあるが、単独であり組織的な定期実施でない。
- ・そのため、アウトリーチの実施・内容には地域差がある。

◎実施目的

- ・当財団はホール運営を行っていないが、平成16年度から広島県の受託事業として「文化施設職員等研修事業」を実施している。平成25年度から“アウトリーチ”をテーマに取り上げており、その集大成としてアウトリーチフォーラムの実施を目指した。
- ・県内ホール職員等のスキルアップが目的であるが、当財団の今後のアウトリーチ支援体制を検討する機会とした。
- ・また、アウトリーチの意義を広め、そのプログラムへの関心を高めることを目的とした。

◎実施状況

《平成27年度》

- ・県内23市町の文化行政担当課へ事業説明を実施した。
→どの市町でも少人数で実施するアウトリーチに理解や関心があり、実施における課題は予算・人的体制が大半である。
- ・シンポジウムでは、アウトリーチ実施の基礎となる講義と演奏家とダンサーのコラボレーションによる模擬アウトリーチを体験できた。
→アウトリーチフォーラム後を見据えた幅広いアウトリーチの可能性を知る機会となった。

《平成28年度》

- ・アウトリーチ研修をガラコンサートへ足を運びやすい近郊の熊野町・坂町の小学校で実施した。
- ・また実施時には、市町村公演事業担当者や地元登録アーティスト等多くの見学を受け入れてもらった。
→学校との関わりでは、時間割の変更や備品の借用などの実務が主となり、プログラムについてあまり連携できなかった。
→一方で、今後のアウトリーチを担う地元アーティストとの連携を深めるきっかけとなった。
- ・市町村公演事業は、アウトリーチの実績を豊富に持つ広島市、今後アウトリーチの充実を図る呉市・廿日市市、独自にアウトリーチを展開している庄原市、新ホールが誕生した三次市・東広島市の6市で実施した。
→どの実施団体も地域の特性や実状に沿った目的があり、充実した市町村公演事業であった。
- ・ガラコンサートでは、アウトリーチ研修や市町村公演事業で関わった方の来場に注力した。構成等では合同演奏を希望した。
→合同演奏に“広島らしさ”を加えていただき、一体感や高陽感のある公演となった。

◎所感

- ・3組のアーティストは三者三様で皆素晴らしく、フォーラムアーティストとして活動していただけたことは、実施県として大変幸運であった。
- ・アウトリーチフォーラムはコーディネータ、アシスタントコーディネータ、（一財）地域創造スタッフと多くのサポートがあり、実践ではあるがそれを通じて実施関係者に様々な気づきをもたらしてくれる。

-
- ・その中で、コーディネータがアーティストや市町村公演事業担当者の想いを汲み取ったり、提案に応えたりしながら、アウトリーチとコンサートをより充実したものへと導く過程を間近で体験できたことが大変貴重なものとなった。
 - ・当財団としては、事業を実施するのに必要な機材や人的体制が必ずしも十分と言えない中、多くのサポートをいただき乗り越えることができた。今後のアウトリーチの普及・支援でも同様の課題があるが、今回の事業を通じて、各機関との連携により実現することが可能と感じている。
 - ・また、アウトリーチ研修を実施した坂町で「おんかつ事業」を実施する動きがあり、今後のアウトリーチの広がりにも期待がもてる。
 - ・振り返ると、中村先生がシンポジウムや全体研修、様々な場面でおっしゃっていたことに立ち返ることになる。文化事業の在り方や公共ホールの役割、アウトリーチの意義や効果、それらの課題。アウトリーチの実施が目的とならないよう、足元を固めた取り組みを続けていきたい。